

故。是故一切無非性涼。
 と云へり。蓋し性起唯淨の義に依るなり。然るに清涼大師に依るに、華嚴經疏
 演義鈔第十九上記第一輯第九卷に、晉譯華嚴經第十一夜摩天宮菩薩說偈品左十紙の
 如來林菩薩の如心偈中、心佛及衆生是三無差別と説ける文を以て、是の文に對配
 すべき唐譯華嚴經第十九升夜摩天宮品の應知佛與心體性皆無盡の文と、比較研
 究して、晉經に心佛衆生の三法を並び擧げたる。唐經には唯だ佛と心との二法を
 擧げ。又晉經に無差別と云へる、唐經には無盡に作れり。此の義如何と云ふに、
 蓋し唐經に心と佛との二法の無盡を擧げて、衆生を擧げざるは、是れ衆生は盡く
 ることあるが故なり。一切の妄法は、無始より以來真に迷ふより起る。無始よ
 り以來真に迷ふより起るが故に、其の始めあること無しと雖も、其の終期は必ら
 す之れあるべし、是れ無盡と云はざる所以なり。然るに若し是を晉經の三法に
 對望せんか、三法等しく無盡なりと論せらるべし。然るに此の三法無盡の中に
 は、同じく衆生有盡の義理を含蓄せん。之を晉經の無差別に對するに、盡と不盡
 と俱に無差別の義を成立すべし。即ち之に依りて、心佛の淨と衆生の染と、本と

是れ無差別なりと論ずることを得べしと爲し、

如世五蘊從心而起。造諸佛五蘊亦然。如佛五蘊餘一切乘生亦然。皆從心造。
 然心是總相。悟之名佛成淨緣起。迷作衆生成染緣起。緣起雖有染淨心體不殊。
 佛果契真同真。無盡妄法有極故不言之。若依舊譯云、心佛與衆生是三無差別、
 則三皆無盡無盡即是無別之相。應云、心佛與衆生體性皆無盡。以妄體本真故亦
 無盡。是以如來不斷性惡。亦猶闡提不斷性善。又上三各有二義。總心二者。
 一染。二淨。佛二義者。一應機隨染。二平等違染。衆生二者。一隨流背佛。
 二機熟感佛。各以初義成順流無差。各以後義爲反流無差。則無差之言含盡無
 盡。又三中二義各全體相收。此三無差成一緣起。
 と説き。又釋して、

然心是總相。下出心佛衆生三之別相。心是總相者。法界染淨萬類萬法不出
 一心。是心即攝一切世間出世間法故名總相。餘染淨二緣各屬二類。然總說十
 法界中六道爲染。四聖爲淨。佛果契心下釋其下半。上有三法而但說心與佛二
 法無盡。不言衆生者。謂衆生有盡故。心即總心以真爲體。本自不盡佛果契心

始本無二同一圓覺故亦無盡。迷真起妄無始有終不言無盡。然其佛果契心。則佛亦心造。謂四智菩提是淨八識之所造故。若取根本即淨第八。若依真諦三義。此佛淨識稱爲第九。名阿摩羅識。唐三藏云。此翻無垢。是第八異熟。謂成佛時轉第八成無垢識。無別第九。若依密嚴文具說之。經云。心有八識或復有九。又下卷云。如來清淨藏亦名無垢智。即同真諦所立。第九以出障故不同異熟。爲九有由。又真諦所翻決定藏論九識品云。第九阿摩羅識。三藏釋云。阿摩羅識有其二種。一者所緣即是真如。二者本覺即真如智。能緣即不空藏。所緣即空藏。若據通論此二並以真如爲體。釋曰。此二即起信一心二門本覺在生滅門。一心即真如故。故論云。唯是一心故名真如無論八九。俱非凡識。即淨識所造四智三身等。若依舊下二會普譯。則三皆無盡而二經互闕。唐闕衆生。普闕無盡。故有第三別更立理。應云下是第三也。若取圓足合如是譯。則三事皆具無差之相。又得顯明。以妄體下出妄無盡之由。是以如來下引例證。此即涅槃經意。天台用之以善惡二法同以真如而爲其性。若斷善性即斷真如。直不可斷故云性善不可斷也。佛性即是真實之性。真實之性即第一義空。如何可斷性惡不

斷。即妄法本真故無盡也。又上三下第四別開義門。則却收普經以爲盡理。謂唐經無盡但得二法。又唯約淨。次言三皆無盡又遺有盡之義。今云無差。盡與無盡俱無差也。亦顯染淨本無差矣。言心總二義一染二淨者。淨即自性清淨。染即本來之染。染淨無二爲一心耳。言各以初義成順流無差者。衆生本有染故隨流背佛。佛隨其染。豈相違耶。逆順例此。又三中二義下第五染淨融攝可知。と云へり。真とは真如なり。佛とは還滅善法なり。衆生とは流轉妄法なり。眞體既に無盡なり。従つて妄體亦無盡ならざるべからず。妄體既に無盡なり。果して然らば。性惡不可斷の義理は實に否定すべからざる大事實なりと云はざるべからず。清涼大師の性惡説たる其の所立誠に故あるなり。然るに之を賢首大師の義に比較するに賢首大師は華嚴經第三十六寶王如來性起品に佛果の大智本來衆生の心中に遍在す。是の故に一切衆生の日常分別の念念皆如來果智の所起染淨森羅の萬法は悉く佛智所現の顯像なりとなすを以て此の所現の萬象を以て能現の果智に同せしめて性起は唯淨なりと爲すに對し。清涼大師は能現の果智を以て所現の萬象に同せしめて毘盧の頂上より阿毘の依正に至

る迄、皆悉く法性真如の顯現する所、染淨の二法は、同じく真如を以て、所依と爲すが故に、若し性惡を斷せば、真如を斷す。然るに真如は不可斷なり、性惡も亦然らざるべからずと爲す。即ち一は從法向機。海印三昧、一時炳現を説きて、性起唯淨と説き。一は從機向法。行者の觀門實修の相に就きて、性惡の法門を談するが故に、所謂是れ義門の相違にして、二者相依りて以て一完壁を成し。賢首大師は、法門の建立を要と爲して、行者の觀門實修を清涼の開顯に待ち。清涼は即ち賢首の微意を承けて、益々嚴家の法門を大成せる者と云ふべし。而して清涼大師の性惡の法門を見るに、世の五蘊の心よりして起るが如く、諸佛の五蘊を造るも亦然かるなり。佛の五蘊の如く、餘の一切衆生も亦然かり、皆心より造る。心は是れ總相なり。之を悟るを佛と名づけて、淨緣起を成じ。迷ひて衆生と爲りて、染緣起を成す。緣起に染淨ありと雖も、心體は不殊なりと説ける。是れ其の性惡説たるや、總該萬有即是一心の上より談するものにして、萬有とは依心色心萬差の諸法を云ひ。此の諸法を一心に該羅抱容するが故に、爰に性惡不斷の義あり。古哲の所謂天台家より一理隨難の難ある是の故なり。第五祖圭山大

師の性惡を論ずる、全く清涼大師に同じく、詳かなることば。華嚴經普賢行願品別行疏第一^{左九紙}、圓覺經畧疏卷上之二^{左六紙}、同畧疏之鈔第七^{紙十七}等に見えたり。學者披見すべし。

其三 華嚴の性起と天台の性具

上來既に嚴家の要義たる性起と緣起との二門の要旨を説述し終れり。然るに嚴家には、或は法性の具徳と云ひ、或は性海具徳と説き、或は圓明具徳と談じ。乃至華嚴經問答卷下^{紙十五}には、性起は即ち本具の性にして、緣に従ひて有ならず。緣起と言ふは、此の中之に入るの近方便なり。法は緣よりして起る、緣起は無自性なるが故に、本具の性を起す。起と言ふは、其の法性離分別菩提心の中に現前し、在るが故に、以て起と爲す、是れ即ち不起を以て起と爲す。其の法の如く、本具の性なるが故に、起と名づくるのみと説きて。性起は本具の性なり、此の本具の性より、緣に従ひて森羅の萬有を生起するを、緣起と名づくとし。清涼大師は、性起性惡不斷の義を談じて、甚しく天台家の性惡の法門に似同し。若し性起の尅

實門に約すれば、殆んど台家の十界互具の法門に同じく、其の簡ぶ所なきが如し。故を以て古來の先徳中、動もすれば、性起性具の法門を混同して、性起性具同一なりと説くもの甚なからず。華嚴寺鳳潭和上の華嚴五教章匡真鈔第一右紙に本宗所依の大經たる華嚴經の華嚴の二字を解して、更に他釋あり。即ち性具の華を全ふして、修徳の嚴飾を起し。修徳の華に即して、全く性起を嚴ると云ひ。又同紙右に、佛小相光明功德品に、一斷一切斷と説けるを釋して、實に斷すべき無し。煩惱も清淨なるを以ての故に、衆生及び煩惱一切皆是なり。性起に非ること無し。若し性に一切を具せずんば、奚ぞ一切性起となさむや。然るに嚴家に性起と云ふは、起は謂く不起縁に寄せて起を顯はすのみ。實は即ち起は具の異名、即ち理造の義なりと云ふ。是れ性に具せずんば起らず、起れば必ず性に具す。故に性起性具是れ一なりと論じ。甚だしく華天兩家の法門を混同せると云はざるべからず。蓋し天台家は、所謂諸法實相の法門を以て其の宗旨とし。専ら當體實相色心無作の法門を談するが故に、一切の諸法は、心より生ずるものにも非ず、亦色より生ずるものにもあらず。塵塵法法、本來如是如是なりとして、更に縁起の

本を立つること無し。然るに嚴家は唯心縁起の法門なれば、諸法の本源を立て、一心法界と爲し。其の一心に森羅の萬象を含藏して、宇宙の萬象は此れより開展せりと爲す。即ち心性に本來法爾として、具有せる徳が、因縁に依りて顯現し、茲に此の現實界を生起せるなり。而して先きに説く縁起の法門とは、此の因縁生起の状態、即ち宇宙開發の相狀を説くものにして、性起の法門とは、其の宇宙が、未だ縁起し、開發し來たらざる先きに、既に其の體性に、宇宙萬有が開展すべき素質を有することを道破せるものなれば、之を大乘起信論の所明に徴すれば、縁起門は、即ち心生滅門に當り。性起門は、心真如門に當ると云ふべし。華天兩家の依りて、宗義を建立する所以は是くの如し。是の故に嚴家に性起を談じ。台家に性具を談ずるもの、必ずや其の差別なかるべからず。即ち天台家は、諸法實相の法門にして、宇宙森羅の塵塵法法、本來如是如是と論するが故に、其の性具と言ふは、性惡造業の凡夫の妄心に、本來三千の諸法を具するの意なり。然れば是れ在纏の因相と云ふべし。而して嚴家は唯心縁起の法門にして、一心法界の縁起を談するが故に、其の性起と云ふは、一切衆生を引き上げて、佛出纏の果相とし

て、生佛互攝の名目を立て、談するなり。然れば華天の兩家は、在纏出纏の別ありと云ふべし。又天台の性具は、十界の性各々三千の諸法を具すと云ひ、華嚴の性起は、緣起の性起に約するが故に、緣起の諸法は、本來無自性の故に不起なり。不起なれば性起なりと、緣起の起を押へて、直ちに性起不起の起となすなり。然れば華天の兩家は、根本と枝末との差別あり。又天台の性具は、眞妄相對して色心各々の眞家の上に、三千の諸法を具すなり。然るに嚴家の性起は、眞妄俱絶にして佛果の眞性より用を十界の諸法と起すと談するが故に、其の起りたるが儘即ち果性の眞性にして、其の體より云ふも、用より論するも、唯だ是れ一眞の性なり。即ち華天兩家の所談に、是くの如きの差異あることを知るべし。長泉律院普寂和上の華嚴五教章衍秘鈔第一紙左八に、別教一乘の緣起、乃ち佛及び普賢の境界は、若し大判すれば、則ち佛の境界は不可説なり。普賢の境界は、是れ可説の分なり。若し細論すれば、則ち因果各々可説不可説なり。此の二無二なるが故に、普賢の緣起は、起即ち不起、不起は即ち性起、性起は即ち如來なり。當さに知るべし、不起にして、起なるは、是を緣起と爲すなり。起にして、不起なるは、是を緣起と

名づく。一切の凡夫の遍計所執の諸法は、全く此の趣き無し。大解大行離分別菩提心より已去、分に此の理を顯はし、證入位に至りて具體現成す。是を普賢緣起と名づく。乃至、性起緣起は、乃ち華嚴の肝心、佛教の樞柱なり。解せんと欲する者は、應さに探玄十三、十六を讀みて、章編三絶すべしと云へり。實に緣性の二起は、嚴家の極談、佛教の樞柱たり、深く研究せざるべからず。

第三章 十玄緣起無礙法門義

第一節 十玄緣起の本據起原及び相承

第一項 十玄緣起の本據及び起原

其一 十玄緣起の本據

凡そ宇宙森羅の諸法、即ち一心法界を觀るに、四種の義相あり。事法界。理法界。事理無礙法界。事事無礙法界。即ち是れなり。斯は前に既に説明せるが如し。而して事事無礙法界とは、既に説明せるが如く、宇宙森羅の萬象は、事事物物即ち法性にして、一塵一法も、悉く圓融無礙、即ち自在ならざること無きこと、譬へば湛然たる水の千態萬狀の波濤を起すに、其の波と波と、相即融通無礙にして、無礙自在なるが如く。又、金器と金器とを相望するに、彼此全く無礙にして、同一融即するが如し。是を緣起無礙の妙理と云ふ。是くの如く、一心法界、即ち宇宙森羅の

萬象は、事事互に相即し、物物互に融通して、無障無礙なり。是くの如き深理は、實に幽玄高妙にして、容易に窺知し難きが故に、今且らく十門を設けて、詳かに其の義を分別し。又、重重無盡の深義を表す故に、十玄の名あり。緣起とは、緣に依りて生起したる所緣起にして、因緣和合して生起せる、依他の諸法、即ち一切の色心等の事法なり。是の一切色心等の事法は、一塵一法、皆悉く十玄を具足して、即ち無礙自在なるが故に、無礙法門と云ふ。華嚴五教章指事記卷中本_{紙左}二十五に、一乘無盡の緣起は、義海宏遠、微言浩瀚なり、略して十玄門を擧げて、無盡の緣起を顯はす。是の故に十玄緣起と名づくこと云ひ。華嚴五教章通路記第二十六に、十玄緣起無礙法門義とは、玄は謂く深奥、即ち深邃奥蹟、涯底高卓、皆是れ玄の義類なり、横豎上下、皆玄ならざること無し。此の十玄門は、即ち四法界の中の一にして、是れ事事無礙法界なり。此の事事鎔融、無礙法界門は、甚深廣大なり、故に總じて玄と言ふ。四法界は、皆甚深の法なりと雖も、三の異門を除きて、其の嘉號を立つ。今法性融通、緣起相由等に由るが故に、事事相即し、融通無礙なり、分限隔別障礙の法、即ち入逼容不可思議なり。諸の義門の中に、深奥超越するは、事事無礙法界に如

くは無し、是の故に此の門を特に玄と名づく。緣起と言ふは、是れ依他の法、因緣和集して生起する所なるが故に、今此の緣起は是れ所緣起なり。其の因の六義は、是れ能緣起なり、親因緣種、能く現を生ずるが故に、此の所緣起の諸法、方さに總じて十玄を具足して、即入無礙なり。故に緣起の法の上に、十玄無礙圓融の義理法門を具足す。故に無礙法門義と云ふなりと説けり。蓋し十玄緣起の法門は、華嚴教學の極談、稱性の大法門にして、其の基く所全く釋迦文佛、海印三昧所説の大方廣佛華嚴經に在り。至相大師は、華嚴一乘十玄門初紙に、

明一乘緣起自體法界者。不同大乘二乘緣起。但能離執常斷諸過等。此宗不爾一即一切。無過不離無法不同也。今且就此華嚴一部經宗。通明法界緣起。不過自體因之與果。所言因者。謂方便緣修體窮位滿。即普賢是也。所言果者。謂自體究竟寂滅圓果十佛境界一即一切。謂十佛世界海及離世間品明。十佛義是也。問。文殊亦是因人也。何故但言普賢是其因人耶。答。雖復始起發於妙慧。圓滿在於稱周。是故隱於文殊。獨言普賢也。亦可。文殊普賢據其始終。通明緣起也。今辨此因果二門者。圓果絕於說相。所以不可以言說而辨。因即

明其方便緣修。是故略辨也。問。不思議法品等亦明果德。何故得於因門説耶。答。此等雖是果德。對緣以辨果。非是究竟圓寂之果。是故與因同一會説也。今約教就自體相辨緣起者。於中有二。一者舉譬辨成於法。二者辨法會通於理。所言舉譬辨者。如夜摩天會菩薩雲集品説云。譬如教十法增一至無量。皆悉是本數智慧故差別也。

と云ひ。華嚴五教章卷中紙左に、十玄緣起無礙法門義第三に、

夫法界緣起。乃自在無窮。今以要門略攝爲二。一者明究竟果證義。即十佛自境界也。二者隨緣約因辨教義。即普賢境界也。初義者圓融自在一即一切一切即一。不可説其狀相耳。如華嚴經中究竟果分國土海及十佛自體融義等者。即其事也。不論因陀羅（微細境界門）及微細（相容安立門）等。此當不可説義。何以故不與教相應故。地論云。因分可説果分不可説者。即其義也。問。義若如是何故經中乃説佛不思議品等果耶。答。此果義是約緣形對爲成因故説此果。非據究竟自在果。所以然者。爲不思議法品等與因位同會而説。故知形體耳。第二義者有二。一以喻略示。二約法廣辨。

と云へる、即ち是の意なり。釋迦文佛海印三昧一乘の教義分齊に大いに二門あり。一に別教、二に同教なり。別教の中に亦二あり。一には是れ性海果分、是れ不可説の義に當り、教と相應せず、十佛の自境界なり。二には是れ緣起因分、即ち普賢の境界なり。此の二無二にして、全體遍收し、猶ほ水の如し。今十玄緣起波無礙法門義は、華嚴一乘別教の中、不可説の性海果分を全ふして、可説の緣起因分普賢の境界に在りて説く所にして、是れ果分所證の法義を攪りて、以て機根に示して、信解行證せしむるに外ならず。華嚴五教章通路記第廿六に、華嚴一部の所説の法義は、全く果分所證の法義を攪りて、以て機根に示して、解了を生せしむ。攪る所の法義は、是れ果分なりと雖も、既に根縁に對すれば、因人の所了なり。是の故に果を以て全く因分と名づく、因人修行して、極果に入る時、根機を超して自體の果を證す。是くの如く、展轉して果より因を垂れ、因を修して果に入りて、自から機縁を絶す。他の機縁の爲めに、果を攪りて因を成す、展轉無窮にして自證化他あり、未來際を盡して休息あること無し。今此の所談は、既に是れ縁に對すれば、即ち因分の中に、法界圓融自在無礙の法門を陳説するなりと云へり。

上來是くの如く、十玄緣起の法門は、全く華嚴大經の所説に基き、餘經不説唯説此經の深義たり。然るに此の法門は、華嚴大經の所説に據るとは、是れ同聖典六十六卷七處八會三十四品、十兆九萬五千四百一十八字の聖文、字字句句品品卷卷、一會一品、一句一文、悉く四法界義を具足し、事事無礙即入自在、十玄の妙義を具足するの意にして、爾下正しく説明するが如き、十玄列次を爲して、順序正しく其の法門を建立するの意にはあらず。即ち法門の建立は、正しく祖師家の善巧を俟たざるべからず、段を改めて説く所あるべし。

其二 十玄緣起の起原

前に既に十玄緣起無礙法門義の根本が、華嚴大經に依る所以を説明せり。之を嚴家の列祖に見るに、第二祖至相大師に、華嚴一乘十玄門一卷の著あり、正しく十玄緣起の法門を説明せり。蓋し十玄列次を爲して、秩序整然、十玄無礙の法門を建立するは、正しく此の書の所説に依るものにして、彼の華嚴大經の如きは、一部

六十卷の始中終に涉り、全く無盡緣起の法門を明かすと雖も、其の組織と説明の如きは、元より望むべからず。華嚴一乘十玄門に依るに、撰號を安して、太唐終南太一山、至相寺釋智儼撰、承杜順和尚說と云へり。即ち十玄無礙の法門は、至相大師が、杜順禪師より相承せる法門にして、此の法門は、杜順禪師に其の萌芽を發すと云はざるべからず。宗密禪師の圓覺經大疏鈔第四之上記第一輯第十四卷第三冊第二百八十四紙左に、

具十玄門者。即彼宗中儼尊者。稟受於文殊化身杜順和尚。心既精通自有文釋。

と云ひて。初祖稟受十玄之義。未有解釋之文。故自製文勒成一卷と釋せる即ち此の意なり。然るに初祖杜順禪師に其の萌芽を發すとは、蓋し禪師の華嚴法界觀門に眞空第一。理事無礙第二。周遍含容第三。の三重の法界觀を明かす中、第三の周遍含容觀、即ち四法界の中の事事無礙法界を釋するに、一に事如理門、乃至融無礙門の十門を開きて、事事無礙の法門を釋する者、即ち是にして、清涼大師の十に普華嚴法界玄鏡卷三十一紙右に、此の十門を詳釋し畢りて、

此第十門總融前九。近且收三。第八門一望一切。第九門一切望一。今具此二。以一望一切有第八門四句。以一切望一有第九門四句。其第七門雖不具四句而是一切攝一中收。故近收三。言總收九者。九門不出一多故。由其初門理如事故。一可爲多。由第二門事如事故。多可爲一。二四如理之徧。三五如理之句。二即二而不二。四即不二而二。以不壞相故。三即非廣而廣。五即廣即非廣。亦以下壞相故。六即雙含一多。容徧無礙。七便攝入自在。八含一多交涉。九含攝入自在。十即融成一致。故第十門即同時具足相應門。九即因陀羅網境界門。由第八交涉互爲能所有隱顯門。其第七門相即相入門。五即廣陝門。四不離一處即徧有相即門。三事含理事故有微細門。六具相即廣陝二門。前三總成諸門事理相如故有純雜門。隨十爲首有主伴門。顯於時中有十世門。故初心究竟攝多切於剎那。信滿道圓。一念該於佛地。以諸法皆爾故有託事門。是故十玄亦自此出。

と云ひ。普寂の華嚴經探玄記發揮鈔第三十六紙右に、
今此十玄蓋乃遮那之秘藏。圓宗之極致矣。自非了悟六相因陀羅自在法智。

焉能得施設此妙法門乎。普賢境界能盡能化境界。廢智不可說。豈可事識之所
 圓度哉。問。此十玄門有何所據耶。答。近則據雲華十玄門。遠則依帝心法界
 觀門。問。帝心雲華有何典據立此法門耶。答。即今經中含此玄猷。地論之中
 雖稍發機未至於開說其蘊奧。二祖深悟入於華嚴法界六相因陀羅。推究經論之
 秘願以建此十門耳。可謂華嚴會上大菩薩乘願毅來開性起樓觀之玄扉矣。清涼
 法界玄鏡中。以此十門配當法界觀門十觀。以為。此十玄門全據十觀。故玄談
 第六明義理分齊。別教一乘中立四門。一明所依體事。即教義理事等十科。二
 總攝歸真實即真空絕相。三彰其無礙於理事分開十門。四周遍含容於此中明十
 玄門。十玄門中亦分二科。一正辨十門。二明其所以。即唯心現等十由。
 と云へり。華嚴法界觀門の所明の十玄無礙法門義の起原を爲すことを知るべ
 し。三重の法界觀の中、第三周徧含容觀とは、即ち事事無礙法界にして、事理の如
 く融し、徧攝無礙交參自在なるを云ふ。略して十門あり、一に理如事門とは、事法
 既に虚にして相として盡きざること無く、理性眞實にして體として現せざるこ
 と無し。此れ則ち事に別事無く、即ち理を全ふして事と爲す。是の故に菩薩復

た事を看ると雖も、即ち是れ理を觀す。然かも此の事を説きて、理に即せずと爲
 すを云ふ。二に事如理門とは、諸の事法は理と異にあらざるが故に、事理に隨ひ
 て圓に徧し、遂に一塵をして、普ねく法界に徧せしむ。法界の全體諸法に徧する
 時、此の一微塵も、亦理性の如く、全く一切法の中に在り。一微塵の如く一切の事法
 も、亦然るを云ふ。三に事合理事門とは、諸の事法は、理と一に非るが故に、本の一
 事を存して、而かも能く容れ。一微塵の如き、其の相大ならざるも、能く無邊の法界
 を容攝す。刹等の諸法既に法界を離れざるに由りて、是の故に俱に一塵の中に
 在りて現す。一塵の如く、一切法も爾るを云ふ。四に通局無礙門とは、諸の事法
 は理と非一即非異なるが故に、此の事法をして、一處を離れずして、即ち十方一切
 の塵内に全徧し、非異即非一なるが故に、十方に全徧して、而かも一位を動せず。
 即遠即近即徧即住無障無礙なるを云ふ。五に廣狹無礙門とは、諸の事法は、理と非
 一即非異なるが故に、一塵を壞せずして、而かも能く廣く十方刹海を容れ、非異即
 非一なるが故に、廣く十方法界を容れて、而かも微塵大ならず。則ち一塵の事即
 廣即狹即大即小無障無礙なるを云ふ。六に徧容無礙門とは、此の一塵を一切に

望むに、普徧即廣容なるに由るが故に、徧なく一切の中に在る時、即ち復た還りて、彼の一切の法を攝して、全く自の一が中に住せしめ。又廣容即普徧に由るが故に、此の一塵をして、還りて即ち徧して、自の内の一切差別の法の中に在らしむ。是の故に此の一塵、自他に徧する時、即ち他自に徧し、能容能入同時にして、徧攝無礙なるを云ふ。七に攝入無礙門とは、彼の一切を一法に望むに、入他即ち是れ攝他なるを以ての故に、一切全く一が中に入るの時、即ち彼の一をして、還りて復た自の一切の内に在りて、同時無礙ならしめ。又攝他即ち是れ入他に由るが故に、一法全く一切の中に在る時、還りて一切恒に一の内に在りて、同時無礙ならしむるを云ふ。八に交渉無礙門とは、一法を一切に望むに、攝あり入あり、通じて四句を成す。一に一切を攝し、一を一切に入れ、一切一を攝し、一切一に入り、一に一法を攝し、一を一法に入れ、一切一切を攝し、一切一切に入り、同時に交參して、無障無礙なるを云ふ。九に相在无礙門とは、一切を一に攝むるに、亦入あり攝あり。一を攝して一に入れ、一切を攝して一に入れ。一を攝して一切に入れ、一切を攝して一切に入れ。同時に交參無障無礙なるを云ふ。十に普融無礙門とは、一切及び

一、普ねく皆同時にして、更に互に相望し、一一に前の兩重の四句を具し、普融無礙なるを云ふ。
上來初めに理如事門より、乃至普融無礙門に至り、總じて以て事事無礙法界の義分なり。此の十門、若し圓明に顯現すれば、行の境界に稱ひて、無障無礙重重無盡なることを得て、法界に證入することを得べし。是を周徧含容觀の要旨と爲すなり。而して十玄緣起無礙法門義は、其の基く所、即ち此の周徧含容觀の所明にありて。至相大師は、能く是の深意を得て、十玄無礙の法門を建立したまふ。宗密禪師は、初但稟受十門之義。故自製文勒成一卷と云ひ。凝然大德は、華嚴法界義鏡卷上右十紙に、事事無礙法界とは、亦是周徧含容觀と名づく。局限の法、彼此融するが故に、此の中に即ち十種の玄門あり。緣起の諸法は、深奥冲逸にして該攝周徧す。義極妙なるが故に、一には同時具足相應門、乃至十には主伴圓明具德門等と云ひて。事事無礙法界、即ち周徧含容觀より十玄門を開出せり。十玄無礙法門義の初祖、杜順禪師に其の端を發し、二祖至相大師能く是を統一成立したることを知るべし。

第二項 十玄緣起の相承

十玄緣起無礙法門義の、初祖杜順大師に其の萌芽を發し、至相大師之を稟けて、華嚴一乘十玄門一卷を著して、初祖杜順大師の深意を發揮したること、前項既に説明せるが如し。而して至相大師は、別に華嚴經搜玄記第一上左八紙に一に同時具足相應門等の十玄門を釋して、上の十の玄は、並びに皆別異なり。若し教義の分齊、これと相應する者は、即ち是れ一乘圓教及び頓教の法門。若し諸の教義の分、これと相應すれども、具足せざるは、即ち是れ三乘漸教の所攝なりと云ひ。第三祖賢首大師は、華嚴經文義綱目三十三紙右には、此の經の大意義理を標するに、略して十門を作る。乃至此の上の十門に、各々十義あり。一に教義、乃至十に隨生根欲示現なり。此等の十義は、皆同時相應して、一緣起を成ずと説きて、十玄門を釋し。華嚴一乘教分記卷中紙左二十五以下には、十玄緣起無礙法門義を釋するに、初めに此の法門の依りて、施設せらるゝ所以の本據を明らかにし。次に以諭略示、約法廣辨の二

大義門を開きて、諭說法説並び示して、具さに十玄無礙の法門を開示し。又華嚴金師子章左二紙には、金師子の諭に依りて、懇ろに此の法門の深義を説明せり。然るに同じく賢首大師の撰述中、華嚴經文義綱目等前掲の諸書所明の十玄門は、全く至相大師所立の十玄門を相承せるものにして、釋義の如きも、全く相承の軌轍に依ると雖も、華嚴經探玄記第一六十一紙左に依るに、

顯義分齊者。然義海宏深。微言浩瀚。畧舉十門。撮其綱要。一同時具足相應門。乃至十主伴圓明具德門。然此十門同一緣起。無礙圓融。隨有一門。即具一切。と云ひ。至相相承の十玄門の中、諸藏純雜具德門を改易して、廣狹自在無礙門とし。又唯心廻轉善成門を改易して、主伴圓明具德門と爲し、華嚴經旨歸二十紙右に又所顯の理趣を明かさば、巧辨自在勢變多端なれども、亦十例を擧げて以て無礙を現す。一に性相無礙。二に廣狹無礙。乃至十に十世無礙なりと説きて、大略探玄記の所明に同せり。至相大師相承の法門を、古十玄と稱し、賢首大師の華嚴經探玄記の法門を、新十玄と云ふ。其の交渉に至りては、別章を設けて説く所あるべし。清凉大師の華嚴經玄談第六十七紙右に依るに、周徧合容とは、即ち事事無礙

なり。且らく古徳に依るに、十玄門を顯はすと云ひ。古徳に依るとは、即ち藏和尙に依るなり。至相已にあれども、而かも少しき不同ありと釋し。即ち賢首大師の新十玄に依りて、十玄無礙の法門を明かし。然かも其の所明の方式たる、二祖至相大師三祖賢首大師は、法門の建立を本とするが故に、向下流出、即ち法門の流出を本として、因果二分の中、果分不可説の全體が、因分可説にあらはれたる所の、事事無礙法界と云ふが、根本華嚴經の玄旨なるが故に、此の點に於て、十玄緣起の法門を談するに對し、清涼大師は、向上修入、即ち觀道門に約して、實踐修行の行門爲本の所明なるが故に、多く初祖大師の華嚴法界觀門に依りて、三重の法界を觀じて、初め真空觀より理事無礙觀に入り、遂に周徧含容觀の事事無礙觀に入るの所明に準じて。華嚴法界玄鏡第一左四紙には、杜順大師の華嚴法界觀門の所明に依りて、事法界。理法界。事理無礙法界。事事無礙法界の義を明かし。同第三紙十五以下には、此の四法界の中の、事事無礙法界、即ち周徧含容觀の所説に依りて、十玄無礙の法門を説けり。華嚴經玄談第六紙十七に、周徧含容とは、即ち事事無礙なりと説ける。蓋し是の意にして。華嚴經略策紙二十三 又是に同じ。第五祖圭

山大師に依るに、注法界觀門紙十五 圓覺經大疏第四之上紙一 第一輯第十四套等紙三 二八四紙左等に、十玄無礙の法門を明かし、其の所明、多く清涼大師の軌轍に依れり。上來是くの如く、華嚴の列祖は、各力を盡くして、不共の極談たる、十玄緣起の深遠高妙なる理を發揮せり。然るに既に説けるが如く、列祖の釋義の中、其の所明大略二途あり。一に向下流出の義。二に向上趣入の義なり。向下流出の義とは、法の流出を本として、十玄の妙理を解釋せるものにして。即ち此の十玄緣起は、法界緣起の自體自相にして、十佛の自境界たる、性海果分不可説の全體が、普賢の境界たる、緣起因分可説に顯はれたる、事事無礙の相なれば、此の點に於て、十玄を開きて以て、無盡を表し、華嚴大經所顯の甚深高妙なる玄旨を指示せん。至相賢首兩大師の所明是れなり。向上趣入の義とは、觀心即ち行門實修に屬する所明にして、淺より深に入り、麤より微に入りて、遂に事事無礙法界の一即一切、一切即一、主伴圓明、即入互攝と、無盡緣起の深理を達觀する、華嚴行者の趣入門の說にして、初祖杜順大師の華嚴法界觀門に始まり、清涼、圭山兩大師の所明是れなり。蓋し是の如く、列祖の釋義に、自から二途の不同を生ずる所以は、至相賢首等の

諸祖は、建立爲本にして、華嚴一乘の法門を建立して、其の甚深高妙なる所以を明らかにし。佛自所證の極致を顯示して、成佛の大道たる、一佛乘を開くを以て、至要と爲すが故に。多く法の流出に約して、十玄の妙旨を開説して、二乘、三乘、乃至無量乘等、悉く此の華嚴大經より等流し。又一佛乘に結歸することを顯はし。又清涼、圭山の兩祖は、即ち行門爲本にして、既に至相、賢首兩大師の出世に依りて、一佛乘無盡緣起の法門を建立せられたるが、更に行者の觀門實修を本として、所謂向上趣入の一邊に依りて、諸種の法門を施設せり。是れ即ち弘化の左右にして、敢て法門を異にするに非ず。所謂大權教を設くるに、時を鑑み機に應ずるの所以ならんのみ。先徳の令法久住爲人施設に、深く其の意を用ゐられしは、誠に欽仰すべきなり。

第二節 緣起諸法の説明

第一項 緣起諸法の體相

凡そ宇宙萬有の種別を論ずるに、若し小乘諸部、殊に薩婆多有部等に依れば、五位

七十五法と説きて、色、心、心所、不相應、無爲の五位の法を建て。更に又是を種別して、有爲の七十二法、及び無爲の三法、即ち總じて七十五法と爲し。又大乘唯識家の説に依れば、五位百法と説きて、心、心所、色、不相應、無爲の五位の法を建て。更に是を種別して、有爲の九十四法、及び無爲の六法、即ち總じて百法と爲し。並びに是を以て、宇宙萬有を攝盡すと爲せり。大乗光法師の法宗原初紙に、説一切有部に依るに、諸法の宗原に、略して五種あり。一に色法。二に心法。三に心所有法。四に心不相應行法。五に無爲法なり。第一色法に、略して十一種あり。第二心法に、略して一種あり。第三心所有法に、略して四十六種あり。第四心不相應行法に、略して十四種あり。第五無爲法に、略して三種あり。總じて七十五法あり。諸法の體と爲すと云ひ。大乗百法明門論縮來一〇に、一切の法とは、總じて五種あり。一には心法。二には心所有法。三には色法。四には心不相應行法。五には無爲法なり。第一心法に、總じて八種あり。第二心所有法に、總じて五十一種あり。第三心法に、總じて十一種あり。第四心不相應行法に、總じて二十四種あり。第五無爲法に、總じて六種ありとし。總じて百法を明かし、以て大小二乘に、諸法の種別を

論ずる要旨を知るべし。然るに小乘諸部の中、薩婆多有部等の所説に依るに、此等の七十五法は、總じて以て實在と爲して、所謂三世實有、法體恒有を主義とすと雖も、大乘唯識家の所説に依れば、其の所依の本經たる解深密經第二、一切法相品縮黄八の所説に依りて、三種の自性を建て、萬有の本體實相を説明す。一に遍計所執性。二に依他起性。三に圓成實性。即ち是れなり。經に、

諸法相略有三種。何等爲三。一者遍計所執相。二者依他起相。三者圓成實相。

と云ひ。唯識三十頌縮來九に、

由彼彼遍計。遍計種種物。此遍計所執。自性無所有。依他起自性。分別緣所生。圓成實於彼。常遠離前生。故此與依他。非異非不異。如無常等性。非不見此彼。

と説き。成唯論第八紙右以下詳かに之を釋し、又、無著菩薩の攝大乘論本卷中縮來九世親菩薩の辯中邊論卷中縮來九等、又詳かに是を釋せり。此の三性は、三四右初二性は萬有の現相、後の一性は萬有の實性にして。初めの二性の中、第一遍計所執

は、後天的妄相。第二依他起は、先天的真相と判すべし。初めに遍計所執性とは、是れ凡夫の妄情所現の境にして。之を解するに、能遍計。所遍計。遍計所執。の三重の分別あり。第一能遍計とは、其の體を論ずれば、第六第七の二識にして、此の中第六意識は、萬有即ち一切の客觀的現象に向ひて、實我なり實法なりと周遍計度し。第七末那識は、第八阿賴耶識の非我非法なるに向ひて、實我なり實法なりと計度分別するが故に、其の第六第七の能迷の執心、即ち主觀的迷情を指して、能遍計と云ふ。第二所遍計とは、其の能遍計たる主觀的迷情、即ち能迷の執心たる六七二識の爲めに實我なり實法なりと、周遍計度せらるる、非我非我法の因縁和合して生じたる、色心の諸法にして、所謂宇宙萬有、即ち客觀的現象なり。第三遍計所執性とは、前の能遍計の迷心を以て、所遍計の依他の色心の諸法を、周遍計度する時、其の能迷の妄心の前に現する相にして、之を中間存境。又は當情現の相と名づく。即ち能遍計の心に依りて、所遍計の上に現する實有的執相なり。此の當情現の相は、自體あること無く、體性都無の法にして、たゞ執情の上のみに假現する妄相たり。唯識三十頌に、此遍計所執。自性無所有。と云へる、即ち此の意なり。是の故

に遍計所執は、實に其の物あるに非ず。たゞ妄情分別を以て、是れありとすれども、理を以て是を究むる時は、全く其の實體あること無し。之を情有理無の法と云ふ。蓋し宇宙萬有は、今日吾人の眼には、外界客觀的實有の如く映すれども、其の實客觀的存在を有するものにあらずして、即ち唯識の所變なり。然るに吾人は、妄情分別の故に、全く心外に根據すること無き、宇宙萬有を以て、客觀的實有の如く觀じ、爰に實我實法の執あり。是れ畢竟吾人の執情に墮したる後に現する妄相所謂當情現の相に過ぎず、先きに後天的妄相と云へる即ち此故なり。次に依他起性とは、依他起は、他の因縁に依りて生起するの義なり。即ち他の因縁和合に依りて生じ來る、如幻假有の法を稱して、依他起性と云ふ。唯識三十頌に、依他起自性。分別緣所生と云へり。宇宙萬有の自性は、孰れも皆因縁和合より、生起したる假法なり。色法は、因縁増上の二縁に依りて生じ、心法は、等無間緣、所緣緣、及び因縁、増上緣の四縁に依りて起る、既に因縁の和合に依りて生起す。此の故に凡夫の妄執するが如き、固定實有の物のあるべき筈なし。其の實性としては、更に之れ無きなり。是を如幻假有の法と言ふ。詳言すれば、此の依他起の法に、染分淨

分あり。染分の依他とは、迷界の諸法其のもの、實相にして。淨分の依他とは、悟界の諸法を云ふ。此くの如く、且らく迷悟染淨を分つと雖も、萬有差別の現象は、其の迷悟染淨を問はず。總じて依他起の法にあらざるなく、如幻假有ならざる無し。然るに吾人凡愚は、宇宙萬有に對して、實我なり實法なりと執するは、是れ萬有其物の眞實相にあらず、總じて遍計所執の相なり。第三に圓成實性とは、圓滿成就せる眞實の體性の義にして、依他起性の根本體性たる、眞如法性は是れなり。此の眞如は、廣大無限にして、一切處に徧滿し、三世常住にして、轉變すること無く、而かも一切諸法の眞實の體性なるが故に、圓成實性と云ふ。唯識三十頌に、此諸法勝義、亦即是眞如。常如其性故。即唯識實性と云へり。蓋し眞如法性は、是れ不可說不可思議言亡慮絶のものにして、有に非ず無にあらず、生に非ず滅に非ず、乃至一切の言を絶し、想を超えて、吾人の相待的心念を以ては、容易に想定し得べきものにあらずと雖も、且らく其の徳用を論ずれば、圓滿なり成就せり眞實なり。能く一切處に徧し、常恒不斷にして、諸法の實性と爲る、故に圓成實性の名あり。以上此の三性の中、遍計は空にして、依圓は有なり。此の依圓の二性の中、依

他は生滅變化する有爲法にして、圓成實は生滅變化すること無き、凝然常住の無爲法なり。有爲無爲、總じて一切諸法を攝盡せざること無し。是を大乘唯識家所説の三性の要義と爲すなり。(且らく護法論師の正義に依る)

以上此の三性を性宗の所説に見るに、三性の中、遍計所執性とは、即ち能迷の執心にして、相宗の如く、能遍計。所遍計。遍計所執。の三重には分たざれども、姑らく相宗の解釋に準じて之を分別せば。能遍計とは、相宗の如く、但だ六七二識のみならず、廣く有漏の諸八識に通じて、皆能遍計の體とす。此の論大に安慧論師の説に似たり。所遍計とは、相宗の如く、但だ依他の色心二法のみならず、眞如も亦所遍計なりとす。是れ終教已上には、能遍計の中の根本無明は、眞如本覺の理に體達せずして、迷動すと説くが故に、眞如も亦無明に對して、所遍計なりと云はざるべからざればなり。又、遍計所執とは、遍計は即ち前の根本無明等の能遍計の心。所執は即ち所遍計の境にして、心境並び取りて、其の名と爲すも。其の意は所計の境に於て、虛妄に構畫分別して、我法と執する能迷の心に名づくるなり。相宗に於ては、但、能迷の執心の前に現する當情現の相を取れど。性宗は然らず、遍計所執に二

重を開き、能迷の執心を以て、有體の遍計所執とし、當情現の相を以て、無體の遍計所執とす。是れ蓋し根本無明、忽然として現起。眞如の理に迷ひて、三細を生じ、三細より、智相、相續相等、漸次に開展し來りて種々に遍計す。此の能遍計の心は有なるに似たりと雖も。究竟して其の體を論ずれば、虛妄にして、無體即空なるが故に、遍計所執と名づく。然るに其の執心の前に現する當情現の相は、能迷の執心を離れて、別にあるに非ず。故に能迷の執心に屬して、亦遍計所執と名づくるなり。此の故に相宗には、能遍計と遍計所執と差別を爲せども。性宗には、能遍計即ち遍計所執にして、更に差別を立てざるなり。既に遍計所執性とは、即ち能迷の執心なり。依他起性とは、如何か區別すべきやと云ふに。凡そ依他起性に、染分と淨分との別あり。此の中染分の依他は、虛妄なるが故に、其の虛妄の義邊を取りて、遍計所執性とし。又、淨分の依他は、素とより、染分の依他は、虛妄なりと雖も、因縁和合して生ずるが故に、其の因縁和合して生ずる、義邊を取りて、依他起性とす。其の差別なきに似て、而かも差別あることを知るべし。次に依他起性とは、色心一切の諸法なり。此の色心の諸法に、分別の他に依りて生ずると、四縁の他に依

りて生ずるとの兩釋あり。無明真に迷ふに依りて生ずと云ふに依れば、是れ分別の他に依りて生ずる義にして。又熏習の因縁に依りて生ずと云ふに據れば、是れ四縁所生を、依他と名づくるなり。蓋し依他起性に、染分の依他と、淨分の依他との二あり。染分の依他は、一切の有漏の色心の諸法を云ひ。淨分の依他は、一切の無漏清淨の諸法を云ふ。此の中染分の依他は、分別に依りて生じ。又淨分の依他は、四縁の他に依りて生ずるなり。次に圓成實性とは、即ち真如を云ふ。此の真如に不變と隨縁との二義あり。其の體、常住にして、生滅に涉らざる、是を不變の義とし。不變なりと雖も、而かも縁に隨ひて、色心の萬境と爲る、是を隨縁の義と云ふ。性宗には、具さに此の二義を明すと雖も。相宗には、唯だ不變の一義のみを説きて、隨縁の義を立てざるなり。

上來性宗所談の三性の義は、賢首大師の大乗密嚴經疏第二紙十左及び清涼大師の華嚴經玄談第五紙三十九右以下に見え。清涼大師の性、相兩宗の立義不同を辨ずる中、第五に三性空有即離別と云へるは、即ち是れなり。華嚴教五章卷中紙初右に依るに、別教一乘の義理分齊を明かすに、一に三性同異義、二に六義爲因縁起、三に十玄縁起無礙法、四

に六相圓融義の四門を開けり。是れ蓋し次第の如く、諸法縁起の果及び因を明らかにして、其の無盡縁起の相を談じ。又、其の無盡の所由を説明するものにして、別教一乘の無盡縁起を知らんと欲するものは、先づ諸法縁起の果たる、三性に就きて知らざるべからず。上來説明せるが如く、三性を論ずるに、性、相の二宗所談各別なり。是に依りて、賢首大師は、三性同異の義、即ち三性の不一不異を論じて、真如即一切諸法。一切諸法即真如なることを明らかにし。一面相宗家の三性隔歴の執を融すると共に、一面又真妄融通無礙にして、真如即一切の諸法なるが故に、真妄末を該ね。又、一切の諸法即真如なるが故に、妄真源に徹して、真如の性と依他の相と、通融して無障無礙ならざる無きを示めせり。其の意に依るに、凡そ三性に各々二義あり、即ち圓成實性に、不變と隨縁との二義あり。依他起性に似有と、無性と二義あり。遍計所執性に、情有と理無との二義あり。初めに圓成實性の不變隨縁とは、真如は一切萬法の實體にして、横に十方に遍し、豎に三世に涉りて、生滅變化すること無きが故に、不變と云ふ。真如は此くの如く、自性不變なりと雖も、而かも染淨の縁に隨ひて、舉體起動して、一切の諸法と爲るが故に、即ち隨縁の義あり。

り。譬へば湛然たる海水の風縁に遇ひて、千態萬狀の波濤を起すが如く。眞如の擧體隨緣起動して、色心一切の諸法と顯はるゝものは、是を隨緣眞如と云ひ。又風縁に依りて起れる波濤の當體即水なるが如く、隨緣して顯はれたる、色心萬差の諸法の當體、湛然として不生不滅なりと云ふものは、是を不變眞如と云ふ。此の如く、眞如に不變と隨緣との二義を具するが故に、不變に違せずして、而かも隨緣して、一切の萬象と爲り。又隨緣して萬象となりつゝ、而かも其の體常恒にして不變なり。次に依他起性の似有無性とは、依他の色心等の諸法、種種の因縁に依りて暫らく假りに現起するが故に似有なり。此の因縁に依りて、假りに現起せし色心の諸法は、既に衆緣和合して、生ぜしものなるが故に、其の自體を求むるに、本來有ること無し、故に亦無性の義あり。此の故に、此の依他なるものは、一面に衆緣和合して生ずるが故に、有の義あると共に、亦一面彼れは本來自體あること無きが故に、無の義あるなり。然るに此の似有と云ふに、當體似有と、能似所似の似有との二義あり。當體似有の義に依れば、依他の當體假有なるが故に、似有と云ふ。此の時は似は假の義なり。又能似所似の似有の義に依れば、依他の假

有、圓成實の實に似。又依他の假有、遍計所執の情有に似るが故に似有と云ふ。理無と云ふに、亦事の無性と理の無性との二義あり。因縁和合して生じたる色心の諸法は、假有なるが故に無なりとは、事の無性なり。又依他の實體、即ち眞如にして、此の眞如は本來不生なりと談ずるは、理の無性なり。相宗は、但だ事の無性を説くも、理の無性を説かず。然るに性宗は、事の無性のみならず、亦理の無性を談ずるが故に、依他即ち眞如なりと云ふことを得るなり。次に遍計所執性の情有、理無とは、情有とは、諸法は實我實法にあらざるに、凡夫は妄情を以て、之に對向するが故に、心外に實に我法ありと謂ひて、自己の妄情に、我法の相を浮ぶるが故に、情有と云ふ。無明眞如に迷ひて、三細を成ず、是れ細の法執なり。智相と相續相とは、庵の法執を起し、執取と計名字とは、總じて、我法を起す。此等は並びに情有の相なり。此の中、根本無明に約すれば、情有とは、情即ち有なり。枝末無明に約すれば、情所現を有と云ふ。又、理無とは、情有既に是れ横計の所現なるが故に、理として、其の體有ること無く、體性都無なるが故に、理無と云ふ。此の理無に、亦事理の二あり。遍計所執の法は、妄情の上に於ては、有なりと雖も、理を以て推究する

に彼れ有に非るが故に、此れ無なりとするは、事の理無なり。又真如の中に、妄染なきが故に、理無と云ふは、是れ理の理無なり。相宗は事の理無を談すれども、理の理無を説かず。然るに性宗には、事の理無を説くと共に、亦理の理無をも談するなり。是くの如く、三性に各々三義あり、合して六義を成ず。華嚴五教章卷中右初紙に、三性各有二義。真中二者。一不變義。二隨緣義。依他二義者。一似有義。二無性義。所執二義者。一情有義。二理無義。と云へり。此の六義の中、圓成實の不變と、依他の無性と、遍計の理無とは、是れを本の三性と云ひ、又圓成實の隨緣と、依他の似有と、遍計の情有とを、末の三性と云ふ。華嚴五教章通路記第二十一に、此の三性に各々二義あり。各々の二義は、俱に是れ各々の性なり、能管所管俱に性體なり、去取すべからず。若し本末を分たば、不變と無性と理無とは、是を本の三性と名づけ。隨緣と似有と、情有とを、末の三性と名づく。本末異なりと雖も、三性に非ること無し。若し常途に就けば、所執の情有と、依他の似有と、真如の不變とを以て、三性と名づくと云へり。此の本末二種の三性の中、本の三性を互に相望するに、依他の無性と、遍計の理無とは、

共に真如にして、圓成實の不變の義と異なること無きが故に、三性同一にして、無差別なりと云ふことを得べし。是れ依他遍計の二性を圓成實に歸し、其の圓成實に就きて、不異を談するなり。華嚴五教章卷中右初紙に、由真不變依他無性所執理無。由此三義故。三性一際同無異也。此即不壞末而常本也。經云。衆生即涅槃不更滅也。と説き。華嚴五教章義苑疏。第八二紙右真有不變隨緣。妄有體空成事。此中無性理無。即是妄中體空。由體空故。與不變而無殊。故三性而一際。不捨緣而即真故而本也。と釋せり。而して末の三性を互に相望するに、真如隨緣して、色心等の萬差の諸法と爲るが故に、圓成實の隨緣と、依他の似有と、遍計の情とは、無差別にして、三性同一なり。是れ真如の本を依他遍計の末に隨へ、其の末に就きて、不異を論するなり。華嚴五教章卷中左初紙に、又約真如隨緣依他似有所執情有。由此三義亦無異也。此即不動本而常末也。經云。法身流轉五道。名衆生故也。

と説き。華嚴五教章義苑疏第八左二紙に似有情有。即妄中成事與真中隨緣。畢竟無二故亦無異。不變性而緣起故。不動本常末也。

と釋せり。次に亦本の三性と末の三性とを相望するに、本の三性は、一切の諸法即真如なることを表し。末の三性は真如即一切の諸法なることを顯はすが故に、本の三性と末の三性とは、同一なりと云ふことを得ず、是を不一門と云ふ。華嚴五教章卷中初紙に、

即由此三義與前三義。是不一門。

なりと説き。又上來の所説を結びて、

是故真該妄末。妄徹真源。性相通融。無障無礙。

と云へり。蓋し真如即ち一切の諸法なるが故に、真妄末を該ね、又一切の諸法即ち真如なるが故に、妄真源に徹して、真如の性と、依遍の相と、通融無礙ならざることなきを示せるものにして。是れ相宗所談の隔歷不融の三性に對して、圓融無礙の三性を談せるなり。

第二項 緣起諸法の起因

前節既に緣起諸法の體相に就き、三性の別あることを論じ、性相二宗の所説を明らかにせり。然らば其の緣起諸法の依りて生ずる原因は如何と云ふに。凡そ法相唯識家の所談に依るに、一切諸法の依りて生ずる真源因は、第八阿賴耶識中に攝藏せる種子なりとす。其の種子に先天固有のものあり、後天新生のものあり。前者を本有種子と云い、後者を新薰種子と云ふ。此の種子に凡そ六種の義ありて、即ち能く諸法生起の起因たり。是を種子六義と云ふ。一に剎那滅。二に果俱有。三に恒隨轉。四に性決定。五に待衆緣。六に引自果是れなり。近くは成唯識論第二紙左一に、

然種子義略有六種。一剎那滅。謂體纔生無間必滅有勝功力方成種子。此遮常法。常無轉度不可說有能生用故。二果俱有。謂與所生現行果法俱現和合方成種子。此遮前後及定相離。現種異類互不相違。一身俱時有能生用。非如種子自類相生前後相違必不俱有。雖因與果有俱不俱。而現在時可有因用。未生已

滅無自體故。依下生現果立種子名。不依引生自類名種故。但應說與果俱有。三恒隨轉。謂要長時一類相續至究竟位方成種子。此遮轉識。轉易間斷與種子法不相應故。此顯種子自類相生。四性決定。謂隨因力生善惡等功能決定方成種子。此遮餘部執異性因生異性果有因緣義。五待衆緣。謂此要待自衆緣合功能殊勝方成種子。此遮外道執自然因不待衆緣恒頓生果。或遮餘部緣恒非無。顯所待緣非恒有性。故種於果非恒頓生。六引自果。謂於別別色心等果各各引生方成種子。此遮外道執唯一因生一切果。或遮餘部執色心等互爲因緣。唯本識中功能差別具斯六義成種非餘。

と云へり。此の中第一刹那滅とは、凡そ諸法を生ずる源因なるものは、念念刹那に生滅轉變する有爲法なるべきことを要す。若し自體常住にして、生滅せざる者なれば、是れ必らず諸法を生ずる原因の義無し。蓋し生滅變化する者は、自體に能生の功能あるが故に、能く因と爲りて、果を生ずることを得れども。自體常住にして、生滅せざる者は、能生の作用無きが故に、自から因と爲りて、他の果を生ずること能はざればなり。是れ一切の諸法を、有爲と無爲との二大種に分てる中、源

因と爲るものは、唯だ有爲法に限りて、無爲法に非すと遮顯し。又所謂外道に自性と神我等の常法を以て、諸法生起の因と説くを遮するなり。瑜伽師地論第五十二に種子の七相を説く中には、一に無常法と云ひ。梁譯世親攝大乘論釋第二一四左には、念念滅と云へり。第二果俱有とは、能生の源因なるものは、たとひ生滅變化するものなりとも、所生の結果に望むに、俱に現に和合するものならざるべからず。換言せば、種子より現行を生ずる時、其の能生の種子と、所生の現行の結果とは、同時にして、二者相離れざるを云ふ。若し能生の因と、所生の果と、俱時にあらざれば、其の能生の因は、親源因に非ず。但し種子より種子を生ずる自類相生の種子に依れば、彼は異時の因果なるが故に、所生の果に望むに、俱有にあらざるなり。今は現行の果を生ずる種現相望の種子に就いて云ふと知るべし。瑜伽師地論第五に、七相を説く中、第二の爲他性因と、第三の已生未滅の二相これに當り。梁譯世親攝大乘論釋第二に、俱用と云へるものは、是れなり。第三に恒隨轉とは、凡そ種子なる者は、必らず恒隨轉として、是を對治する位、即ち究竟位に至るまで、長時に一類相續するものならざるべからず。若し時時に轉易し、間斷するも

のを取りて源因と爲せば、則ち其の源因の中には、未だ結果を招感せざる前に滅し去りて、存せざるものあるべきが故に。遂に善果因に善果なく、惡因に惡果なきに至らむ。此くの如きは、有因無果の邪道にして、正因正果の道理に非ず。故に種子は、恒隨轉にして、長時に一類相續すべきものならざるべからず。蓋し一切萬法の中、恒時相續のものは、獨り第八阿賴耶識のみにして、餘は一切悉く轉變間斷あるものとす。瑜伽師地論第五に、七相の中、爲後念自性及び、已生未滅と説けるものは、是れにして。梁譯世親攝大乘論釋第二には、同じく隨逐至治際と云へり。第四に性決定とは、凡そ種子なるものは、必らず因の力に依りて、善惡を生ずる功能決定せるものならざるべからず。源因善ならば、結果も必らず善に。源因惡ならば、結果も隨つて惡と、因果其の性決定する是れなり。是れ異熟因等を以て、親しき源因と爲すことを遮するものにして。瑜伽師地論第五には、功能相應と云ひ。梁譯世親攝大乘論釋第二には、決定と云へり。第五待衆緣とは、凡そ種子なる者は、唯だ自の力のみにては、結果を招くこと能はず、必らず衆多の緣を待たざるべからず。既に衆多の緣を待つべきが故に、頓に果を生ずること能はざるなり。是れ

外道の自然因、能く衆緣を待たずして、恒に頓に果を生ずと説くを、遮するものにして。瑜伽師地論第五に、七相を説く中、四に得餘緣。五に成變異。と云へるものは、是れに當り。梁譯世親攝大乘論釋第二には、同じく觀因緣と云へり。第六、引自果とは、別別の色心等の果を、各々引生するの意にして、凡そ種子なる者は、必らず色心等の諸法に於て、各々別別に自果を引生するものならざるべからず。所謂外道の一因、能く一切の果を生ずと執し。又薩婆多有部等に、色心互に因緣と爲ると説くを、遮するものにして。瑜伽師地論第五には、相稱隨順と云ひ。梁譯世親攝大乘論釋第二に、引顯自果と云へり。

以上種子には、此くの如きの六義あり、能く一切諸法の源因となる。成唯識論第二二に、唯だ本識の中の功能差別のみ、斯の六義を具するを以て因と成ると云へる、即ち此の意なり。之を要するに、法相家にありては、一切諸法の親源因は、第八阿賴耶識中にあり。此の第八阿賴耶識中にある種子は、利那滅等の六義を具して、以て色心等の一切萬差の諸法を現起すと爲すなり。之を性宗の所談に見るに、一切の因に皆六義あり。一に空有力不待緣。二に空有力待緣。三

に空無力待緣。四に有有力不待緣。五に有有力待緣。六に有無力待緣なりと云ふ。是れ蓋し十地經論第八紙十一に、十二有支の次第相生の因縁を明かすに、一、緣不生自緣生故。二に因不生緣生故。三に不共生無知者故。四に不無因隨緣有故。の四句を作り。又阿毘達磨雜集論第四四縮來八に、自種有故不從他。待衆緣故非自作。無作用故非共生。有功能故非無因。と説けるに依るものにして。即ち地論の第一緣不生自因生故の句は、因を以て緣の力を奪ふが故に。唯だ因より諸法を生ずとするを以て、集論に自種有故不從他と説きて。諸法は他に從はずして、唯だ自因より生ずと示すに同じ。地論の第二因不生緣生故の句は、緣を以て因の力を奪ふが故に、唯だ緣より生ずとするを以て、集論に待衆緣故非自作と示して。諸法生ずる時、必らず衆多の緣を待つが故に、唯だ緣より生ずと説くに同じく。又地論の第三不共生無知者。故の句は、第一句の緣不生と、第二句の因不生とを並べ取るが故に。其より生ぜずとすれば、集論に無作用故不共生と説きて。第一句は不從他と云ひ、第二句に、非自作と説くを並用するが故に、其より生ぜずと爲すに同じく。又地論の第四不無因隨緣有故。の句は、第一句の自因

生と、第二句の緣生とを並べ取るが故に、因縁和合して、能く諸法を生ずとなせば、即ち集論の第四句に、有功能故非無因と説きて、第一句の自種有故と、第二句の待衆緣故とを並用して、因縁和合して、諸法を生ずとなすに同じ。此の地論及び集論の四句の中、源因たる義を有するものは、第一第二第四の三句にして、第三句は、因縁雙非の句なるが故に、源因たる義を缺けり。是れ一切諸法の生じ來る源因を論ずるに、緣の力を因に歸して、唯だ緣より生ずとするか、或は因の力を緣に歸して、唯だ緣より生ずとするか。又は因縁和合して生ずとするかの、三類に過ぎざるが故なり。換言せば、諸法は唯だ因より生じて、緣より生ぜずとするが故に。因、有力にして、而かも不待緣なり、之を因、有力不待緣と云ふ。又地論及び雜集論の第四句は、因縁和合して諸法を生ずとなすが故に、因に能生の力用ありて、而かも緣を待ち、因、有力にして、且つ待緣なり、之を因、有力待緣と云ふ。又地論及び雜集論の第二句は、因の力を緣に奪ひて、諸法は唯だ緣より生ずとするが故に、因に、能生の力なくして、緣を待ちて果を生ず、之を因、無力待緣と云ふ。又地論及び雜集論の第三句は、不共生にして、因縁より生ぜずとするが故に、是れ因、無力不待

緣と云ふべく。此の因無力不待緣は、因に果を生ずるの力無く、又、緣を待たずとするが故に、即ち源因たるの義を缺きて、唯だ餘の三句のみ、能く源因たるの義を成するなり。而して此の三句を、更に開きて空有力不待緣等の六義となす所以は、蓋し一切諸法能生の源因たる種子は、是れ因緣所成にして、法性眞如の隨緣して、生起せるものなれば、即ち有なり。有なりと雖も、其の體本來固有實在のものにあらざるが故に、亦空なりと云はざるべからず。故を以て先きに説く、空有力不待緣の三に、並びに空有の二義あり、即ち總じて六義を成するなり。是を緣起因門六義と云ひ。二祖至相大師の華嚴五十要問答卷下紙十一に、

一切因有六種義。一空有力不待緣。念念滅故。二有有力不待緣。決定故。

三有有力待緣。如引顯自果故。四無無力待緣。觀因緣故。五有無力待緣。隨逐至治際故。六無有力待緣。俱有力故。

と説けり。

是を三祖賢首大師の華嚴五教章卷中紙十一の所明に見るに、

一切因皆有六義。一空有力不待緣。二空有力待緣。三空無力待緣。四有有

力不待緣。五有有力待緣。六有無力待緣。中略問。何故定説六義。不增至七減不至五耶。答。爲正因對緣。唯有三義。一因有力不待緣。全能生故。不雜緣力故。二因有力待緣。相資發故。三因無力待緣。全不作故。因歸緣故。又由上三義。因中各有二義。謂空義有義。二門各三。合唯有六故。不增減也。何故不立第四句無力不待緣義者。以彼非是因義故不立。

と云へり。蓋し此くの如く、六義の第一を空有力不待緣とし、第二を空有力待緣とし、乃至第六を有無力待緣と次第する所以は、凡そ源因と爲るべき因種は要らず空有の二義を具せり。即ち眞如隨緣して、依他の事法を成するが故に、是れ有なり。此の有は、如幻假有にして、緣生の事體、本來恒有に非ざるが故に、空なり。此の故に、因種に於て、空有の二を分つべし。而して其の空の義有の義を有する因有に、能く果を生ずる作用有ると、作用無きとあり。前者を有力と云ひ、後者を無力と云ふ。即ち空有の二義に、亦各々有力無力の二種を分つべし。而して此の有力無力の中、有力に他緣を待たずして、唯だ自因より生ずると、他緣を待ちて生ずるとの別あるが故に、不待緣待緣の二を分ち。又、無力は、因種自身は無力な

るが故に、必らず縁を待ちて果を生ず。故に此の無力には、唯だ待縁の一種のみありて、不待縁無し。若し因無力にして、而かも不待縁ならば、因縁共に缺くが故に、源因たるの義なし。此くの如く、因種に於て、體に就きて空有を分ち。此の空有に於て、更に作用に就きて、有力無力を分ち。此の有力無力に於て、更に不待縁待縁の二を分ちが故に、即ち第一を空有力不待縁とし、乃至第六を有無力待縁と爲すなり。而して此の六義を以て、更に攝大乘論及び成唯識論等の所説の種子六義に望むに、此の第一空有力不待縁は、彼の第一剎那滅の義にして、此の第六有無力待縁は、彼の第三恒隨轉の義なり。

蓋し初めに空有力不待縁とは、凡そ諸法の源因たる種子は、剎那剎那に、新陳代謝するものならざるべからず、之を剎那滅の義と云ふ。既に種子は、念念剎那に生滅遷流するが故に、即ち無自性にして、本來自體ありと云ふべからず。彼れ本來自體有るに非るが故に、是れ空なり。此の自體空なる剎那滅の種子に依り、現行の果法生ずることを得るが故に、是れ有力なりと云ふべし。然るに此の剎那滅は、他縁に藉らずして、任運に自果を生ずるが故に、不待縁なりと云はざるべから

す。華嚴五教章卷中左十紙に、

初者は剎那滅義。何以故。由剎那滅故。即顯無自性是空也。由此滅故。果法得生是有力也。然是謝滅非由緣力故。云不待縁也。

と云へり。二に空有力待縁とは、能生の源因たる種子と、所生の現行の果と、現に和合して俱有なりと顯はす、果俱有の義にして、即ち能生の因は、所生の果と俱なるが故に、方さに有なり。若し果と俱ならざれば、有なること能はず。今既に果と俱なりと云ふ、是れ俱の言を以て、不有を顯はすが故に、自體空なりと云ふべし。此の自體空なる種子は、果と俱なるが故に、能く有を成ず。有を成ずるが故に、因は是れ有力なりと云ふべし。而して此の因、孤り果を生ずるに非ず。要らず諸縁を藉るが故に、待縁なりと云はざるべからず。華嚴五教章卷中に、

二者是俱有義。何以故。由俱故方有。即顯是不有。是空義也。俱故能成有。是有力也。俱故非孤。是待縁也。

と云へり。三に空無力待縁とは、凡そ諸法の生ずる時、唯だ因より生ぜずして、要らず衆縁を待つと顯はすものは、是れ待衆門の義なり。其の待衆縁の種子は、本

來自體有ること無く、無自性なるが故に、是れ空なり。此の自體空なる種子果を生ずる時、要らず縁を待つが故に、因に、生果の功能無く。即ち功を縁に歸するが故に、無力なりと云ふべし。既に因無力にして、果を生ずる時、要らず助を藉るが故に、是れ待縁なりと云ふべし。華嚴五教章卷中に、

三者是待衆緣義。何以故。由無自性故是空也。因不生緣生故是無力也。即由此故是待縁也。

と云へり。四に有有力不待縁とは、是れ諸法の源因たる種子は、善惡無記の三性決定して、善種より善果を生じ。不善種より不善果を生じ。無記の種子より無記の果を生じて。三性決定して亂れずと顯はす性決定の義にして、即ち三性決定して、自類改まらざるは、是れ有なり。此の有體の種子自性改まらずして、能く果を生ずるが故に、是れ有力なり。此の有力は、因の功用にして、因種の所に、既に果を生ずべき力を具するが故に、縁を假らずして、能く自果を生ずることを得れば、是れ即ち不待縁なりと云ふべし。華嚴五教章卷中に、

四者決定義。何以故。由自類不改故是有義。能自不改而生果故是有力義。

然此不改。非由縁力故是不待縁義。

なりと云へり。五に有有力待縁とは、凡そ諸法の源因たる種子は、唯だ其の性の決定するのみならず、色法の種子は、必ず色法を生じて、心法を生せず。又、心法の種子は、必ず心法を生じて、色法を生せず。各々唯だ自果を引生すと顯はすは、是れ引自果の義なり。既に種子は、自果を引起するが故に、是れ有なり。而かも縁を待ちて、方に果を生ずと雖も、唯だ自果を引生して、縁の果を生せざるが故に、有力なりと云ふべし。又、既に自因より自果を引生すと雖も、而かも縁を待ちて、果を生ずるが故に、待縁なりと云ふべし。華嚴五教章卷中に、

第五引自果義。何以故。由引現自果是有義。雖待縁方生。然不生縁果。是有力義。即由此故是待縁義。

なりと云へり。六に有無力待縁とは、凡そ種子は、必ず之を斷治すべき、退治道の生ずるに至るまで、他に隨ひて恒時に相續するものならざるべからず、是れ恒隨轉の義なり。既に種子は、自立すること能はずして、他に依託して轉するが故に、是れ有なりと云ふべし。又、此の因種助縁に藉りて、現行の果を生ずるが故に、

因の力を果に歸すれば、因に生果の功無きが故に、無力なりと云ふべし。既に因無力にして、緣に託して果を生ずるが故に、待緣なりと云はざるべからず。華嚴五教章卷中に、

第六是恒隨轉義。何以故。由隨他故不可無。不能違緣故無力用。即由此故是待緣也。是故攝論（世親無性第二）爲顯此六義。而說偈言。剎那滅俱有。恒隨轉應知。決定待衆緣。唯能引自果。

なりと云へり。上來是を緣起因門六義法とす。之を相宗所談の種子六義に對比するに。上にも既に説明せるが如く、相宗には、唯だ第八阿頼耶藏中に含藏せる事種に就きてのみ論するに。性宗には、廣く有爲無爲に通じて、因緣を立て、眞如も亦能所熏に通ずと云ふ。華嚴五教章卷中紙右二に、

問。若爾現行爲種子因。豈得有六義。答。隨勝不具如論說。種子有六義。此約初教。若約緣起秘密義。皆具此六義。此約終教。以此教中六七識等亦是如來藏隨緣義無別自性。是故六七識亦具本識中六義也。思之可見。と云へり。以て其の高遠なる哲學的心識の理を知るべし。

第三項 十支緣起の名義

其一 總說

前項既に説明せし如く、正しく法に約して、廣く十支緣起無礙法門の妙理を釋するに、立義分と解釋分との二門あり。立義分は、即ち十支所依の體事にして。解釋分は、即ち其の體事の上に具する緣起の實德無盡の徳用なれば、古哲の所謂能依の十支なりと云ふべし。十數を以て示すは、蓋し十支無盡の深旨を表せるものにして、華嚴五教章卷中紙右一には、

言解釋者。亦以十門。釋前十義。以現無盡。問。何以得知十教顯無盡者。答。依華嚴經中立十數爲首。以顯無盡義。

と示せり。然るに十支緣起を談するに、凡そ二途の所談あり。一は至相大師の華嚴一乘十支門、及び華嚴經搜玄記第一上八紙の所立にして、賢首大師は、華嚴五教章卷中紙右二、華嚴經文義綱目紙右三、及び華嚴金師十章紙左二等、是を相承し。益々其の深旨を發揮せり。一に同時具足相應門。二に因陀羅網境界門。三に

秘。密。隱。顯。俱。成。門。四。に。微。細。相。容。安。立。門。五。に。十。世。隔。法。異。成。門。六。に。諸。藏。純。雜。具。德。門。七。に。一。多。相。容。不。同。門。八。に。諸。法。相。即。自。在。門。九。に。唯。心。廻。轉。善。成。門。十。に。託。事。顯。法。生。解。門。是。れ。な。り。是。を。前。賢。は。古。十。と。云。ふ。二。は。賢。首。大。師。の。華。嚴。經。探。玄。記。第。一。紙。左。一。の。所。立。に。し。て。清。涼。大。師。の。華。嚴。經。玄。談。第。六。紙。右。華。嚴。經。畧。策。紙。左。三。等。之。を。稟。け。圭。山。大。師。は。圓。覺。經。大。疏。第。四。上。紙。右。五。注。法。界。觀。門。紙。左。五。等。に。之。を。相。繼。承。せ。り。乃。ち。一。に。同。時。具。足。相。應。門。二。に。廣。狹。自。在。無。礙。門。三。に。一。多。相。容。不。同。門。四。に。諸。法。相。即。自。在。門。五。に。隱。密。顯。了。俱。成。門。六。に。微。細。相。容。安。立。門。七。に。因。陀。羅。網。法。界。門。八。に。託。事。顯。法。生。解。門。九。に。十。世。隔。法。異。成。門。十。に。主。伴。圓。明。具。德。門。是。れ。な。り。第。二。祖。智。儼。師。の。所。立。を。古。十。と。云。ひ。而。し。て。第。三。祖。法。藏。師。の。所。立。を。新。十。と。云。ふ。蓋。し。十。布。列。の。次。第。を。爲。す。所。以。は。華。嚴。經。文。義。綱。目。紙。右。三。に。賢。首。大。師。は。十。の。布。列。分。齊。を。示。し。て。釋。前。十。門。中。初。是。諸。緣。契。合。義。是。總。門。也。約。緣。起。全。有。力。全。無。力。義。故。有。相。容。門。也。約。緣。起。空。有。義。故。有。相。即。門。也。約。緣。起。力。用。重。重。攝。故。有。帝。網。門。也。約。緣。起。有。無。各。不。盡。並。故。有。隱。顯。門。也。約。緣。起。同。體。門。攝。法。故。有。微。細。門。也。約。緣。所。起。法。分。前。後。際。

故。有。十。世。門。也。約。緣。起。諸。門。所。收。諸。法。各。有。純。雜。故。有。純。雜。門。也。約。緣。起。自。性。故。有。唯。心。門。也。約。緣。起。相。用。理。觀。如。事。故。有。託。事。顯。法。門。也。此。上。十。義。通。一。之。經。思。部。と。云。ひ。又。華。嚴。經。探。玄。記。第。一。紙。左。七。に。十。の。布。列。分。齊。を。示。し。て。十。同。異。圓。備。義。謂。以。前。九。門。總。合。爲。一。大。緣。起。故。致。令。多。種。義。門。同。時。具。足。也。由。住。一。遍。應。故。有。廣。狹。自。在。也。由。就。體。就。用。故。有。相。即。相。入。也。由。一。攝。多。時。爲。顯。令。一。入。多。爲。隱。多。攝。一。入。亦。爾。又。異。門。即。入。爲。顯。令。同。體。爲。隱。同。顯。異。隱。亦。爾。又。由。以。異。門。攝。同。體。中。相。入。義。故。現。微。細。門。也。由。異。體。相。入。帶。同。體。相。入。故。有。重。重。無。盡。帝。網。門。也。由。此。大。緣。起。法。即。無。礙。法。界。法。門。故。有。託。事。顯。法。門。也。由。此。融。通。自。在。令。依。此。法。上。所。辨。時。法。亦。隨。此。無。礙。自。在。故。有。十。世。門。也。由。此。法。門。同。一。緣。起。相。帶。起。故。隨。一。門。必。具。一。切。故。有。主。伴。門。也。と。云。ひ。華。嚴。經。玄。談。第。六。紙。左。探。玄。記。第。一。紙。左。一。華。嚴。經。畧。策。紙。右。四。等。に。は。華。嚴。聖。典。に。於。ける。不。共。の。玄。旨。を。讚。美。せ。り。而。し。て。十。玄。門。所。說。の。古。十。玄。に。對。し。て。華。嚴。經。探。玄。記。に。新。十。玄。を。立。て。清。涼。圭。山。兩。大。師。等。並。び。に。新。十。玄。を。相。承。せ。る。所。以。は。如。何。と。云。ふ。に。賢。首。大。師。所。立。の。新。十。玄。は。至。相。大。師。所。立。の。古。十。玄。の。中。第。六。の。諸。

藏純雜具德門を改めて、第二に廣狹自在無礙門と爲し。第九の唯心廻轉善成門を改めて、第十に主伴圓明具德門を立てたるものにして、是れ古十玄に立つる諸藏純雜具德門は、若し一乘十玄門に、此は諸度門に約して説く。一の施門に就きて説くが如きは、一切の萬法皆悉く施と名づく、所以に純と名づく。而かも此の施門は、即ち諸度等の行を具するが故に、雜と名づく。是くの如く純と雜とは、相妨礙せざるが故に、具德と名づくと示す如きは、即ち事事無礙の理を顯はすこと勿論なれども。若し一理を以て純とし、萬行を以て雜とする時は、唯だ事理無礙の義を顯はすこととなりて、此の門或は事理無礙に亂して、圓旨を失ふ。又、唯心廻轉善成門は、是れ諸法の無礙なることを顯はす所由にして、無礙の相を示すものに非ず。故に廣狹自在無礙門及び主伴圓明具德門を立て、彼の二門を立てざるなり。通路に曰く、

十玄門法。華嚴諸祖相承建立。高祖杜順帝心尊者法界觀中。周遍含容立十無礙。而未必是十玄門名。多分亦有十玄門相。正立十玄在第二祖雲華尊者。即至相寺智儼大師是也。今此章中所明十玄。全移至相所立十玄。賢首尊者探玄記等。新

立十玄。於至相師所立十玄。研覈精詳陳十玄門。至相所立名古十玄。賢首精覈名新十玄。問。香象大師於古十玄。何精研新立十玄。答。至相十玄全如今章。賢首於中除諸藏純雜具德門。其處加補廣狹自在無礙門。又除古唯心廻轉善成門。加補主伴圓明具德門。新立十玄名今十玄。清涼圭山兩祖師義。一同即用新立十玄。然大疏序支文第一舉諸藏純雜門。爲是十數。重出此門。其主伴門前說義門明其義故。新立十玄次第相者。一同時具足相應門。二廣狹自在無礙門。三一多相容不同門。四諸法相即自在門。五祕密隱顯俱成門。六微細相容安立門。七因陀羅網境界門。八託事顯法生解門。九十世隔法異成門。十主伴圓明具德門是也。問。何故香象除古純雜。新立廣狹自在無礙。答。演義鈔一四云。萬行芬披等者。第十諸藏純雜具德門。此門至相十玄中有此名也。然有二意故。賢首改爲廣狹自在無礙門。一者若以契理爲純萬行爲雜。則是事理無礙非事事無礙。設若菩薩大悲爲純。盡未來際。唯見行悲餘行如虛空。若約雜門即萬行俱修者。此二門異亦不成事事無礙。二者如一施門。一切萬法皆悉名施。所以名純。而此施門。即具諸度行故名爲雜。如是純之與雜。不相障礙故。名具德者。則事事無

礙義成。而復一中具諸度。諸度存即相入門。若一即諸度。復似相即入故。不存之改爲廣狹。今以至相但約行爲小異。此段略無主伴故。復出之以成十義耳。(中畧)一段全文相因連引。有此意故。改爲廣狹。其唯心廻轉門。唯是無礙所因。非無礙相故不立之。此處建立主伴圓明具德門。主伴歷焉無所濫故。十玄義竟。と論せり。是くの如く、十玄緣起を談するに新古の別あり。仍て項を改めて解説すべし。

其二 別說

一 同時具足相應門

十玄門の第一同時具足相應門とは、先に説く教義理事等の所依の體事、即ち迷悟染淨有情非情山河大地等の法界萬有の同時俱時に具足相應して、一大緣起を成じて。渾然たる大曼荼羅を成じ。前後始終等の殊別あること無く。逆順交參して而かも雜せず、自在無礙にして、能く緣起の際を成せるを云ふ。蓋し宇宙萬有の同時俱時に具足相應して、彼此相依り相成じ、以て一大曼荼羅を成する所以

は、是れ緣起の實德法性海印三昧の力用に依るものにして。宛も明淨なる大圓鏡裡に、善惡美醜大小長短一切の事物を具足顯現して、然かも同時俱時なるが如く。一切理事の法門、重重無盡に炳然として、同時に顯現圓成せり。彼の天台家に、如是相と談じ、諸法常本位と説くもの、亦此の意に外ならず。至相大師は、華嚴一乘十玄門に、

釋第一同時具足相應門者。即具明教義理事等十門同時也。何以得如此耶。

良由因緣實德法性海印三昧力用故得然。非是方便緣修所成故得同時。今且據因果同時者。若小乘說因果者。即轉因以成果。因滅始果成。若據大乘。因果亦得同時。而不彰其無盡。如似舍緣以成舍因果同時成而不成餘物。以因有親疎故。所以成有盡。若通宗明因果者。舉疎緣以入親。是故如舍成時。一切法皆一時成。若有一法不成者此舍亦不成。如似初步若到一切步皆到。若有一步非到者。一切步皆非到。故經云。雖成等正覺。不捨初發心。又如大品經云。非初不離初。非後不離後。(中畧)今但舉十門者。欲成其無盡。若論三種世間圓融。可但一事具此十門。亦具無盡無量法界虛空法門。成其無盡復無盡。

と示し。又賢首大師は華嚴五教章卷中紙右十一に、
同時具足相應門。此上十義。同時相應成一緣起。無有前後始終等別。具足一切。自在逆順參而不雜。成緣起際。此依海印三昧。炳然同時顯現成矣。
と説き。華嚴金師子章左二紙に、

金與師子同時。圓滿具足。名同時具足相應門。

と示し。清涼大師は華嚴經玄談第六紙十九に、一蓮華葉、或は一微塵の如きは、則ち教等の十對を具して、同時に相應し具足圓滿す。亦後の九門及び彼の門の中の所具の教等を具す。是れ總なるを以ての故に、故に下の文に云はく、一切の法門無盡海、同じく一法道場の中に會すと。華藏の頌に云はく、華藏世界所有の塵、一一の塵中に法界を見ると。是を同時具足相應門なりと云ひ。華嚴經畧策紙二十三には、同時具足相應門とは、大海の一滴に、百川の味を含むが如しと示せり。抑も宇宙の森羅萬有は、時間を以て論ずるも無限なり。空間を以て論ずるも亦無邊なり。萬有は各々其の本位に住して、千差萬別孤起獨存するが如しと雖も、其の本位に住し、各自の本分を全ふし。即ち緣起相成相依、以て自から各

々本分を改變せずして、同時俱時同處同際に具足し。相應し違背せずして、緣起の至極を成じ。一大曼荼羅を莊嚴す。蓮華藏莊嚴世界と云はむか、瑠璃光世界と云はむか、密嚴世界と云はむか。二十九種無量の莊嚴、同時俱時に具足相應して、一大法界を成就す、豈に是れ海印三昧の所現ならざらんや。華嚴經に善財、普賢の一一の身分、一一の毛孔を見るに、皆十方一切世界、三千界の中の地水等の輪、諸山河海人天宮殿、種種の時劫諸佛菩薩あり。現在の世界を見るが如く、前後際、一切世界の中に、悉く爾かく明かに見る。又十方刹塵の中に、三世一切の境界、一切の佛刹、一切の衆生、一切の佛の出興菩薩を見、佛菩薩衆會の言音を聞く。と。釋迦文佛が我。此。安。穩。土。常。在。靈。鷲。山。天。人。常。充。滿。と宣説したまひしは、實に偶然にあらざるなり。

一一 一多相容不同門

一多相容不同門とは、上に既に諸の緣起同時に相應して、一緣起を成ずることを明かすと雖も。未だ諸緣力用有力無力、互に容入するの義を明かさず。今此の

義を明かさんとするが故に第二に此の門あり。華嚴經文義綱目に、緣起の全有力無力に約するが故に、相容門ありと云へるは、即ち此の意なり。上に説く因果理事等の所依の體事、即ち宇宙染淨等の森羅の萬象は随つて一門を擧ぐれば、即ち餘の因果理事等の一切の法門を融攝して、主伴互に具足し、自他互に相含容受して。一は多に入り、多は一に入りて、無礙自在に、而かも其の體不同にして、各々本來の面目を保有し、自己の本分に住して、一多更に雜亂すること無きを云ふ。至相大師の華嚴一乘十玄門には、

一多相容不同門者。此約理說。以一入多。多入一故名相容。即體無前後。而不失一多之相。故曰不同。此即緣起實德。非天人所作。故經云。以一佛土滿十方。十方入一亦無餘。世界本相亦不壞。自在願力故能爾。又如普賢品云。一切衆生身。入一衆生身。一衆生身。入一切衆生身。又云。一切諸世界。令入一塵中。世界不積聚。亦復不雜亂。須彌入芥子。

是を一多相容不同門とすと示し。賢首大師の華嚴五教章卷中には、
一多相容不同門。此上諸義隨一門中。即具攝前因果理事一切法門。如彼初

錢中攝無盡義者。此亦如是。然此一多雖具有多。仍一非即是其多耳。多中一等準上思之。餘一門中。能悉如是重重無盡也。此經偈云。以下一佛土滿十方。十方入一亦無餘。世界本相亦不壞。無比功德故能爾。然此一多雖復相含容受自在無礙。仍體不同也。所由如上錢義中釋。此有同體異體。準上思之可解。と示し。高山寺明惠上人の華嚴金師子章光顯鈔卷上四十八紙左に依るに、

言一多無礙者。謂一入多多入一。一即多多即一。故云無礙。宗家明此義惣有二門。一異體門。二同體門。

と云ひ。具さに金師子の喩に入りて、同體異體の順逆二數に於て。有力無力、無力有力、相入无礙自在なることを説明し、最も精細を極む。又華嚴經旨歸二十紙左には、
一蓮華葉即具此十義。謂此華葉則同真性不礙事相。宛然顯現。(中畧)即此華葉具無邊德不可言一。融無二相不可言多。此一即多。多復即一。一多無二爲一華葉。經云。知一即多多即一等。謂一多門也。

と論じ。華嚴金師子章に、金と師子と、相容成立して、一多無礙なり。中に於て、理事の諸相、各々不同なり。或は一、或は多、各々自位に住するを、一多相容不同門と

名づくとし。清凉大師は華嚴經疏鈔玄談冊第八卷第一八五紙左第三に、

一多相容不同門。由一與多互爲緣起力用交徹故。得互相涉入是曰相容。不壞其相故云不同。如一室內千燈並照燈隨蓋異一一不同燈隨光通光光涉入常別常入。經云。一。中解無量。無量中解。一。了彼互生起。當成無所畏。此之燈喻。亦可喻於相即。直就光看不見別相。唯一光故。

と云へり。蓋し宇宙萬有の一多相容不同なる所以は、是れ緣起實徳の然らしむる所にして、所謂天人の所作に非ず。今試みに一の屋舎に於て、一の柱を取りて、之を主として考ふるに、餘の一切の梁瓦石等は悉く伴となりて、一の主なる柱に歸し。又一梁を取りて之を主として考ふるに、餘の一切の柱瓦石等は悉く伴と爲りて、一の主なる梁に歸せざるなし。宇宙の萬有も亦然かるなり。森羅の萬象互に主となり伴と爲りて。一塵に一切法を攝し、一切法に一塵を入れ。主伴無礙相入無礙ならざるなし。華嚴聖典に、一刹種を以て、一切に入れ。一切を一に入るゝに亦餘なし。體相本の如くにして差別なし。無等無量にして、悉く周遍すと説き。一身の中に於て、悉く能く包滿して、法界不可説不可説の身を

盡す。而かも衆生界は増減する所なし。一身の如く、周遍法界の一切の身も悉く亦是くの如しと説くは此の意なり。維摩詰所經卷中縮黃七に、

舍利弗言。居士。未曾有也。如是小室乃容受此高廣之座。於毘耶離城無所妨礙。又於閻浮提聚落城邑及四天下諸天龍王鬼神宮殿亦不迫逐。維摩詰言。唯。舍利弗。諸佛菩薩有解脫。名不可思議。若菩薩住是解脫者。以須彌之高廣。內芥子中無所增減。須彌山王本相如故。而四天王忉利諸天。不覺不知已之所入。唯應度者。乃見須彌入芥子中。是名不思議解脫法門。又以四大海水入一毛孔。不燒魚鼈鼉鼉水性の屬。而彼大海本相如故。と説ける。實に其の甚深廣大の理のある所を推知すべきなり。

三 諸法相即自在門

第三に諸法相即自在門とは、上に説く諸の緣起は、常に力用の有無に由りて、互に相容入するのみに非ず。即ち體の空有に相即無礙自在なり。然るに上來既に諸法の相入の義を説くと雖も。猶ほ未だ相即自在の義を明かさず、今此の義を

明かさんと欲するが故に、第三に此の門あり。華嚴經文義網目に、緣起の空有の義に約するが故に、相即門ありと云へる、即ち是の意なり。乃ち教義理事等の諸義、即ち法界の萬有は、當に其の力有に於て、有力無力相含容受無礙自在なるのみならず。其の體も亦空有相即して、一即一切、一切即一、重重無盡、圓融無礙なることを説く一門なり。至相大師は、華嚴一乘十玄門に、

此約用説。還就約教義理事等十門。取其三種世間圓融無礙自在故。一即攝一切。成其無盡復無盡。以其無盡故。相即復相入。

と云ひ。賢首大師は、華嚴五教章卷中に、

諸法相即自在門。此上諸義、一即一切。一切即一、圓融自在無礙成耳。若約同體門中。即自具足攝一切法也。然此自一切復自相即入。重重無盡無盡故也。然此無盡皆悉在初門中也。故經云。(賢首品)初發心菩薩一念功德。深廣無邊際。如來分別説。窮劫不能盡。何況於無量無數無邊劫。具足修諸度諸地功德行。義言一念即深廣無邊者。良由緣起法界一即一切故耳。如彼同體門中一錢即得重重無盡義者即其事也。何況無邊劫者。即餘一一門中。各顯無盡義者是

也。所以爾者。此經又云。(發心功德品)初發心菩薩即是佛故也。由此緣起妙理始終皆齊。得始即得終。窮終方原始。如上同時具足故得然也。又云。(淨眼品)在於一地普攝一切諸地功德也。是故得一即得一切。又云。(十住品)知一即多。多即一故也。十信(賢首品)終心即作佛者即其事也。問。如同體一門中即攝一切無盡者。爲一時俱現耶。爲前後耶。答。於一門中一時炳然現一切者。屬微細攝。隱映互現重重者。屬因陀羅攝。餘義即同即異即多即少即有即無即始即終。如是自在具足一切無盡法門。仍隨舉一爲首餘即爲伴。道理一不差失。舊來如此。此辨同體一門中具足自在無窮德耳。餘異體等門中亦華思之。(中畧)此經偈云。(僧祇品)不可言説諸劫中。演説一切不可説。不可説劫猶可盡。說不可説不可盡。又偈云。(發心品)一切衆生心。悉可分別知。一切刹微塵。尙可算其數。十方虛空界。一毛猶可量。菩薩初發心。究竟不可量。良由此一乘圓極自在無礙法門。得一即得一切故耳。(中畧)問。上言一念即作佛者。三乘中已有此義。與此何別。答。三乘望理爲一念即作佛。今此一乘。一念即得具足一切。教義理事因果等。如上一切法門及與衆生。皆悉同時。同時作佛。後後能辨新斷惑。

亦不住學地而成正覺。具足十佛以現無盡逆順德故。及因陀羅微細九世十世等。遍通諸位。謂十信終心已去。十解。十行。十廻向。十地。及佛地等。同時遍成。無有前後。具足一切耳。然此一念。與百千劫無有異也。宜須思之。と示し。又華嚴經旨歸に、

此一華葉。必廢已同他。舉體全是彼一切法。而恒攝他同己全彼一切即是己體。是故己即是他。他即是己。己即是他已不立。他即是己他不存。他己存亡同時顯現。經云。長劫即是短劫。短劫即是長劫等。是謂第五相是門也。

と説き。華嚴金師子章に師子の諸根、一一の毛頭に、皆各々師子を全收し盡して、一一に皆徹遍せり。師子の耳即ち眼、眼即ち鼻、自在に成立して、障礙なきが故に、故に諸法相即自在門と名づくこと云ひ。或は又清涼大師は華嚴經玄談第六に、此の一華葉己を廢して他に同ず。舉體全く是れ彼の一切の法にして、恒に他を攝して己に同じ、彼の一切をして、即ち是れ己體ならしむ。一即相即し、混じて障礙なしと云ひ。華嚴經畧策に、

諸法相即自在門。如下金與金色二不相離也。

と説けり。蓋し宇宙森羅の萬有は、其の用に於て、有力無力相入自在なるのみならず、其の體に於ても、空有相即して、一即一切、一切即一、主伴無礙なること、喩へば一個の柿實を取りて是を檢するに、此の一個は、一は即ち一なりと雖も、而かも其の實を尅すれば、幾多無數の細胞より成立し、其の一一の細胞は、又無數の分子より成立し、一一の分子は、無數の電子より成立して、是の一個の柿實を成立せり。是に依るに、此の一は、即ち單なる一に非ずして、即ち一即多の一なり。又多は單なる多に非ずして、一の即するの多なり。一即多、多即一、自在無礙なり。宇宙の萬有も、亦同じく爾かるなり。乃ち一即一切、一切即一にして、主伴重重無盡なること、亦是くの如し。是を諸法相即自在門と爲すなり。

其四 因陀羅網境界門

因陀羅網境界門とは、上に説く諸の緣起の諸法の、即入無礙自在なるは、是れ唯だ一重の即入のみに非ずして、鏡影各互に重重に即入すること、猶ほ因陀羅網の重重無盡無盡に即入するが如し。然るに上には既に一重の即入を明かすと雖も、

未だ重重に即入すること彼の帝網の如くなるを明かさざるが故に、今喻に寄せて、此の義を明かさんとして、即ち此の一門あり。華嚴經疏鈔玄談に清涼大師曰く、如_下天帝殿珠網覆上一明珠内萬像俱現諸珠盡。然又互相現影。影復現影。重重無盡故。千光萬色雖重重交映。而歷歷區分。又如兩鏡互照重重涉入傳躍相寫遞出無窮。

と云へり。蓋し宇宙森羅の萬有は、本來法性の實徳なるが故に、互に主となり伴となりて、重重即入無礙なるが故に、即ち能く大曼荼羅を成じて、宛かも天帝釋宮の羅網の重重無盡に隱映するが如く。有力無力、空有相入相即して、一にして多、多にして一、其の有機關係を爲せること、不可説不可説なり。此の義を顯はすが、即ち今の一門にして、至相大師は、一乘十玄門に、

因陀羅網境界門者。此約譬以明。亦復具有教義等十門。如梵網經。即取梵宮羅網爲喻。今言因陀羅網者。即以帝釋天網爲喻。帝釋天網爲喻者。須先識此帝網之相。以何爲相。猶如衆鏡相照。衆鏡之影。現一鏡中。如是影中。復現衆影。一一影中復現衆影。即重重現影。成其無盡復無盡也。是故如第七

地讚請經云。於一微塵中各示那由陀無量無邊佛於中說法。此即智正覺世間。又云。於一微塵中。現無量佛國須彌金剛圍。世間不迫迤。此即據器世間。又云。於一微塵中。現有三惡道天人阿修羅。各々受業報。此即據衆生世間。又云。如一微塵所示現。一切微塵亦如是故。於微塵現國土。國土微塵復示現。所以成其無盡後無盡。

と示し、賢首大師は、華嚴五教章卷中に、此但從喻異前耳。此上諸義體相自在隱映互現。重重無盡故。

と説き、又華嚴經旨歸には、此の華葉の一一の塵中に、各々無邊の諸の世界海あり。世界海の中に復た微塵あり。此の微塵の中に、復た世界あり。是くの如く重重にして、窮盡すべからず。是れ心識思量の境界には非ず。帝釋殿の天珠網の覆ふが如きは、珠既に明徹にして、互に相影現す。所現の影、還りて能く影を現す。是の如く重重にして、窮盡すべからず。經に云はく、因陀羅網世界の如しと。十地論に云はく、帝網の差別とは、唯だ智のみ能く知る眼の所見に非ずと。是れ所謂第八の帝網門なりと説き、華嚴金師子章に、此の師子の眼耳支節、一一の毛處

に、各々に師子を全收す。一一の毛處に、師子同時に、頓に一莖毛の中に入る。一
 一の莖毛の中に、各々に皆無邊の師子あり。又復た一一の毛に、此の無邊の師子
 を載せたり、還りて一莖毛の中に入る。是くの如く重重無盡無盡にして、帝網の
 天珠の如くなるを、因陀羅網境界門と名づくと言き。清凉大師は、華嚴經玄談第
 六紙^{二十五}に、此の一華一塵稱性なるを以ての故に、能く一切を攝す。餘塵餘法も、
 亦皆稱性なり。何ぞ一法として、攝せざることあらんや。應さに一塵を以て、餘
 塵に對して、以て重重を辨すべし。謂く、一塵の内に、所含の諸刹あり。彼の所含
 の刹も、亦塵を攪りて成す。此の能成の塵も、亦須らく稱性なるべし。塵既に稱
 性なり。亦須らく刹を含むべし。第二重の中に含む所の諸刹も、亦塵を攪りて
 成す。塵復た稱性なり。亦須らく刹を含むべし。第三重の塵に、第四重の刹を
 含む。第四重の塵に、第五重の刹を含む。重重に塵成じ。稱性にして、無窮無盡な
 ること、猶ほ鏡燈の如しと云ひ。凝然大徳の華嚴五教章通路記第二十七に依る
 に、帝釋宮の因陀羅網を釋して、切利天上の帝釋宮殿は、網を張りて上に覆ひ、網を
 懸けて殿を飾る。彼の網は、皆寶珠を以て之を作る。目毎に珠を懸け、光明赫々

として、照燭明朗なり。珠玉無量にして、算數の表に出づ、網珠玲瓏として、各々珠
 影を現す。一珠の中に、諸の珠影を現す。珠珠皆爾かるなり。互に相影現して、
 隱覆する處無く。了了分明にして、相貌朗然たり。此は是れ一重の各々影現な
 り。珠の中の所現の一切の珠影は、亦諸珠の影像形體を現す。此は是れ二重の
 各々影現なり。二重所現の珠影の中に、亦一切の所懸の珠影を現すと云へり。
 宇宙法界の一塵一法無窮無盡に、主伴具足して、一即一切、一切即一相即相入、無礙
 自在なる、亦是くの如しと説ける、又此の意なり。

其五 微細相容安立門

微細相容安立門とは、上來緣起の諸法の體用即入重重無盡の義を明かすと雖も、
 而かも未だ彼の緣起の諸法の大小を壊せずして、而かも一門の内に於て、同時に
 具足顯現するの義を明かさず。故に此の門に於て、諸義理事等の諸義即ち宇宙
 萬有は、一念の中に於て、始終同時前後逆順等の一切の法門を具足して、炳然とし

て同時に頭を同じくして顯現し、其の明了なること、猶ほ東箭の頭を齊しくして、顯現するが如しと云ふ是れなり。華嚴經文義綱目に、緣起同體門に法を攝するに約するが故に、微細門ありと云へり。至相大師の一乘十支門に依るに、微細相容安立門者。此就相說。如一微塵是即其小相。無量佛國須彌金剛等即其大相。以緣起實德無礙自在。致使相容非是天人所作故安立。如似一微塵中有穢國土。而即於此微塵中。具有不可說淨國。在此微塵中。而於彼穢國不相妨礙。而此淨國之相仍亦不失。乃至有諸國土尸羅盆幢形三方及四維等國。在此一微塵中。常不相妨礙故。普賢品云。一切諸世界入於一微塵中。世界不積聚。亦復不離散故。知若與普相應。能於一微塵中。見不可說國土。而不雜亂不增不減。豈可須彌納芥子將爲難事哉。理事等十門安立相容亦如是。と示し。又賢首大師は、華嚴五教章卷中に、

微細相容安立門。此上諸義。於一念中具足始終同時前後逆順等。一切法門於一念中。炳然同時齊頭顯現無不明了。猶如東箭齊頭顯現耳。故此經云。菩薩於一念中。從兜率天降神母胎。乃至流通舍利。法住久近及所被益諸衆生等。

於一念中皆悉顯現。廣如經文。又云。一毛孔中無量佛刹。莊嚴清淨曠然安住。又云。於一塵內微細國土一切塵等。悉於中住。宜可如理思之。と示し。華嚴金師子章に、師子或隱。或顯。若一。若多。定純。定雜。有力無力。即此即彼。主伴交輝。理事齊しく現す。皆悉く相容して礙へず安立し。微細に成辨するが故に、微細相容安立門と名づくを釋し。清涼大師は、華嚴經玄談第六に、微細の言に總じて三義あり。一には所含の微細、猶ほ芥餅の如し。毛孔能く彼の諸刹を受くるも、諸刹能く毛孔に遍すること能はざるを以ての故に。毛孔は稱性に據るを以て。却て瑠璃の餅の如し。刹は存相に約するが故に、芥子の内に在るが如し。二には能含の微細に約す。一毛一餅、即ち能く含むを以ての故に、下に證を引くが如し。三には難知微細に約す、微塵大ならず、而かも刹小ならず。而かも能く廣容するは、即ち難知の義なり。一能く多を含むを、即ち相容と曰ひ。又法法皆爾るが故に相容と云ひ。一多壞せざるが故に、安立と云ふ。炳然齊現とは、炳とは明かなり。瑠璃の餅に多くの芥子を盛るに、餅を隔て、頼に見るが如しと云ひ。華嚴經畧策に、瑠璃瓶に多くの芥子を盛るが如しと示せ

り。蓋し靜かに法界の萬有を觀するに、一見雜然紛然たるも、其の間自から儼然侵すべからざる體系と組織とを有して。彼此相依り相待ちて、以て法界大曼荼羅を成ずること、宛かも玲瓏たる瑠璃餅に、幾多無數の芥子粒を盛りたるが如し。法界の不可思議なる、豈に驚嘆すべきにあらずや。

其六 祕密隱顯俱成門

祕密隱顯俱成門とは、上來既に一切緣起の諸法の、一多重重無盡に相入相即し。而かも大小の相を壞せずして、微細に安立するの義を説くと雖も。未だ彼の緣起諸法の隱顯俱時成就の相を明かさず。今此の義を明かさんと欲するが故に、此の一門あり。文義綱目に、緣起有無各々並ばざるが故に、隱顯門あるなりと云へるは、即ち此の意なり。祕密隱顯俱成とは、祕密とは深秘微密の義、隱顯とは、顯顯了の義、俱成とは、俱時成就の義なり。華嚴經探玄記第一紙六十七に依るに、由一攝多時爲顯。令就體相即爲隱。多攝一入亦爾。又就用相入爲顯。令就體相即爲隱。即顯入隱亦然。又異門即入爲顯。令同體爲隱。同顯異隱亦爾。

又由以異門攝同體中相入義故。

と云へり。是くの如く、一切の諸法は、甚深微妙にして、隱覆顯了俱時に成就するが故に、祕密隱顯俱成門と稱するなり。至相大師は一乘十玄門に、

祕密隱顯俱成門者。此約緣起說也。還具前教義十門。所言隱顯者。如涅槃經半字及滿字。昔說半字故。半字即顯。滿字即隱。今日說滿字者。滿字即顯。半字即隱。此即約緣而說隱顯。又如月喻品云。此方見半。彼方見滿。而彼月性實無虧盈。隨緣所見故有增減。此即是大乘宗中說。若通宗辨者。不待說與不說。常半常滿。隱顯無別時。如彼月性常滿而常半半滿無異時。是故如來於一念中八相成道。生時即是滅時。同時俱成故。所以稱祕密。如似十數一即十一即是顯二三四至十即爲隱。又眼根入正受。即是顯。於色法中三昧起即名隱。而此隱顯體無前後故言祕密也。と説き。賢首大師は華嚴五教章卷中に、

祕密微顯俱成門。此上諸義。隱覆顯了俱時成就也。故此經云。(賢首品)於此方入正受。他方三昧起。眼根入正受。聲塵三昧起等云云。又云。男子身入正

受。女人身三昧起等云云。於一微塵入正受。一切微塵三昧起。一切微塵入正受。一毛端頭三昧起。如是自在此隱彼顯。正受及起定同時秘密成矣。と云ひ。又賢首大師は華嚴經旨歸に於ても此の華嚴既に一切の法に遍す。彼の一切の法も亦皆普ねく遍す。此れ能く彼れに遍すれば則ち此れは顯にして、彼れは隱なり。彼れ能く此れに遍すれば則ち彼れは顯にして、此れは隱なり。此れ能く彼れを攝すれば亦此れは顯にして、彼れは隱なり。彼れ能く此れを攝すれば亦彼れは顯にして、此れは隱なり。是くの如く此と彼と各々顯に即し、隱に即することありて障礙あること無し。是れ所謂第六の隱顯門なりと示し。又大師は華嚴金師子章に於ても若し師子を看れば即ち唯だ師子のみにして、金無し。即ち金は隱れ、師子は顯はる。若し金を看れば即ち唯だ金にして、師子無し。即ち金は顯はれ、師子は隱る。兩處に看れば即ち俱に顯はれ、俱に隱る。隱を即ち秘密と名づけ。顯を即ち顯著と名づく。故に秘密隱顯俱成門と名づくと釋し。又清凉大師は華嚴經玄談第六に華嚴く彼を攝するときは、則ち一は顯はれ多は隱る。一切華を攝する時は、則ち一は隱れ多は顯はる。顯と顯と俱ならず、

隱と隱と並ばず。隱は顯はれ顯は隱る、同時無礙にして、全攝俱泯存亡俱に成ず。八日の月の隱顯同時なるが如しと云ひ。又清凉大師は華嚴經畧策には、片月空に澄めば、晦明相並ふが如しと云へり。蓋し法界の大曼荼羅は、森々羅列して、互に隱となり顯となり、顯と爲り隱となりて。而かも同時俱時に成就し、緊密なる調和を保ち、以て無礙の法界を成せり。此の門は、即ち此の義を説明せるものにして、所謂一華一草にも、無限の眞理を表し。事と理、理と事、因と果、果と因、圓融無礙ならざること無し、是を秘密隱顯俱成門と爲すなり。

其 七

諸藏純雜具德門(古十支)と廣狹自在

無礙門(新十支)

諸藏純雜具德門とは、上來既に一切緣起の諸法の、重重無盡に相即相入し、及び隱顯俱時に成就するの相を説くと雖も。未だ緣起諸法の互に相攝藏して、純雜自在具德の義門を説かず。此の故に此の門を設けて、法界、即ち宇宙萬有の純雜具德の相を論ずるなり。華嚴五教章卷中紙二十六に、

諸藏純藏具德門。此上諸義。或純或雜如前人法等。若以入門取者。即一切皆人故名爲純。又即此人門。具含理事等一切差別法故名雜。又如菩薩入一三昧。唯行布施無量無邊。更無餘行故名純。或入一三昧。即施戒度生等。無量無邊諸餘行俱時成就也。如是繁興法界。純雜自在無不具足者矣。

此約諸度門說。何者如似就一施門說者。一切萬法皆悉名施。所以名純。而此施門即具諸度等行故名爲雜。如是純之與雜不相妨礙故名具德。如大品經一念品明。從始至終不出一念。即名爲純。而此一念之中具於萬行即名爲雜。雖爾而與此中純雜義別。何者如彼經一念者。同是無得相應。不明緣起德用。若此明純者。若約施門一切皆施。若說忍門一切皆忍。說忍門者。諸行如虛空即名爲純。而此忍門具足諸門即名爲雜。純雜不相亂故名具德。故不同彼念品。與釋。又華嚴五教章中卷纂釋第七所引の文に、若し十事の事法に約すれば、即ち通じて緣起の萬法を指して以て法と名づく。而かも一を擧げて能藏と爲せば、餘は即ち所藏なり。法法皆是くの如きが故に諸藏と云ふなりと云へり。即

ち森羅の萬法は、一即一切、一切即一にして、主伴具足重重無盡なるが故に、若し其の隨一を擧げて能藏と爲せば、即ち餘は所藏となりて、若しくば純、若しくば雜、互に相混亂することなく、同時一念に具足自在なるが故に、諸藏純雜具德と名づくるなり。華嚴經文義綱目に、緣起の諸門所收の諸法に、各々純雜あるに約するが故に、純雜門あるなりと云ひ。華嚴金師子章に、此の師子の眼に、即ち一切純に是れ眼なり。若し耳に師子を收め盡さば、即ち一切純に是れ耳なり。若し諸根同時に相收め盡さば、皆具足して、即ち一一皆純に皆雜なり。亦一一皆是れ圓滿藏なるが故に、諸藏純雜具德門と云ふと云へる、何れも廣の義邊に依るなり。是くの如く、藏の字を釋するに、廣狹の二義ありと雖も、其の實を刻すれば、唯だ行のみに非ずして、廣く一切の諸法に通じて、純雜無礙自在なることを示すに在り。純雜互に相混亂すること無く、同時一念に具足して、自在なるが故に、諸藏純雜具德門と稱するなり。然るに華嚴經探玄記第一に依るに、此の門を改めて、廣狹自在無礙門と名づけ。華嚴經旨歸に、此の華葉其れ必らず普周して、邊際あること無し。而かも恒に本位の分齊を壊せず。此れ則ち分則ち無分、廣狹無礙なり。

經に云はく、此の諸の華葉、普ねく法界を覆ふと釋し。清涼大師は華嚴經玄談第六に、初めに廣狹の義を明かし、後に純雜の義を會して、即ち彼の華葉法界に普周して、而かも本位を壞せず。分即無分、無分即分なるを以て、廣狹自在にして無障無礙なり。十定に云はく、一の蓮華あり、其の華廣大にして、十方際を盡す、不可説の葉、不可説の實を以て莊嚴と爲す。衆生見る者禮敬せずと云ふこと無しと、是の故に或は唯廣にして無際なり、或は分限歴然たり。或は即廣即狹なり。或は廣狹俱泯す。然るに此の廣狹は、亦純雜の義と名づく、法界に普周するが故に純一無二なり。本位を壞せざるときは、則ち雜を妨げず。萬行も例して然かるなりと云ひ。華嚴經略策には、徑尺の鏡に千里の影を見るが如しと云へり。蓋し純雜自在無礙門とは、是れ賢首大師の新たに立つる所にして、所謂新十玄の所立に係り。而かも此の門を以て、古十玄の諸藏純雜具德門に代ゆる所以は。清涼大師は華嚴經玄談第六に、廣狹自在門は、法界觀の中の廣容普遍の義に同じて、而かも名少しく異なる。此の門は、賢首の新立にして、以て至相の十玄の諸藏純雜具德門に替ふ。意に云はく、一行を純と爲し、萬行を雜と爲る等は、即ち事事無

礙の義なり。若し一理を純と爲し、萬行を雜と爲れば、即ち事理無礙なり。恐くは事理無礙に濫せんことを、所以に之を改むるなりと云ひ。又自義として、新古の兩意を會合することを説きて、賢首の意に云はく、萬行の純雜は、事理無礙に通じ、及び單に事に約して説くことあるが故に、是を廢するのみ。謂く同じく一法界なるが故に純なり。事相を壞せざるが故に雜なりとは、此は即ち事理無礙なり。一行長行の故に純なり。(一施即一切施なること) 餘行を妨げざるが故に、雜なりとは、此は事に約するなり。故に昔は(賢首大師を指す)之を廢して廣狹を立つ。今は清涼大師自身を云ふ會し取らんと欲す。即ち事は理に同じて、而かも遍きが故に純なり。一多を壞せざるが故に、雜なるときは、則ち亦事事無礙の義あり。入門を以て之を取るが如きは、則ち一切皆入なるが故に、名づけて純となし。入の内に多の法門あるが故に、名づけて雜と爲す。妙嚴品に説くが如し。諸の衆海各々唯だ一の解脱門を得るとは雜なり。普賢菩薩不思議解脱門を得るは雜なり。六十五に慈行童女の云はく、我、三十六恒河沙の佛所に於て、此の法を得ることを求むるに、彼の諸の如來各々異門を以て我をして、此の般若波羅蜜

普莊嚴門に入らしむるは、即ち純雜無礙なり。又、善財童子の求むる所の諸の善知識、各々我唯だ此の法門を知ると言ひ。又多劫に、此の法門を修むと云ふは、即ち純門なり。諸の善知識、皆推進して云はく、諸の菩薩の種種の知見、種種の修行、種種の證得の如しとは、此れ雜門なり。自から一を知ると云ひて、他の多あることを推す。自他異なりと雖も、然かも一身に属す。此れ亦純雜無礙門なり。又、善財、普く諸の善知識の解行徳證を獲るは、亦雜門なり。然るに上に引く所の數處の經文は、多くは皆行に約す。一行と多行と、純雜と爲るが故に、並びに通じて單に事に約することを明かすが故に、然かも徳相に通ず。若し無著無縛解脫廻向に准するに云はく、無著無縛解脫心を以て、普賢佛自在力を成就し、一門の中に於て示現す。不可説不可説劫を経て、窮盡あること無く。一切の衆生をして、皆悟入することを得せしむ。無著無縛解脫心を以て、普賢佛自在力を成就し、種種の門の中に於て示現す。不可説不可説劫を経て、窮盡あること無く。一切衆生をして、皆悟入することを得せしむと云へり。以て清涼大師の此門に於ける深意のある所を知るべし。

其八 十世隔法異成門

十世隔法異成門とは、上來既に緣起諸法の体用即入、及び純雜自在具徳の義を説くと雖も。未だ此の緣起諸法の九世十世の中に逼して、而かも同時に自他互に具足顯現するの義を明かさず。此の義を明かさんとするが故に、此の一門あり。文義綱目に、所起の法に約して、前後際を分つが故に、十世門ありと云へり。十世とは、華嚴經第三十八初紙世間品に、佛子、菩薩摩訶薩に十種の三世を説くあり。何等をか十と爲す。所謂過去世に過去世を説き。過去世に未來世を説き。過去世に現在世を説き。未來世に過去世を説き。未來世に現在世を説き。未來世に無盡を説き。現在世に未來世を説き。現在世に過去世を説き。現在世に平等を説き。現在世に三世即ち一念なることを説く。佛子、是を菩薩摩訶薩の説三世と爲す。此の十種の説三世に因れば、即ち普ねく一切の三世を説くなりと云ひ。賢首大師の華嚴經探玄記第十七十九紙之を釋し。又別に華嚴雜章門三十九紙に、十世章の一編あり。詳かに十世の義を釋す。即ち十世とは、過去現在未來の三世に、各々過去

現在未來の三世あるが故に、即ち九世を成じ。而かも此の九世は、迭に相即相入するが故に、一の總句を成じ、此の總別合して十世を成ずるものにして、一に過去の過去、二に過去の現在、三に過去の未來、四に現在の過去、五に現在の現在、六に現在の未來、七に未來の過去、八に未來の現在、九に未來の未來、十に此の九世を總じて、一念と爲すものは是れなり。此の十世各別にして、區分あるが故に、隔法と云ひ。此の十世隔法互に相即相入して、而かも前後長短等の差るが相を失せざるが故に、異成と云ふなり。至相大師は、一乘十玄門に、

十世隔法異成門者。此約三世說。如離世間品說。十世者。過去說過去。過去說未來。過去說現在。現在說現在。現在說未來。現在說過去。未來說未來。未來說過去。未來說現在。三世爲一念。合前九爲十世也。如是十世。以緣起力故。相即復相入。而不失三世。如以五指爲拳不_レ失指。十世雖同時。而不失十世故。經云。過去劫入未來。現在劫入過去。現在劫入過去。未來劫入現在。又云。長劫入短劫。短劫入長劫。有劫入無劫。無劫入有劫。又云。過去是未來。未來是過去。現在是過去。菩薩悉了知。又云。無盡無數劫。能作一

念頃。非長亦非短。解脫人所行。如是十世相入復相即。而不失先後短長之相。故云隔法異成。教義理事等十門。相即相入。而不失先後差別之相。故名異成也。と云ひ。又賢首大師は華嚴五教章卷中に、

十世隔法異成門。此上諸義。遍十世中。同時別異具足顯現。以時與法不相離故。言十世者。過去未來現在三世。各有過去及現在。即爲九世也。然此九世迭相即入故。成一總句。總別合成十世也。此十世具足別異。同時顯現成緣起故得即入也。故此經云。(華嚴聖典不思議品)或以長劫入短劫。短劫入長劫。或百千大劫爲一念。或一念即爲百千大劫。或過去劫入未來劫。未來劫入過去劫。如是自在。時劫無礙相即入。渾融成矣。又此經云。於一微塵中。普現三世一切佛刹。又云。於一微塵中。普現三世一切諸佛佛事。又云。於一微塵中。建立三世一切佛轉法輪。

と云ひ。又清涼大師は華嚴經疏鈔玄談卷第一記第八卷第一八五左に、

十世隔法異成門。即離世間品。菩薩有十種說三世。謂過去說過去。過去說現在。過去說未來。現在說過去。現在說平等。現在說未來。未來說過去。未

來說現在。未來說無盡。三世說一念。前九爲別。一念爲總故云十世。以三世相因互相攝故。一念具十。舉十以顯無盡故。一念即無量劫。無量劫即一念。普賢品云。無量無數劫。解之即一念。知念亦無念。如是見世間。如一夕之夢。經於數世。攝論云。處夢謂經年。覺乃須臾頃故。時雖無量攝在一刹那。離世間品云。如人睡夢中造種種事。雖經億千歲。一夜未終盡故。莊生一夢身爲蝴蝶。注云。世有假寐而夢經百年者。然事類廣矣。

と説けり。蓋し此の一門は、時間的に宇宙萬有の即入無礙自他互に具足顯現することを示すものにして。是に依りて、又華嚴聖典所説の、時間に對する教義の要旨を了知し得べし。義解の爲めの故に、更に賢首大師の華嚴雜章門紙二十九、十世章の文を抄録すべし。

十世義作二門。一建立者。如過去世中法。未謝之時名過去現在。更望過去名彼過去。爲過去過去。望今現在此是未有。是故名今爲過去未來。此一具三世俱在過去。又彼謝已現在法起。未謝之時名現在現在。望彼過去已滅無故。名彼以爲現在過去。望於未來是未有故。名現在未來。此三一具俱在現在。又

彼法謝已未來法起。未謝之時名未來現在。望彼現在已謝無故。名未來過去。更望未來亦未有故。名未來未來。此三一具俱在未來。此九中各三現在是有。六過未俱無。問。若於過未各立三世如是。過未既各無邊。此三世亦無邊。何但三重而説九耶。答。設於過未更欲立者。不異前門故唯有九。又此九世總爲一念。而九世歷然。如是總別合論爲十世也。第二相攝者。有二門。一相即。二相入。此二得成由二義故。一緣起相由義。二法性融通義。初緣起相由者。且如過去現在法。未謝之時自是現在。以現在現在望之。乃是現在之過去。是故彼法亦現在亦過去。所望異故不相違。又現在現在法。自是現在以未謝故。以過去現在望之。乃是過去之未來。又以未來現在望之。復是未來之過去。是故彼法。亦現在亦過去。又未來現在法。亦現在亦未來。準之可見。又此九中。三世現在必不俱起。六世過未亦不俱。一現在。二過未。此三定得俱。是故九中。隨其所應。有隱有現。以俱不俱故。且就俱中。由過去過去無故。令過去現在法得有也。何以故。苦彼不謝此不有故。又由過去現在有故。令過去過去無也。以下若不此有彼無謝故。又由過去現在有。令過去未來無也。以由彼未謝。

令此未有故。又由此過去未來無故。令彼過去現在成有。以若此有彼已謝故。是故由此未有彼得未謝故也。又由過去過去無故。令過去未來無也。謂若彼不無此現不成有。現不成有此未來不成無。是故此無展轉由彼無也。又由過去未來無故。令過去過去無也。反上思之。如過去三世有此六義相由。現在未來各有六可知。二就不俱中有二。初顯現相由亦有六義。謂由過去現在有。方令現在現在成有。何者。以若彼不有無法可謝至此現有。又由現在現在有故。方知過去現在是有。以若此不有彼有不成故。何者。若無此有。即令彼有不得謝。無不謝之有。非緣起有故不成有也。現在現在望未來現在亦二義。准上思之。過去現在望未來現在亦二義。謂若過去現在不有。即未來現在有不成故。反此亦准知。問。俱者可相由。不俱者云何得相由。答。俱者現相由。不俱者密相由。亦是展轉相由。以下若無此不俱俱不成故。是故此九世惣於五位有此十門。一如過去過去。唯一謝滅。但是過去現在家之過去故。二如過去現在有二門。謂是過去位中自現在故。以現在望之。是過去故。是故此法。亦現在亦過去。以所望異故不相礙也。三如過去未來有三門。一以過去現在望之。此未有故。

是過去家未來。二以下現在緣起猶未謝故。是現在現在。三以未來現在望之。此已謝故是未來過去。是故此現在現在。亦現在亦過去。四未來現在亦二門。五未來未來唯一門。並准可知。上來次第相由有斯九門。第十超間相由。謂若無初一則無後一等。是故如次及超間無礙相由故。依是道理令諸門相入相即。如經云。過去一切劫安置未來今。未來一切劫廻置過去世。斯之謂也。凡論相由之義有二門。一約力用。謂若無此彼不成。仍此非彼故。以力用相收故得說入。然體不雜故不相是也。二約體性。謂若無此彼全不成故此即彼也。是故約體說爲相即。釋此二門如別說。是故不失本位不無即入也。思之可見。經云。無量無數劫能作一念頃等。是此義也。第二約法性融通門者。然此九世時無別體。唯依緣起法上假立。此緣起法。復無自性。依真而立。是故緣起理事融通無碍。有其四重。一泯相俱盡。二相與兩存。三相隨互攝。四相是互即。力中以本從未唯事而無理。以未歸本反上可知。經云。非劫入劫。劫入非劫。是此義也。二中全事之理非事。全理之事非理故。俱存而不雜也。經中諸劫相即而不懷本劫者。是此義也。三中由隨事之理故。全一事能容一切也。由隨理之事故。一

切事隨理入一中也。反上即是一入一切可知。四中由即理之事故。全一即一切也。由即事之理故。全一切即一也。是故唯理無可即入。唯事不可即入。要理事相從相即故。是故有即有入。時劫依此無礙法故。還同此法。自在即入。餘義思之可解。

と詳説せり。蓋し時無別體依法而立は、佛法に於ける諸大乘教の通説なり。而して華嚴教學に於ても、亦此の九世十世等の時は、唯緣起の法の上に於て假立し。此の緣起の法も亦自性無く、眞に依りて立つと云ふ。是れ薩婆多有部等に三世實有と説き、大衆部等に、現在有體過未無體と説くに異なる所其の深義を研尋すべきなり。

其九 唯心廻轉善成門(古十立)と

主伴圓明具德門(新十立)

唯心廻轉善成門とは、上來既に緣起諸法の體用相即相入し、及び九世十世に遍して、具足顯現するの義を明かすと雖も。未だ此の緣起の諸法は、唯だ如來藏自性

清淨心の變作する所にして、即ち如來藏心を自性と爲すが故に、此の如來藏の一心を離れて、別の自性無く、心外無境なるの義を明らかにせず。即ち此の義を明らかにせんと欲するが故に、此の門あり。賢首大師は文義綱目に、緣起の自性に約するが故に、唯心門ありと云へる即ち是の意なり。蓋し法界の萬有は、差別無窮にして、不可測不可量と雖も、畢竟皆是れ如來藏自性清淨心の變作に過ぎず。故に之を三界唯心と稱し、或は萬法唯識と稱するなり。唯心廻轉善成門とは、此の義を示すものにして、至相大師は、一乘十立門に、

唯心廻轉善成門者。此約心説。所言唯心廻轉者。前諸義教門等。並是如來藏性清淨真心之所建立。若善若惡隨心所轉故。云廻轉善成。心外無別境故。言唯心。若順轉即名涅槃。故經云。心造諸如來。若逆轉即是生死。故云。三界虛妄唯一心作。生死涅槃皆不出心。是故不得定説性是淨及與不淨。故涅槃云。佛性非淨亦非不淨。淨與不淨皆唯心故。離心更無別法。故楞伽經云。心外無境界。無塵虛妙見。

と云ひ。又賢首大師は、華嚴五教章卷中に、

唯心廻轉善成門。此上諸義。唯是一如來藏自性清淨心轉也。但性起具德故異三乘耳。然一心亦具足十種德。如性起品中說十心義等者即其事也。所以說十者。欲顯無盡故。如是自在具足無窮種種德耳。此上諸義門。悉是此心自在作用。更無餘物故。名唯心廻轉等。

と云へり。然るに同大師は華嚴經探玄記第一に依るに、此の門に代ゆるに、主伴圓明具德門を以てし。又同大師は華嚴經旨歸に、此の華葉は、理として孤起すること無し。必ず無量の眷屬の圍繞するを攝す。經に云はく、此の華に世界海塵數の蓮華あり、以て眷屬と爲すと。此の教の圓教所有の法皆互に主伴と爲りて、具德圓滿す。是の故に此の華葉を見るは、即ち是れ無盡法界を見るなり。是れ此に託して、別に所表あるに非ず。下の文に云はく、無生法界より起す所の華蓋と、此の一華葉に、既に此等の十種の無礙を具す。餘の一切の事も、亦是くの如く準せよと釋せり。是れ即ち賢首大師の新十玄の所立にして、其の唯心廻轉善成門に代ゆる所は、清涼大師の華嚴經玄談第六に、主伴の一門は、至相大師に無き所にして、而かも唯心廻轉善成門あり。今の玄門の所以となる故に之を立てずと

云へり。蓋し是れ古十玄の唯心廻轉善成門は。諸法の無礙なることを明かす所由にして。無礙の相を示すものに非るが故に、彼を改めて主伴圓明具德の一門を立てたりとの意なり。華嚴五教章義苑疏第十、同じく復古記第三之下等、共に此の義に依れり。又清涼大師に依るに、華嚴經玄談第六に、主伴圓明具德の一門を釋して、此の圓教の法は、理として孤起すること無し。必らず眷屬を攝して隨つて生ず。下に云はく、此の華は、即ち十世界微塵數の華あり、以て眷屬と爲す。又一方を主と爲せば、十方を伴とするが如く、餘方も亦爾かるなり。是の故に主を主とし、伴を伴とすれば、各々相見せず。伴を主とし、主を伴とすれば、圓明具德なり。華を擧ぐるに、既に爾かれれば、一塵等の事も、亦然かるなりと云ひ。華嚴經畧乘には、北辰の居る所、衆星同じく拱するが如しと云へり。既に説けるが如く、宇宙の萬有は、一即一切、一切一即にして、宛も天帝釋宮、所懸の羅網の、重重無盡に隱映して、一重影現。二重影現。無盡無盡に影現して。其の窮まる所なく、盡くるところ無きが如く。其の體に於ても、用に於ても、相即相入無礙自在にして、主となり伴となり、伴となり主となりて、圓明具德なること、實に不可說不可言

なり。此の門は即ち這般の道理を徹破せるものにして、其の義甚深にして、言語思慮の及ぶに所あらず。行者須らく實修親證して、以て覺知すべきなり。

其十 託事顯法生解門

託事顯法生解門とは、上來既に説きし如く、一切緣起の諸法は、一即一切、一切即一、重重無盡に相即相入し、主伴圓明にして、不可説不可思議なり。即ち是れ皆如來藏自性清淨心の變作善成する所を詳説すと雖も、未だ此の緣起の諸法は、法界の法門なることを明らかにせず。今此の義を示さんと欲するが故に、即ち此の法門あり。華嚴經探玄記第一に、此の大緣起の法は、即ち無礙法界の法門なるに由るが故に、託事顯法門ありと云へる、即ち是の意なり。託事顯法とは、現象差別の事法に託して、所謂一乘無盡緣起の法門を表顯するの意なり。彼の三乘淺畧の教義に在りては、同じく事に託して、法を顯はすと雖も、唯だ單に異事の相に託して、異理を表顯するのみにして、一事一物、即ち是れ法界の法門なることを顯はさず。至相大師は、華嚴一乘十玄門の末段に曰く、

託事顯法生解門者。此約智説。言託事者。如經舉金色世界之事。即顯始起於實際之法。一切幢一切蓋等事此行體也。又如法界品云。開樓觀門相。見彌勒菩薩所行困事至菩提道場。以樓觀則菩提相。所以言顯法生解也。若大乘宗中所明。亦託事以顯法。即以異事顯於異理法。此中以事即法故。隨舉一事攝法無盡故。前舉旛幢等皆言一切。所以不同大乘説也。此中明因果者。如一乘説也。

と釋し。賢首大師は華嚴五教章卷中十玄門の末段に、

此上諸義。隨託別事以顯別法。謂諸理事等一切法門。如此經中說十種寶王雲等事相者。此即諸法門也。顯上諸義可貴故。以寶以標之。顯上諸義自在故。標王以顯之。表上諸義潤益故資澤故斷斷故。以雲標之矣。

と云ひ。又同大師は、華嚴金師子章に於て、此の師子を用ひて無明を表し。此の金體に託して、具さに眞性を彰はし、二事合説して、阿頼耶識に況して、正解を生ぜしむるを名づけて、託事顯法生解門と爲すと示し。清涼大師は、華嚴經玄談第六に、此の華葉を見るに、即ち是れ無盡の法界を見る、是れ此に託して、別に所表ある

に非らず下に此の華蓋等は、無生法忍より起る等と云ふと云ひ。華嚴經畧策には、立像の豎臂觸目皆道なるが如しと釋せり。既に説けるが如く、法界の萬有は、是れ緣起の實德、大曼荼羅會上の尊法にして、即事而眞、一塵一法も、法界法門にあらざる無く、一色一香も、大緣起の妙法にあらざる無し。上來畧ぼ十立緣起無礙法門義の名義を解釋し畢れり。想ふに、彼の十立無礙の法門は、本と釋迦文佛海印三昧所現開説の深義にして、其の源は、大方廣佛華嚴經に出で、支那に來りて杜順尊者、即ち杜順大師之を施設建立し、而して雲華尊者智儼大師に授け、賢首大師に至り、更に之を開説して、華嚴法門の建立、愈々周備し。清凉大師、圭山大師、相繼で益々其の深義を弘宣したり。實に華嚴一家不共の極談、稱法界の法門なり。學者幸ひに此の法益に潤ひ。所謂見聞金剛の種子を現身に成ずることを悦び、證入法界の益を當來に期する事を謝せざるべからず。想ふに、陽春白雪の至曲は、其の調、高遠微妙にして、和る者寡きが如く。華嚴聖典所説の、餘りに高きに過ぎ、宗教として、將た哲學として、研究する者の稀なるは眞に哀むべきなり。

第三節 靜法寺慧苑の兩重十立論

第一項 兩重十立論の要旨

其一 兩重十立所依の體事

唐京兆佛授記寺沙門釋慧苑は、賢首大師六哲の一人なり。曾て京兆靜法等に住せしより、世に靜法寺慧苑法師と稱す。續華嚴經畧疏刊定記十五卷。新華嚴經音義一卷。華嚴遊復章一卷。華嚴經纂靈記五卷等の著あり。示寂年月を詳かにせず。傳は宋高僧傳第六縮致四九四右に見えたり。續華嚴經畧疏刊定記は、古來或は十六卷、或は二十卷と稱し、調卷に不同あり。現に大日本續藏經第一輯第五套に收められ、十五卷本に依れり。第一卷初紙右紙卷頭に、

刊定記者。苑以薄祐。和上遽遷生。前製茲畧疏。經纔四分之一。始自妙嚴品。訖乎第六行。并製十定疏。前之九定。而懸談與中間及十定後疏。並未修葺。其已撰者不遑剪刻。今故鳩集廣畧之文。會撮舊新之説。再勘梵本。謹校異同。此順宗和教。存之以折衷。簡之通意。賤之以筆削云爾。

とあり。是れ賢首大師別傳右十紙に、

晚以新經既加一會。舊疏或涉三思。爰隨補袞之文。聊括提綱之義。重述略疏。始妙嚴品至第六行。迎知報盡因越次折十定微言僅了九定。未絕筆而長逝。料簡有十二卷。門人宗一慧苑。兩續遺稿。一師足二十軸。頗近從繩。苑公成十六編。或譏繼祖。是惟尺有所短。詎得寸無所遺。

と云へるものにして。是に依れば賢首大師の製疏半ばにして入寂せらるゝや。上足荷恩寺の宗一及び靜法寺慧苑の二師、各々選志を繼ぎて、前者は疏二十卷を製し、頗る從繩たるに近し。後者は疏十六卷を製し、時に或は賢首大師の義に違するものありと見えたり。清涼大師の華嚴經玄談第二三紙に、同じく此の意を述べて、賢首將解大願不終。方至第十九經。奄歸寂滅。苑公言續而前疏亦刊之。筆格文詞。不繼千古。致令後學輕夫大經。

と云へり。別傳に十六卷と云へる、蓋し大日本續藏經所收本の中、第十五卷に本末を開くを以てなり。判定記第一一冊第一編第五卷に依るに、華嚴經を釋するに、略して十門を開く。第七に、顯義分齊の一科を設け、以て事事法界宗の義の分齊を

顯はせり。此に二門あり、初めに辨相、後に問答なり。相を辨するに三門あり、一に體事。二に徳相。三に業用なり。徳相と業用とは、即ち有名なる兩重の十支門にして、體事は即ち其の十支のかゝる物體、即ち所依の體事なり。然るに所依の體事を論ずるに、凡そ純淨無漏なると、漏無漏に通ずるとの二種あり。純淨無漏なるは、是れ徳相の十支の所依の體事にして、漏無漏に通ずるは、是れ業用の所依の體事なり。判定記第一に、

初體事者即是徳用所依。此通二種。一純淨無漏。是徳相所依體事。二通漏無漏。是業用所依體事。

と云へり。然るに此の二種に通ずる所依の體事に、略して十法なり。一に色。二に心。三に時。四に處。五に身。六に方。七に教。八に義。九に行。十に位なり。初めに色とは、外の器世間の能造と所造とにして、下、微塵より、上、廣刹に至り、及び中間の一切所有の事物是れなり。二に心とは、佛菩薩及び諸の衆生の所有の染淨心及び心法是れなり。三に時とは、即ち時間にして、迦羅の時、三摩耶の時、大劫小劫、九世十世より、乃至一刹耶に至る等、即ち是れなり。四に處とは、盡

十方世界の色に依りて顯はす處の、大小分量の總稱にして。上、廣刹より、下、一塵毛端等の處に至る一切是れなり。五に身とは、佛身、菩薩身。二乘身。乃至一切衆生の身にして、下一毛孔より、乃至全身に至るを、總じて身と云ふ。六に方とは、東方南方、乃至上方下方等にして、上、盡十方虚空界の分より、下、一毛端量の處に至るまでを云ふ。七に教とは、能詮の名句字聲等一切に通じて。下は一名一句一字一聲一光香等より、上は種種無量の差別名句字等に至る是れなり。八に義とは、教所詮の一切の法にして、下は一義一理より、上は一切の義理に至る是れなり。九に行とは、諸の菩薩の所有の修行無邊の行海にして。下は一行より上は一切無盡の行海に至る是れなり。十に位とは、三賢十地等、菩薩修行の階位にして。上は佛位より、下は十住の初心等に至る是れなり。

以上の十事は、並びに是れ十立所依の體事にして、純淨無漏なること、漏無漏に通ずるとの兩重の義門あり。此の所依體事及び淨無漏、漏無漏。並びに能依十立等に就て、古今の華嚴學者は、相共に圖表を掲げ、其の解釋に便とすれども。古哲の文意を精細に研究すれば、圖表を掲ぐるの要なし。故に余は總て之を省略せ

り。蓋し天地法界の萬有を、且らく束ねて十種に分類せるものにして、試みには至相大師の一乘十立門及び賢首大師の華嚴經探玄記第一の所明に係る、列祖相承の教義理事等の所依の體事に比較するに。多少の所立を異にすれども、其は本より一應の配當に過ぎず。然れども、慧苑師所立の所依の體事の、如何に華嚴の列祖の所立に相違せるかを推知し得べきなり。

其二 兩重十立論の要旨

一 德相の十立

既に兩重十立所依の體事を明らかにせり。即ち兩重十立論の要旨を説明せんに、初めに德相の十立とは、德相とは、是れ自性本具を語る義門にして、即ち眞如は、先天本具の自性として、本來過恒沙の性功德を具足するを云ふ。判定記第一に、德相者。第八廻向說。眞如一百門德。皆名眞如相。又起信論云。眞如相大者。具足無量性功德故。此德即是相名德相也。今此將顯如所起果故。以如德而名其果。

と云へり。徳相の言の眞如所具の功德相の略なることを知るべし。徳相を論ずるに、徳相の因と徳相の果との二門あり。徳相の因とは、佛菩薩等初發意より、諸行を修するに、一一皆法性と相應じて、常に諸法を觀す。若同類。若異類。若同體。若異體。若離染。若清淨。其の相は差別すと雖も、其の性は、是れ一なり。即ち所謂無性なり。無性なるが故に、性と相とは、本來無礙なり。此相破相、既に同一性なり。相は性に隨ひて融通す。是の故に、此事彼事無障無礙なり。又大願廻向の善根に由りて、如の相に同するが故に、證淨法界所感の依正は、還りて眞性に同じて、一切無邊無礙の徳相を具足せり。眞如の性は、既に過恒沙の徳を具せり。眞所起の事の徳量も亦然かるなり。是の故に、此の事と徳とは、無爲の性に同じく、四相に遷流せられず、又分限耶に非ず、是れ一乘普賢眼の見る所にして、三乗の境界に非ず、所謂因人の所了に非るなり。唐譯華嚴經第三十廻向品に、第八眞如相廻向を釋する下に、譬へば眞如の一切法と、而かも共に相應じて、相捨離れざるが如し、諸法を離れず。恒に本性を守りて、改變あること無く。一切法中に在らずと云ふこと無し。性常に平等にして隨順し。一切の法と其の體性

を同じくし、常に無盡に住して、普ねく諸法を攝し。一切法の中に於て、畢竟して、無盡なりと云へり。爰に無盡と云へるは、十種の徳相を以て表示せり。即ち此の十の徳相は、凡そ其の一あれば、必らず餘の九を具し。餘の九を具すれば、即ち百を具し、千を具す。是れ同一體性なるが故に、又無分限の故なり。抑も宇宙の萬有、即ち法界所依の體事は、既に如を全ふして起る。是の故に、一一に、餘の一切を具して、漏すことあること無し。依つて今、總別に依りて相を分ち略して十門を説く。即ち一に法界の體事は、一一に皆同法性の中、一切の法と、而かも共に相應じて、相捨離せざるの徳あるが故に、一一應に隨ひて同時に一切の體を具足するの徳あり。二に此彼の事に由るに、各々同法性中諸法を雜へざるの徳あるが故に、彼此相望するに相即の徳あり。三に此彼の事に、各々同法性の中に在らざる所無きの徳あるに由るが故に、彼此相望するに相在の徳あり。四に諸體事に、各々同法性の中に、性常に隨順するの徳と、及び恒に本性を守りて、改變なきの徳あるに由るが故に、一の應に隨ひて隱顯の徳あり。五に此彼の事に、各々同法性の中、一切の法と共

に、相應するの徳あるに由るが故に、此彼相望するに主伴の徳あり。六に諸の體事に、各々同性法の中、一切の法と同體性の徳あるに由るが故に、一即ち是れ一切の諸法なるの徳あり。七に諸の體事に、各々同法性の中、常に無盡に住するの徳あるに由るが故に、一に自から無盡の法を具するの徳あり。八に諸の體事に、各々同性法の中、普ねく諸法を攝するの徳と、及び一切法の中、性常に平等なるの徳あるに由るが故に、一應に隨ひて純雜の徳あり。九に諸の體事に、一皆同法性の中、普ねく諸法を攝するの徳あるに由るが故に、一應に隨て微細を具するの徳あり。十に諸の體事は、一に各々同法性の中、所として在らざるごと無きの徳と、及び一切法の中、畢竟じて、無盡なるの徳あるに由るが故に、彼此互に相望するに重重なれば、如因陀羅網の徳あり。

此くの如く所依の體事、一に十種の徳相を具し、百を具し、千を具し、乃至無盡無盡なり。次に徳相の果を顯はさば、又十種の徳相あり。一に同時具足相應の徳とは、後の九門所有の體事の、同類。若異類。及び中の若一。若多。若大。若小。若長。若短。等同時に具足して、一法に在り。是の故に此の門は、後の九門の爲めの總なり。

後の九は是れ此の一門の爲めの別なり。然るに總と別とは、互に相離れざるが爲めに、凡そ一法を擧ぐれば、必らず所餘の一切の門を具するは、是れ此の門の攝なり。若し一法を擧ぐるに、但だ當自の一法の、法のみを具するは、是れ餘門の攝なり。華藏の頌に、華藏世界所有の塵は、一一の塵の中に法界を見ると云ひ。本聖典世主妙嚴品の初めに、佛法界身の徳を顯はして。譬へば虚空の衆像を含むが如しと説けるもの即ち是れなり。二に相即の徳とは、諸の體事の若同類。若異類中の大小長短位の上下等を相望するに、彼此相即の徳あり。此の中、同異の體事を相望すれば、但だ各々兩句あり、此即彼、彼即此等なり。其の中同類の上に於て、一多等を相望するに、一に此の一は、即ち彼の一なり。二に多即多なり。三に一即多なり。四に多即一なり。五に一即多一なり。六に多即一多なりの六句あり。大小長短位の上下等も、亦是くの如し。異類の體の上に於て、彼此相望するも亦然かるなり。華嚴經佛不思議法品に、諸佛は、一切佛の語は、即ち一佛の語なり。三世一切劫は、即ち一刹那なることを知ると云ひ。同初發心菩薩功德品に、發心を以ての故に、即ち三世一切の諸佛と體性平等なりと説けるもの、即ち是

の意なり。三に相在の徳とは、諸の體事の、若同類。若異類。及び大小長短。位の上下等を相望するに、彼此一多相容するのみにあらず、亦相在の徳あり。是れを體事の同類なるもの、上に見るに。即ち各々彼在此、此在彼の二句あり。又異類及び中の一多等を相望するに、身と土とを相望すれば、一に依の中に依あり。二に正の中に正あり。三に依の中に正あり。四に正の中に依あり。五に依の中に依正あり。六に正の中に依正あり。又一と多と相望するに、一に一の中に一あり。二に多の中に多あり。三に一の中に多あり。四に多の中に一あり。五に一の中に多一あり。六に多の中に一多あり。是くの如く、各々六句あり。餘の大小等推して知るべし。同普賢三昧品に、佛身の中に、國土及び諸佛菩薩ありと説き。同初發心功德品に、一微塵の中に、無量の刹、無量の諸佛及び佛子あり。諸刹各別にして、雜亂無し等と説ける即ち是の意なり。四に隱顯の徳とは、諸の體事の同異異類及び中の一多、大小、長短、位の上下一一に應に隨ひて、隱あり顯あり。此を見る者は、彼を見ず。彼を見る者は、此を見ざるが如きは、互に見ずと雖も、而かも各々收め盡す。各々收め盡すと雖も、而かも相雜らず。見既に爾かるが如

く、聞等も、應に隨ひて、當さに知るべく亦然かるなり。一人の身なるも、六親の所望に依りて、各々同じからずと雖も、然かも各々全ふして、亦雜亂せざることを得るが如し。華嚴經夜摩天宮菩薩說偈品に、十方一切の處。皆謂らく。佛此に在りし。或は人間に在りと見。或は天宮に在りと見ると説き。同じく同十定品に、或見佛身其量七肘。或見佛身其量八肘。或見佛身其量九肘。或見佛身其量十肘。(中略) 或見佛身千大千世界量。或見佛身百千大千世界量。或見佛身百千億那由他大千世界量。或見佛身無數大千世界量。或見佛身無量大千世界量。或見佛身無邊大千世界量。或見佛身無等大大千世界量。或見佛身不可數大千世界量。或見佛身不可稱大千世界量。或見佛身不可思大千世界量。或見佛身不可說大千世界量。或見佛身不可說大千世界量。佛子菩薩。如是見如來無量色相。無量形狀。無量示現。無量光明。無量光明網。其光分量。等子法界。於法界中。無所不照。普令發起無上智慧。と説ける、即ち此の意なり。五に主伴の徳とは、諸の體事の同類異類及び中の一多大小位の上下等相望するに、互に主と爲り、伴と爲りて、主伴無礙なるを云ふ。

前門は、唯だ一法の上のみにのみ、即ち隠と顯とあり。此の中には、兩法己に去りて、互に隠れ互に顯るゝに據るが故に、相望不同なり。諸會の中に、普賢等の輔翼の衆は、皆是れ果海の菩薩なり。互に相主となり、助と爲りて、同じく法界に遍す。主と主と並ばず、伴と伴と俱ならず、主伴伴主同時に成就するが如き。又修多羅光明總持三昧、乃至菩薩無邊の行海に、皆主伴が如き是れなり。六に同體成即の徳とは、諸の體事の同類異類、及び中の一多、大小、長短位の上下等は、一一即ち是れ一切の諸法なり。此は前の相即門に同じからず。前は彼此相望の相即に依り、今は即體に約して、是の一即ち是れ一切の諸法なり。華嚴經世主妙嚴品に、其の身一切の世間に充滿し、其の音普ねく十方の國土、如來の所處宮殿、接閣に順し、十方に充遍すと云ひ。又、十方虚空の量は、知るべきも、佛の毛孔の量は、不可得なりと説ける此の意なり。七に具足無盡の徳とは、諸の體事の同類異類、及び中の一多、大小、長短位の上下等の一一の自體は、皆窮盡すること無きこと、水中の文の如し。此は唯だ當體に即して、無盡を具することを語るが故に、此彼互に相在して、重重無盡なることを語る、如帝網の徳に同じからず。又、一の中に多法齋しく現する

ことを説くが如き、微細の徳相に同じからず。今は唯だ一一即ち窮盡なきに約するなり。同世主妙嚴品に、佛身は普ねく、諸の大會に遍し、法界に充滿して、窮盡あること無しと説き、其の菩提樹は、恒に妙音を出して、種種の法を説きて、盡極あること無しと説けるが如き即ち是れなり。八に純雜の徳とは、諸の體事の同類異類、及び中の一多、大小、長短位の上下等を相望するに、各々普別の二を具せり。然るに普と別とは、即ち非ず離に非ず、普別通融して、障礙あること無し。即ち非るが故に、諸の體と諸の徳と繁興萬品なり。離に非るが故に、一體一徳を、即ち究竟と爲す。同世主妙嚴品に、諸の異生衆、及び餘の同生衆の、各々唯だ一解脱門を得て説くは、是れ純門なり。普賢菩薩の、不思議の諸解脱門を得るは、是れ雜門なり。又、華嚴經入法界品に、慈行童女、三十六恒河沙の佛を見たてまつるに、彼の諸の如來、各々異門を以て慈行をして、般若波羅蜜莊嚴門に入れしむと説くが如きは、此れ純雜無礙を説けるものなり。九に微細の徳とは、諸の體事の若同類、若異類。及び中の一多、大小、長短位の上下等、一一の中に、即ち諸法を具すと説くものにして、此れ前の相在の義に同せず。彼は別體別徳相望の相在に約し、此は唯

だ當法に、即ち一切を具して、炳然として齊著なるに依るなり。此の門は、亦普門の徳と名づく。同離世間品に、菩薩に十種の甚深微細の趣ありと説き。同入法界品に、寂靜音善財に謂て言はく、此の菩薩念念に廣大善莊嚴解脫門を出生すと説くが如き、即ち此の意なり。十に如因陀羅の徳とは、諸の體事の若同類。若異類。及び中の一多、大小、長短位の上下等相望するに、互に相容在して、展轉重重にして、窮盡あること無きを云ふ。華嚴經心王菩薩問阿僧祇品に、不可言説の諸佛刹を、皆悉く末して微塵となし、悉く一一の微塵の中に於て、一切の不可説を演説し、悉く善く一念の中に於て、不可説の諸の世界を説く。不可稱説の諸劫中に、念念に次第して演説す。不可説劫は、猶ほ盡すべきも、而かも不可説は盡すべからずと説けるが如き、即ち此の意なり。上來第一に同時具足相應の徳より、第十に如因陀羅の徳に至る、十種の徳相は。前の純淨無漏の體事に於て、一一に具き在り是の故に、百を成じ、乃至千等の門を成じて、無盡無盡なり。此を下に説く、業用の十支に比するに、彼に相作と相入を説くと雖も。彼の徳相の十支には、此の相即と相入とを許さず。是れ難がて清涼大師等の批難を被むる所以にして、兩重

の十支の比較は、別に項を改めて説くべし。

一一 業用の十支と兩十支の對比

業用の十支を明かすに、亦二門あり、初めに通じて所用を顯はすと、後に別して其の相を辨すると、即ち是れなり。通じて所因を顯はすと、業用十支の所因を論ずるものにして、所謂諸佛菩薩は、無礙法界相應の、三昧と通と明と解脫と陀羅尼を成就して、前の十箇の體事を用ひて、其の度すべき者に對して、轉變自在にして、能く普門示現するを云ふ。此の所轉の境は、染と淨とに通するなり。殊に相を辨する中、畧して十種あり。一に同時具足相應用。二に相即用。三に相在用。四に相入用。五に相互作用。六に純雜用。七に隱顯用。八に主伴用。九に微細用。十に如因陀羅網用。是れなり。初めに同時具足相應の用とは、諸の體事の同類異類、及び中の一多、大小、延促、去住、染淨、定散位、上下等を以て、應さに度すべき者に對し。一法に隨ひ、普ねく後の九門を示現して同時に具足し。盡法界所有の染淨等の法を、同時に具足せざることを無きを云ふ。蓋し一切の染法は、一眞性な

るが故に、一切の淨法は、眞所起の法なるが故に、即ち能く同時に具足相應するものにして、諸佛菩薩は、之に依りて、應に隨ひ、此の境界を現するなり。華嚴經普賢三昧品に、能く一切の國土の微塵をして、悉く能く無邊の法界を容受せしむと云ひ。又同十行品に、此の菩薩は、其の身中に於て、一切の刹と、一切の衆生と、一切の法と、一切の諸佛とを現すと説き。又入法界品に、善財、普賢の一一の身分、一一の毛孔を見るに、十方一切の世界と、三千界の中の地水等の輪と、諸山河海と、人天の宮殿と、時劫と佛菩薩の知見とあり。現在の世界、是くの如し。前際と後際と、一切世界の中も、悉く然かるなりと説ける、即ち此の意なり。二に相即の用とは、諸の體事の同類異類、及び中の一多、大小、長短、去住、染淨、定散位の上下等を以て、相望して用を成ずるを云ふ。升夜摩天宮品、夜摩宮中偈讚品、升兜率天宮品、兜率宮中偈讚品の中に、何れも佛神力の故に、此の菩提樹下を離れずして、而かも天宮に上昇すと説くは、此れ坐即昇、昇即坐なることを顯はすものにして。同離世間品に、菩薩十種の入劫智あり、入可數劫は、即ち是れ不可數劫なり、乃至入劫は、即ち一念一念は、即ち入劫なりと説けるは、此れ異體相望に約して、相即用なることを顯は

し。若し同體を得れば、亦即の義ありて、相とは名づけず。前の徳相の第六に准じて、同體成即用と名づくべきなり。同離世間品に、菩薩身を分たすして、一切の佛會に遍すと説けるは、此の意なり。三に相在の用とは、諸の體事の同類異類、及び中の一多、大小、長短、去住、染淨、定散位の上下等を以て相望して、用を成ずるなり。此の中に二の六句あること、前の徳相の相在に依りて、准知すべし。同如來現相品に、一一の塵の中に、無量の身あり、復た種種の莊嚴の刹を現す。三世所有の一切の劫は、一刹那の中に、悉く能く現すと云ひ。同賢首品に、一微塵の中に、三昧に入りて、一切の微塵の定を成就す。而かも彼の微塵は、亦一も増せず、普ねく難思の刹を現す。彼の一塵の内に、衆多の刹あり、或は佛あり、或は佛無し、或は雜染あり、或は清淨あり、或は廣大なり、或は狹少なり、乃至一微塵の中に、示現する處の如く、一切の微塵も、悉く亦然かるなりと説ける、此の意なり。四に相入の用とは、諸の體事の同類異類、及び中の一多、大小、長短、去住、染淨、定散位の上下等を以て相望して、相入の用を成ずるなり。亦前に同じく、二の六句あり。同十行品に、能く一一の三昧の中に於て、普ねく無數の諸の三昧に入り。無量無邊の諸の國土を、悉

く共に一微塵に入らしむと説けるが如き此の意なり。五に相作の用とは諸の體事の同類異類及び中の一多、大小、長短、去住、染淨、定散位の上下等を以て相望して、相入の用を成ずるを云ふ。亦前に准ずるに六句あり。同十地品に、大刹を念に隨ひて小と爲し、小刹を念に隨ひて大と爲す。是く如きの神通量あること無しと云ひ。同離世間品に、一國土を以て、多の國土と爲し、多の國土を以て、一國土と作し。不可説劫を以て、一劫と爲し。一劫を以て、不可説劫と爲すと説ける此の意なり。六に純雜の用とは、諸の體事の同類異類、及び中の一多、大小、延促、前後、染淨、定散位の上下等を以て相望して、純雜の用を成ずるを云ふ。同十回向品に、無縛無着解脫心を以て、普賢の佛自在力を成就し、一門の中に於て、種種の不可説不可説の劫を示現して、窮盡あること無く。一切の皆悟入することを得せしめ、其の身普ねく一切の佛前に現すと説ける此の意なり。七に隱顯の用とは、諸の體事の同類異類、及び中の一多、大小、長短、染淨、定散位の上下等を以て相望して、隱顯の用を成ずるを云ふ。同賢首品に、勝三昧あり、方網と名づく。菩薩此に住して廣く開示す。一切の方中に、普ねく身を現じ。或は定に入り、或は從

ひて出づることを現すと説くは、此れ菩薩の一身所應に隨ひて、異なることを示すものにして。同入法界品に、摩耶夫人、善財に告げて言はく、菩薩將さに下生せんとする時、一切の如來受生功德の光輪を放ちて、我身に入る。爾の時に我身は、本然を踰へずと雖も、其の實己に世間を超過せり。此の處に於て、菩薩の母となるが如く、三千世界閻浮提の中も、悉く亦是くの如し。菩薩の大願幻解脫門を得るに由るが故にと説けるは、是れ本身に二無し。一處に住するに非るが故に、一隱れ多顯はれ、多處に住するに非るが故に、多隱れ一顯はるゝことを説くは、佛陀の降誕を詩的に讚美詠歎せるなり。八に主伴の用とは、諸の體事の同類異類、及び中の一多、大小、位の上下等を以て相望して、主伴無礙の用を成ずるものにして、同如來出現品に、佛眉間に於て光明を出現するに、無量百千億那由他阿僧祇劫の光を以て、眷屬と爲すと説けるが如き、此の意なり。九に微塵の用とは、此の菩薩一念の中に於て、一切の衆生を現す、各々不可説不可説なりと説き。同入法界品に、一一の毛孔の内に、各々無數の刹を現じ。一一の毛孔の中に、各々無數の刹を現すと説くが如き、此の意なり。十に如因陀羅網の用とは、諸の體事の同類異類、及

び中の大小、長短位の上下等を以て、互に相望するに。彼此相在重重無盡にして、因陀羅網の如くなるを云ふ。同普賢三昧品に、佛身所現の一切の國土に、所有の微塵の一一の塵の中に、世界海微塵數の佛刹あり。一一の刹の中に、世界海微塵數の諸佛あり。一一の佛前に、世界海微塵數の普賢ありて、此の三昧に入ると説き。同心王菩薩問阿僧祇品に、一一の毛端處の所有の刹は、其の數無量にして、不可説なり。虛空量諸の毛端を盡して、一一處の刹も亦是くの如しと説ける、即ち此の意なり。

以上第一に、同時具足相應の用より、第十に如因陀羅網の用に至る、十門を總じて、業用の十支と云ふなり。而して又兩重十支の對比は、前項既に慧苑師所立の兩重の十支を、彼此對比するに、其の徳相門には、業用門中の第四相入用と、第五相作用無く。又業用門の中には、徳相門中の、第六同體成即徳と。第七具足無盡徳を缺きて。即ち業用徳相に依りて、十支を異にし、彼此出設異同あり。此れ業用門は、佛菩薩の機に應じて、轉變自在に施設する所なるが故に、自から相入相作用ありと雖も、徳相門は本來法爾として、過恒沙の功德を具足するの邊なるが故に、

同體即一切徳、及び具足無盡徳ありと爲すなり。蓋し業用門に、相作相入を許して、徳相門に相作相入を許さざるは、此の兩重十支論の特色にして、是れ懸がて其の所立の清涼大師等の破折を被むる所以なり、爾下説明する所あるべし。

第二項 兩重十支論に對する清涼大

師の批判

清涼大師の華嚴經玄談第六紙十八に依るに、苑師の所説を出して、刊定記には、則ち徳相と業用とを分ちて、各々十支あり。徳相の十とは、一に同時具足相應法、乃至十に因陀羅網の徳なり。二に業用の十とは、一に同時具足相應の用、乃至十に因陀羅網の用なり。其の徳相門の中には、業用門中の四と五と無く。業用の中には、徳相の六と七と無し。彼の師の意に云ふ、業用は是れ機に應じて、施設するが故に、相入相作用あり。本と不入に入るを見せしむるを以ての故なり。本來衆生は、佛に非ず、生をして作佛せしむるが故に、是れ業用なり。徳相は、爾からざるが故に、相作相入無し。其の徳相は、本具なるが故に、同體即一切の法徳、及び具足

無盡の徳あり。業用は爾からざるが故に、此の二なし。此の四は互に出すが故に、各々十ありと。今之を明かすに徳と用とは異なりと雖も、同一十立なることを妨げず、該攝せざることを無し。徳相も亦常に入作あるが故に、故に彼の相在は即ち相入なり。彼の相作とは、即ち相即なり。名は異なりと雖も、義は是れ同なり。出入を見せしむるは、即ち業用門なり。常に相渉入して、鏡の相互に照らすが如くなるは、即ち徳相門なり。衆生を以て佛となせば、生即佛なり。佛を以て衆生と爲せば、佛即生なり。故に相作は、是れ相即なることを知るべし。若し機に對して、作すに約すれば、業用門と名づけ。本來即是なるは、徳相門と名づく。此に依りて分ては、小異なきに非るも、其の體事を統ぶれば、更に別なきなり。此の故に相即と相作の二は、其の名異なりと雖も、更に二門なきを知るべく。又相入と相在との二は、少しく相違ありと雖も、始終一致なることを知るべし。又若し徳相の十立に於て、相入と相作の二徳なければ、眞如は則ち此の徳を缺くこととなりて、隨つて普攝諸法の徳と、遍一切法の徳とを缺くこととなり。亦能安立の徳と、及び能く世間を持して、所謂一切の諸佛菩薩を成就するの徳あることな

かるべし。然るに眞如は然からず、故に徳相門中に於て、相作相入の二門あること、理として然るべきなり。經に諸佛は猶ほ淨明鏡の如し、我身も一に摩尼珠に似たり。諸佛常に来りて我體に入り、我身遍ねく諸佛の軀に入るとは、即ち常に相入するなり。又眞如隨緣して、一切の法を成ず、是れ即ち相作なり。之を要するに、今日吾人若し情見に隨ひて、相作相入を見んか、此の二門は、唯だ業用の義あるのみなりと雖も。若し夫れ妄見を離れたる、佛の知見に就きて見んか、徳相中に於て、作入の義あること、元より然るべきことなり。又徳相門中の同體成即徳とは、即ち釋して、

謂諸體事同類異類。及中一多大小長短位上下等。一一即是一切諸法也。

と云ふが故に、此れ至相賢首兩大師所立の十立門中の託事顯法生解門に外ならず。又其の具足無盡徳とは、釋して、

謂諸體事同類異類。及中一多大小長短位上下等。一一自體皆無窮盡。如水中文。乃至此俱當體即具無盡。重重無盡

と云ふが故に。此れ至相賢首兩大師所立の十立門中の、因陀羅網境界及び微細

相容安立門の攝と云ふべく。其の異なる所は、唯だ名を別にせるのみ。又徳相と業用とを通じて、純雜徳、又は純雜用と云へる。是れ賢首大師所立の新十玄に、廣狹自在無礙と云へるの眞意を解せざるものと云ふべく。又時を以て所依の體事と爲すが故に、十世隔法異成門を立てざる、是れ亦同じく注意すべし。又所依の體事を論ずるに、色心時處等の十事を説ける、斯れ亦理なきに非ずと雖も、其の時を體事となすが如きは、其の意をなさざるものと云ふべし。是れ時とは、時無別體依法而立と稱して、即ち別體あるものに非るが故に、即ち所依の體事とは、なすべからず。而かも法に依りて立つるが故に、新古の十玄門に於けるが如く、所依の體事とは爲せずして、十玄門の攝となすべきなりと云へり。評し得て盡せりと云ふべし。余云ふ、古來華嚴の學者は聖典を研尋するに、至相大師所立の古十玄と、賢首大師所立の新十玄とに對して、多く圖表を掲げて説明に使とすれども、特に凝然、鳳潭、普寂の諸師は、余は皆之を省略せり。何故なれば、聖典の玄理は、深く研究するに隨ひ、自から明白となりて。毫も圖表を擧ぐるの必要を見ざればなり。

第四章 六相圓融義

第一節 六相義の説意

既に述ふるが如く、宇宙森羅の萬有は、千態萬狀、無量無盡なりと雖も、然かも各々相依相成して、互に主となり伴となり。空不空、有力無力、即入無礙自在にして、一大調和を成じて、鎔融無礙具徳難思なり。蓋し是くの如く、天地萬有の事事無礙無盡圓融なるは、森羅の諸法は、其の體相を研尋するに、一一六相を具足して、不可思議なるに依るものにして。先に説く十玄緣起の法門、即ち此の六相を具足せる諸法の事事無礙無盡圓融なることを示して、吾人衆生をして、法界法門に悟入せしむるに外ならず。故を以て六相圓融の法門は、古來華嚴教學の深義として、十玄無礙の法門と並び稱せられ。或は十玄緣起の諸法を融して即入し、六相圓融衆相に通じて無礙なりと示し、或は十玄六相の月は、圓融勝義の天に懸ると説きて。學佛の徒の稱讚措かざる所なり。蓋し嚴家に、十玄無礙の法門に並び

て、六相圓融義の開説ある所以は、是れ凡庸の定執の見を破して、緣起圓融の法を顯はさしめんが爲めにして。賢首大師は、華嚴五教章卷中紙三十に、
 教興意者。此教爲顯一乘圓教法界緣起無盡圓融自在相即無礙容持乃至因陀羅無窮理事等。此義現前。一切惑障。一斷一切斷。得九世十世滅。行德即一成一切成。理性即一顯一切顯。並普別具足始終皆齊。初發心時便成正覺。良由如此法界緣起六相容融。因果同時。相即自在。具足逆順。因即普賢解行及以證入。果即十佛境界所顯無窮。廣如華嚴經説。
 と示し。又同大師は、華嚴經探玄記第九紙十九に、
 明教興意。謂破定執見。以顯緣起圓融之法。此義現前。一切惑障。一滅一切滅。行位一成一切成。
 なりと説き。清凉大師は、華嚴經疏演義鈔第三十四上記第一輯第十卷に、第二册九九紙右に、
 此六相爲顯緣起圓融之法。勿以陰界入等事相執取と云へり。蓋し前章所説の十玄緣起無礙法同義は、其の所詮は、一乘緣起の無盡を説くにあり。此の故に其の無盡緣起の何れの教に依りて説くかを説明せん

が爲めに、即ち六相圓融の教門に依りて、此の無盡緣起の妙義を説くは、六相圓融義の所詮にして、彼の章に次ぎて、此の章の來れるは、即ち此の意に外ならず。華嚴五教章指事記中末紙三十九に、上來一乘緣起の無盡を明かすと雖も、未だ此の無盡緣起は、何の教に依りて説くやを明かさず。今將さに六相方便の教門に依りて、此の無盡緣起を説くことを明かすが故に、是の故に此の門ありと云へり。以て六相圓融の深義を知るべきなり。

第二節 六相義の本據及び相承
 第一項 六相義の本據

前節既に六相圓融義の開説ある所以の意志を説明せり。然るに此の六相圓融の妙旨は、其の基く所、何れにありやと云ふに。即ち晋譯華嚴經第二十四紙五十地品に、初觀喜地の菩薩に、一に供養願。二に受持願。三に轉法輪願。四に修行願。五に成就願。六に承事願。七に淨土願。八に不離願。九に利益願。十に正覺願。の十大願あることを説き。而して其の第四修行願の文に、

又一切菩薩所行。廣大無量不可壞。無分別。諸波羅蜜所攝。諸地所淨生諸助道法。總相。別相。有相。無相。有成。有壞。一切菩薩所行。諸地道及諸波羅蜜本行。教化一切。令其受行心得增長。發如是大願。廣大如法界。究竟如虛空。盡未來際。盡一切劫菩薩所行。以諸教化。成就衆生。無有休息。と説けり。文の中總相。別相。有相。無相。有成。有壞と説くは、即ち有名なる六相の文にして、唐譯華嚴經第三十四下紙五十右には、

又發大願。願一切菩薩行廣大無量不壞不雜攝諸波羅蜜。淨治諸地總相別相同相異相成相壞相。所有菩薩行。皆如實説。教化一切。令其受行心得增長。廣大如法界。究竟如虛空。盡未來際。一切劫數。無有休息。と見え。別譯十地經第三四紙には、

又發大願。所謂一切菩薩所行。廣大無量不雜。諸波羅蜜所攝。諸地所淨生諸助道法。總相。別相。同相。異相。成相。壞相。説一切菩薩所行如實地道及諸波羅蜜方便業。教化一切。令其受行心得增長故。廣大如法界。究竟如虛空。盡未來際。盡一切劫數行數。增長無有休息。

と云へり。是れ即ち六相の説ある本源にして、嚴家に六相相義を談ずるもの實に正依の本經たる、大方廣佛華嚴經の所説に基くと云ふべし。然るに是くの如く、根本聖典に既に六相の目を説くありと雖も、文簡にして、其の意義に至りては、何等説明す所あらず。是れ後來世親大士の發揮を待つ所以なり。

第二項 六相義の相承

其一 至相大師以前の六相義

一 世親大士の六相義

既に述ぶるが如く、嚴家法門の深旨たる、六相義の淵源は、源と摩訶毘盧舍那佛の所説に在りと雖も、其の六相の如何なるものなりやに就きては、文簡にして、明了に是を説示せざるが故に、其の詳細に至りては、是を菩薩の論釋に待たざるべからず。然るに華嚴宗に印度支那を通じて、十祖を立つる中、印度の第四祖龍樹菩薩は、大不思議十萬頌を著して、華嚴經を釋せりと傳へられ。其の十地品の釋の中、初地及び第二地の餘迄は、幸に後秦の翻經三藏鳩摩羅什、耶舍三藏の誦出す

るに依りて、譯して十住毘婆沙論一十六卷を成すと雖も、論第二卷紙十八釋願品の中、初地菩薩所發の十大願の中、正しく六相の文を説く。第四修行願の釋を見るに、單に、

願教化衆生。令悉入諸道。教名教他。以善法。化名遠離惡法。我當以此二法。令無量阿僧祇衆生住聲聞辟支佛道。是第四願。

と説きて。一言も六相に及べる無し、然るに第五祖世親大士の十地經論を披見するに、論第一右六紙に、

一切所説十句中。皆有六種差別相門。此言說解釋應知。除事者謂陰界入等。六種相者。謂。總相。別相。同相。異相。成相。壞相。總相者是根本入。別相者餘九入。別依上本滿破本故。同相者入故。異相者增相故。成相者畧說故。壞相者廣說故。如世間成壞。餘一切十句中隨義類知。

と見え。又同紙十四右十四に、有名なる相善決定等の六決定を釋する下に、

於中善決定者是總相。餘者是別相。同相者善決定。異相者別相故。成相者是畧說。壞相者廣說故。如世界成壞。

と説きて。六決定に對して、六相義を以て之を釋し。又同紙十九右十九には、

迭共相瞻住。一切成恭敬。如蜂欲熟蜜。如渴思甘露。

の二衆清淨の偈を釋するに、同じく六相義を以てして、

此偈迭共相瞻是總相。一切成恭敬是別相。如是餘偈初句總相。餘句別相。

同異成壞。如上所説。

と云ひ。又第三左四紙に、初地の菩薩の十大願を説く、第四修行願の下には、具さに六相の名義を出し、其の他、論一部を通じて、此の六相釋を依用せるもの、枚舉に遑わらず。蓋し華嚴大經所説の六相の義は、世親大士の論釋に依りて、初めて遺憾なく、其の眞意を道破せられたりと云ふべし。是に依りて、爾下正しく世親大士の六相義を考ふるに、且らく前引所顯の文の中、第一文に依るに、論に此の六相釋の依りて起る所は、華嚴經十地品、即ち別譯十地經に、

又一切菩薩不可思議諸佛法明。說令入智慧地故。善分別選擇一切佛法故。

廣知諸法故。善決定說諸法故。無分別智清淨不雜故。一切魔法不能染故。出

世間法善根清淨故。得不可思議智故。乃至得一切智人智境界故。

と説きて。即ち十地品所主の主金剛藏菩薩佛の威神力を禀けて、菩薩の大智慧光明三昧に入り。將に十地の一品を説かんとするに。即ち時に十方世界に一方の十億の佛土に過ぎたる微塵數の世界に於て、十億の佛土あり。微塵數の諸佛皆其の身を現じて、金剛藏と名づく。十方の世界も亦復たかくの如し。皆共に同聲に讚して、善哉善哉、金剛藏、乃ち能く是の菩薩の大智慧光明三昧に入れ。是くの如く、十方世界の微塵數の諸佛も、皆同一號にして、金剛藏と名づけ、汝に威神力を加し玉ふ。所謂盧舍那佛の本願力の故に、大威神力の故に、汝大智慧力を有するが故に。一切の菩薩の不可思議なる諸佛の法明を宣べんと欲するが故にと云へる、讚文にして。論には此の一切菩薩不可思議諸佛法明説令入智慧地故の、十句の文を以て、自利の行に依るとし。釋して左の如く云へり。

是中。一切菩薩者。謂住信行地。不可思議諸佛法者。是出世間道品。明者見智得證。説者於中分別。入者信業得證。智慧地者謂十地智。如本分中説。此是根本入。如經又一切菩薩不可思議諸佛法明説令入智慧地故。此修多羅中説。依根本入有九種入。一者攝入。聞慧中攝一切善根故。如經攝一切善根故。二

者思議入。思慧於一切道品中智方便故。如經善分別選擇一切佛法故。三者法相入。彼彼義中無量種種智故。如經廣知諸法故。四者教化入。隨所思議名字具足善說法故。如經善決定説諸法故。五者證入。於一切法平等智。見道時中善清淨故。如經無分別智清淨不雜故。菩薩教化衆生。即是自成佛法。是故利他亦名自利。六者不放逸入。於修道時中。遠離一切煩惱障故。如經一切魔法不能染故。七者地地轉入。出世間道品無貪等善根淨故。如經出世間法善根清淨故。復有善根能爲出世間道品因故。八者菩薩盡入。於第十地中。入一切如來秘密智故。如經得不可思議智境界故。九者佛盡入。於一切智入智故。如經乃至得一切智人智境界故。是諸入爲校量智義差別次第。轉勝非根本入。即ち經に説く十句の中第一の句を以て、根本入として、餘の九入を攝盡するものとす。故に行證に關して、餘の有漏の聞等の三慧、及び無漏の證法を攝し。又階位に關しては、十信乃至佛地を攝するなり。攝一切善根故等の第二句以下の九句は、次第の如く九入と爲す。其中第二の攝一切善根故の一句を攝とし、是れ聞慧にして、中に一切の善根を攝し、十信位に當る。第三の善分別選擇一切

佛法故を思議入とし。是れ思慧にして、一切の佛法を分別選擇す。乃ち十住位に當る。第四の諸知者法故を法相入とし、是れ思慧にして、廣く諸法の種種の義を知ると爲す、十行是れなり。第五の善決定説諸法故を教化入とし、是れ修慧にして、名字具足して、善く法を説く、是れ十回句位に當る。第六の無分別智清淨不雜故を證入とし、是れ一切法を證する平等智にして、初地見道の位に當る。第七の一切魔法不能染故を不放逸入とし、是れ煩惱を遠離して、清淨なるが故に、一切の魔事も染すること能はざるものにして、第二地以上の修道に當る。第八の出世間法善根清淨故を、地地轉入とす。是れ出世間の道品無貪等の清淨善根にして、第八地已上の修道に當る。第九の得不可思議智境界故を、菩薩盡入とし。是れ第十地中に於て、一切如來秘密智に入るなり。第十の乃至得一切智人智境界故を、佛盡入とし、是れ一切智人智の境界にして、妙覺位是れなり。是くの如く、經の十句を以て、一に根本入。二に攝入。乃至十に佛盡入とし。此の十入に、皆六種の相ありとして。六相義を説くもの、是れ即ち世親大士の六相論なり。其の意に依るに、總相とは、是れ根本入にして、別相とは、餘の九入なり。然して此の總

別の一對たるや別は總に位止し、又總を滿たすものなり。論の文に、別依止本滿彼本故と云へり。同相とは、攝入等の九種の入は、並びに皆共同和合の義ありて、同じく入の資格あり。論の文に、同相者入故と云へり。異相とは、攝入等の九入は、漸増の義ありて、攝入は、十信位乃至佛盡入は、妙覺位に當り、即ち前後相望するに異の義あり。論の文に、異相者増相故と云へり。成相とは、緣成和合して、九入各々異なれども、皆緣起を成するの意にして、論の文に、成相者畧説故と云へり。蓋し略言を以て、標顯することを得るの義にして、攝入等の九入を緣成和合の意に依りて、一緣起を成すと云ひ得ればなり。壞相とは、緣散すれば作なく、然かも廣く因緣を辨じ、壞を顯はすものにして、壞は壞散の義なり。論の文に、異相者廣説故と云へり。之を要するに、先に説けるが如く、本と六相の文は、初地の菩薩の十大願を説く中、第四修行願の下に出づる文なりと雖も。論主は是を隨義轉用して、十地の菩薩の階位に約したる十句の文を釋するに用ひ、且つは六相の名義を發揮し、且つは一位即一切位の圓融因位果位の鎔融無礙なることを釋顯せるものなり。具さには華嚴經探玄記第九以下の文を見るべし。然るに世親大士

の六相論に依るに、其の説く所は菩薩の階位を論するに在りて存し。又論には除事事者謂陰界入等と説きて、此の六相論たるや此れ差別の事相たる五陰十二入十八界等即ち有爲の諸法たる一切萬法に適用すべきものにあらずと云へり。果して然らば、論主の六相論は、唯だ單に菩薩の階位に就きてのみ論究せるものにして。後年至相賢首等の諸祖に依りて論せらるゝが如き、宇宙森羅の諸法、即ち一切縁起の法に就きて、事事無礙圓融自在なることを説明し、論究する解釋の方軌としての六相論とは、大に其の意を異にするものと云はざるべからず。是れ蓋し淨影寺慧遠等の地論師が、六相は事相の上に於ては、語るべからずして、但だ理體の上に於てのみ談すべきものとなせるなり。華嚴五教章匡真鈔の著者鳳潭師は、論主の六相論を評して、鈔第六に、

然考實而言之。論中除事之言。乃當終教義。

と云へり。是くの如く論主の六相論の當面は、正しく終教位の所談なり。然るに能く文の前後を案するに、論主は除事の言を説くも、言頗る寛容不迫にして、其の間何等かの深意を含めるものゝ如く、又、一方菩薩の階位に約するも、然かも是

れ事相の分域内に於ける所談なり。是れ他日至相賢首等の諸大師に依りて、六相義を以て、法界縁起の諸法、即ち森羅萬有の事事物物の、即ち無礙自在なることを證明し、説明する解釋の方軌に供せらるゝに至りし所以にして、華嚴家六相義の依りて基く所實に此に在るなり。之に依りて華嚴大經の深義は、世親大士に依りて發揮せられ、世親大士の論釋は、至相賢首等諸大師の擇法眼に依りて、眞に其の深旨を發揮せられたりと云ふべきなり。

二 淨影大師の六相義

淨影寺慧遠法師に依るに、十地經論義記第一末三紙に、六相義を釋するに、一に明立意。二に明其建立所依。三に汎就諸法解釋六相。四に解文の四門分別を以てし。大乘義章第三末五十一紙右に、六種相門義の一章を設けて、詳かに六相の深義を明かせり。凡そ六相の法門は、所謂凡夫二乗の定執を破せんが爲めなり。義記に此の意を明かして、

一明立意。爲破定見。有人於法。取定總別一異等相故。明諸法縁起互成六

門非定。破彼定執。
と云へり。六相の中、總別同異の四相は、所釋にして、成壞の二相は能釋なり。所釋の四相の中、總同の二相は所釋にして、同異の二相は能釋なり。即ち總別の二相は、唯所釋にして、同異の二相は、能所釋に通じ、成壞の二相は、唯能釋なり。十地經論義記に、

成壞兩門約就同異釋成前二。以彼異相苦無常等體不相離。是故隨彼差別多色。得攝爲一故稱爲成。以彼異相苦無常等義不同故。一色隨之分爲多色故。名爲壞。非滅壞矣。據實而言前之四門顯法義足。以後二門約異顯同成。前總別故。爲六相。

と云ひ。大乘義章に、

據實論之。說前四門。辨義應足。爲約同異成前二門。故有六也。

と云へり。前項既に説けるが如く、世親大士の十地經論に依るに、除事事者謂陰界入等と云ひて。六相義は事相に於ては論すべからずして、唯だ理體の上に談ずべきものとなせり。十地經論義記に依るに、事法は別なりと雖も、理義は齊し

く通すと云ひ。又、且らく色に就きて六相を辨釋す、餘類は知るべし。六相とは如何ん。一色の中の如し。同體は具さに苦無常等の一切の諸義ありと示し。大乘義章には、

此六乃是諸法體義。體義虛通旨無不在。義雖遍在事隔無之。是以論言。一切十句皆有六相。除事事謂陰界入等。陰界入等彼此相望事別隔礙不具斯六。所以除之。若攝事相以從體義。陰界入等一一之中。皆具無量六相門也。

と云へり。是れ六相は、即ち是れ諸法の體義なり。體義は虚通して、旨在らざることを無し。義は遍して在りと雖も、事隔ることなからんや。是を以て陰界入等は、彼此相望するに、事別隔礙して此の六を具せず。所以に之を除く、若し事相を攝して體義に従へば、陰界入等の中に、皆無量の六相門ありとするものにして。相に對し事に約すれば、六相を具せず。體に約し理に約すれば、六相を具するの意なり。是の故に遠師の六相を釋するや、假令色の事法に就くも、忽ち理義に約して、六相の深義を説明せり。且らく一の色陰の如き同體に、具さに恒沙の佛法あり、苦。無常。不淨。虛假。空。無我。等の一切の佛法なり。是等の諸法は、

義は別にして體は同なり。互に相縁集して彼の同體の一切佛法を攝して、以て一の色を成す。此の色を名づけて總と云ふ。此の總の中に就きて、無量恒沙の佛法を開出す。色は彼の法に隨ひて無量あり。苦の色。無常の色。不淨の色。空無我の色。乃至眞實緣起の色等なり。是くの如く無量の差別の色あり、是を別と云ふ。別の中に就きて、苦無常等の諸法の上に、皆色の義あり、之を同と云ふ。色の義は、同なりと雖も、然かも彼の色の苦は、色の無常に異なれり。是くの如く一切各々異なるを異と云ふ。此の異の中に就きて、義門殊なるありと雖も、其の體別ならず。體別ならざるが故に、諸義衆しと雖も、相離るゝことを得ず。相離れざるが故に、之に隨ひて色を攝して一と爲すことを得るを成と云ふ。成とは畧の義なり。體は別ならずと雖も、義門は恒に異なる。義門異なるが故に、一の色も之に隨ひて、多色と爲すことを得るを壞と云ふ。壞は廣壞の義なり。是くの如く、一の色陰に就きて、六相義を具足せり。又彼の色の無常に就きて、六相義を辨するに、諸義を總攝して以て無常と爲す、是を總と云ふ。此の總の中に就きて、無量恒沙の佛法を開出するに、無常彼れに隨ひて無量あり、色の無常。苦の無常。

不淨の無常。空の無常。無我の無常。乃至眞實緣起の無常等なり。是くの如き無量の差別ある、是を別と云ふ。別の中の色の苦等の上に就きて、皆無常ある是を同と云ふ。無常は同なりと雖も、而かも色の苦等は、各々異なる、是を異と云ふ。此の異の中に就きて、義門殊なりと雖も、辨する所の無常は、是を攝して一と爲すことを得るを成と云ふ。體は別ならずと雖も、義門は恒に殊なり。義門殊るが故に、無常も亦之に隨ひて、衆多となすことを得る、是を壞と云ふ。是くの如く色の中の、無量の諸義及び餘の一切の陰界入等、准じて以て知るべきなり。大乘義章に、

六相之義既通諸法。依法成行行亦齊有。是故初地第四願中。宣說一切菩薩所行。皆有惣別同異等也。隨行所說廣如地論。此六乃是大乘之淵網。圓通之妙門。若能善會斯趣。一異等執消然無迹。

と云へり。即ち世親大士にありて、菩薩の行位の上にも論せられし六相義が、師に至りて、更に廣く諸法の體義の上にて論するに至りしを知るべし。

其二 至相大師の六相義

上來既に六相圓融義の本據及び世親大士、慧遠法師等の六相義の要旨を畧説せり。然るに且らく是を華嚴家相承の列祖に見るに、其の六相義の開説あるは、正しく第二祖至相大師を以て其の先蹤と爲す。華嚴經傳記第三七紙に左の如く云へり。

釋智儼。(至相) 姓趙氏。天水人也。(中畧) 儼以法門繁曠。智海沖深。方駕司南。未知何匿。乃至於經藏前。禮而自立誓信手取之。得華嚴第一。即於當寺智正法師下。聽受此經。雖閱舊聞。常懷新致。炎涼亟改。未革所疑。遂遍覽藏經。討尋衆釋。傳光統律師文疏。稍開殊軫。謂別教一乘。無盡緣起。欣然賞會。粗知毛目。後遇異僧來。謂曰汝欲得一乘義者。其十地中六相之義。慎勿輕也。可一兩月間。攝靜思之。當自知耳。言訖忽然不現。儼驚惕良久。因則陶研。不盈累朔。於焉大啓。遂立教分宗。製此經疏。時年二十七。即至相大師は、始め華嚴經を智正法師に聽き、後に大覺寺慧光律師の疏を得て、

之を研鑽するに、頗る領會するものあり。然るに一日異僧の來るあり、告ぐるに、十地の中の六相の義を陶研すれば、必らず一乘法界法門に悟入すべきことを以てす。乃ち指示の如く、之を究むるに累朔を盈さずして、大に啓發する所あり。即ち華嚴經疏を製して、於大方廣佛華嚴經中搜玄分齊通智方軌と名づく。是れ世に所謂華嚴經搜玄記是れなり。

案するに、華嚴一宗所談の法門、固より廣漠なりと雖も、要を取りて之を云へば、即ち十玄緣起無礙法門義と、六相圓融義との外に出でず。而して十玄緣起の法門は、前章既に説明せるが如く、初祖杜順大師相稟の法門にして、其の淵源する所は、華嚴法界觀門に、三重の法界觀を明かす中、第三の周徧含容觀の所明に在り。蓋し是れ杜順禪師己證の法門にして、二祖至相大師是を大成せりと云ふべし。而して六相圓融の法門は、大師は之を異僧の告げに依りて感得せりと雖も、其の基く所を案するに、世親大士の十地經論の釋に在りて、大覺寺光統律師を始め、淨影寺慧遠法師等の地論宗人師の頗る珍重する所なり。之に依つて想ふに、六相圓融の法門は、恐らくは、地論系統の法門にして、大師は是を取り入れて、更に其の深。

義を發揮し、十玄縁起の法門と相並びて、華嚴別教一乗の根本法門となしたるに非るか。最も研究すべきなり。然るに至相大師の六相義を見るに、之を賢首大師に見るが如き、單に事の上に於てのみ是を語り、事事無礙の法門を説明するのみならず。又理の上にも、之を説きて、即ち六相には、順理と順事との二義ありとなせり。華嚴經搜玄記第三紙三十五左に、

六相有二義。一順理。二順事。此二義中。順理義顯。順事義微。

と云ひ。華嚴經孔目章第三左四紙に、

又依六相總別義。即是一乘。隨相行布義。即是三乘。此約教分説。

と云へり。蓋し先にも説明せる如く、世親大師の六相論に見るに、六相は多く菩薩の階位に就きて之を論じ、又除事事謂隱界入等と説きて、宇宙萬有の一塵一法に就きて論すること、極めて精微なり。是れ慧遠法師等の相に對し、事に約すれば、六相を具せず、體に約し、理に約すれば、六相を具すとの釋ある所以にして、大師の順理義顯、順事義微と宣せるもの、又是れに外ならず。然るに斯く順理と順事との二義ありと雖も、若し一乘普賢眼より之を見る時は、順事の義は、是れ論主

の正意にして、其の順理の義の如き、三乘淺畧の人の所見に過ぎず。是れ體がて賢首大師の唯順事釋ある所以なり。至相大師の華嚴五十要問答卷下紙十二左に依るに、六相の釋を設けて、左の如く云へり、

其六義及前因果理事相成。更以六法顯之。所謂總。總成因果也。二別義別成總故。三同自同成總故。四異諸義自異顯同義。五成因果理事成故。六壞諸義。各住自法不移本性故。所述縁起。並悉遍通。隨有事成。驗思可解耳。と。然るに此の深義の大成は、之を賢首大師に待たざるべからず。爾下更に詳説する所あるべし。

第三節 六相圓融義の要旨

前節既に説明せる如く、華嚴家六相圓融の妙義は、其の源實に大方廣佛華嚴經に出で、世親大師之を開示し。又至相大師は、之を所謂異僧の告げに依りて、益々其の深義を發揮せし法門なり。之に依りて高祖賢首大師は、其の微意を稟けて、益々其の深義を發揮し。飽くまで其の微意を開顯して、六相義を以て、法界萬有の

事事無礙なる所以を論證し。又事事無礙法門に悟入するの唯一直路なりと宣説せり。是れ蓋し法界の萬有は、日月星辰、山河草木より、一塵一法に至るまで、其の先天的本具の自性として、皆悉く六相の妙義を具足せるが故なり。乃ち以下大師の解釋に基きて、六相義の要旨を説明すべし。六相とは、先に既に述ぶるが如く、一に總相。二に別相。三に同相。四に異相。五に成相。六に懷相を云ふ。相とは體狀の義にして、諸法の體狀之を稱して相と云ふなり。此の體狀に凡そ六種あり、故に六相と云ふ。

初めに總相とは、一に多徳を含むが故にと釋し、宇宙の萬有は、日月星辰山河大地より、一花一葉、一色一香に至るまで、其の先天的本具の自性として、空不空、有力無力、相互即入して、鎔融無礙自在なるが故に、一法を主とすれば、他は悉く伴と爲り、主は伴を具し、伴は主に入り、主伴具足無盡にして、其の極まる所無し。是を以て假りに一塵一法を取りて之を見るに、此の一法は、能く法界森羅の諸法を具足して、此の一法なくんば、法界は成せず。法界諸法の成立する、一に此の一法の存するあるに依る。故に此の一法は、單なる一法に非ずして、法界萬有を具足する

の一なり。之を一に多徳を含むが故にと云ふ。華嚴五教章卷中紙右十には、屋舍の喩に依りて、之を示せり。

問。何者是總相。答。舍是。問。此但椽等諸緣。何者是舍耶。答。椽即是舍。何以故。爲椽全獨能作舍故。若離椽舍即全不成故。爲此若得椽時即得舍矣。

問。若椽全自獨作舍者。未有瓦等。亦應作舍。答。未有瓦等時。不是椽故不作。非謂是椽而不能作。今言作者。但論椽能作。不說非椽作。何以故。椽是因緣。由迷成舍時無因緣故。非是椽也。若是椽者。其畢全成。若不全作。不名爲椽。

問。若椽等諸緣。各出少力共作不全作者。有何過失。答。有斷常過。若不全成。但少力者諸緣各小力。此但多個少力。不成一全舍。故是斷也。諸緣並少力皆無全成。執有全舍者。無因有故是其常也。又若不全成者。去却一椽時。舍應猶成在。舍既全不成。故知非少力。並全成故。

問。無一椽時。豈非舍耶。答。但是破舍。無好舍也。故知好舍全屬一椽。

既屬一椽。故知椽即是舍也。

問。既舍即是椽者。餘材瓦等。應即是椽耶。答。總並是椽。何以故。卻椽即無故。所以然者。若無椽即舍壞。舍壞故不名材瓦等。是故材瓦等即是椽也。若不即者。舍即不成。椽瓦等並皆不成。今既並成。故知相即耳。一椽既爾。餘椽例然。

是故一切緣起法不成即已。成即相即。鎔融無礙自在。圓極難思。出過情量。法性緣起通一切處準知。

と云へり。又華嚴金師子章左四紙には、金師子の喩を以て、六相の妙義を説明するに、一師子は、是れ總相なりと云ひ。高山寺明慧上人の華嚴金師子章光顯鈔卷下左十紙には、一師子は、是れ總相なりと言ふは、第一相なり。一の中に多法を含むが故に總相と云ふ。謂く金師子一體の中に於て、五根等の多法を含むなりと云へり。

第二に別相とは、多徳一に非るが故にと釋し。上に説くが如く、宇宙の萬有は、其の一塵一法と雖も、是れ單の一塵一法に非ずして、即ち法界萬有の多徳を含有す

るの一塵一法なり。然るに森羅に差別し、萬差の別あり、故に別相と云ふ。華嚴五教章卷中に、一の屋舎の梁柱瓦石等の如しと譬喩を引き、

第二別相者。椽等諸緣別於總故。若不別者。總義不成。由無別時即無總故。

此義云何。本以別成總。由無別故總不成也。是故別者。即以總爲別也。問。

若總即別者。應不成總耶。答。由總即別故得成總。如椽即是舍故名總相。舍

即是椽故名別相。若不即舍不是椽。若不即椽不是舍。總別相即。此可思之。

問。若相即者。云何說別。答。只由相即是故成別。若不相即者。總在別外

故非總也。別在總外故非別也。思之可解。

問。若不別者。有何過耶。答。有斷常過。若無別者。即無別椽瓦。無別椽

瓦故即不成總舍。故是斷也。若無別椽瓦等。以而有總舍者。無因有舍故是常

也。

と云へり。又華嚴金師子章には、師子の五根差別するは、是れ別相なりとし。金師子章光顯鈔卷下には、五根差別するは、是れ別相なりとは、多法の中に於て、其餘體一にあらず。謂く一師子の中に於て、眼根耳根等差別するが故に、別相と云

へり。而して此の總と別とは、是れ一對にして、總には必らず別を具し。別は又總に依止して、而かも彼の總を成滿す。故に此の二は、不離にして、互に相成すなり。華嚴五教章卷中に、賢首大師は、別は總に依止して、彼の總を滿するが故にと云へり。

第三に同相とは、多義相違せず、同じく一の總を成するが故にと釋し。凡そ法界の萬有は、實に千狀萬態無量無盡なりと雖も。而かも空不空、有力無力、互に相即相入して、鎔融無礙なるが故に、相依り相待ちて、一の總を成すること、喻へば梁柱瓦石等の調順和合して、一の屋舎を作るに、各々相違せずして、同じく一の舎の緣となるが如し。華嚴五教章卷中に、屋舎の喩に依りて、

第三同相者。椽等諸緣和合作舎。不相違故能名舎緣。非作餘物故名同相也。

問。此與總相何別耶。答。總相唯望一舎說。今此同相約椽等諸緣。雖體各別。成力義齊故。名同相也。

問。若不同者有何過耶。答。若不同者。有斷常過也。何者若不同者。緣等諸緣。互相違背。不同作舎。舎不得有故是斷也。若相違不作舎。而執有舎者。

無因有舎故是常也。

と示し。華嚴金師子章に、同じく賢首大師は、師子の差別せる五根の、共に一緣起に従ひて、金師子を成することを説きて、共に一緣起を成するは、同相なりと云ひ。金師子章光顯鈔卷下に、明惠上人は、五根等の別法力を共にして、一師子を成立す。謂く眼根師子を作り。耳根また師子を作る。能作の眼根等は、差別ありと雖も、同じく一師子を作る。所作同じきが故に、同相と云ふ。一緣起とは、多法共して一師子を作るなり、緣起とは、師子を指すと云へり。

第四に異相とは、多義相望するに、各々に異なるが故にと釋して、既に説くが如く、法界の萬有は、空不空、有力無力、即入無礙自在にして、互に主となり伴となりて、一の緣起を成すと雖も。而かも各々自の形類に隨ひて、互に差別せること、喻へば彼の梁柱、瓦石等相依りて、一の屋舎を成するも、而かも各自の形像ありて、相差別するが如し。故に異相と云ふ。華嚴五教章卷中に、

第四異相者。椽等諸緣。隨自形類相差別故。問。若異者應不同耶。答。只由異故。所以同耳。若不異者椽既丈二尺。瓦應亦爾。壞本緣法故。失前齊同

成舍義也。今既舍成。同名緣者當知異也。

問。此與別相有何別耶。答。前別相者。但椽等諸緣。別於一舍故說別相。今異相者。椽等諸緣。迭互相望。各各異故也。

問。若不異者有何過耶。答。有斷常過也。何者若不異者。瓦即同椽丈二。壞本緣法。不成舍故是斷。若壞緣不成舍。而執有舍者。舍無因故是常也。

と示し。華嚴金師子章に、眼耳等相依りて同じく一緣起を成じ、金師子を成ずるも。而かも眼根は耳根にあらざることを示して、眼耳各々差異あるが故に、是れ異相なりと云ひ。金師子章光顯鈔卷下には、眼根は耳根に非ず、耳根は眼根にあらず等、各々差異あるが故に、異相と云ふなりと云へり。蓋し同異の二相は、是れ自から一對にして、即ち是の二相は、別相の中に於て、相望して同異を論ずるものにして、總相に望みて云ふには非るなり。

第五に成相とは、此の諸義に由りて、緣起成ずるが故にと釋し、宇宙の萬有は、窮極なしと雖も。而かも各々緣となりて、一法を成ずること、喩へば差別せる梁柱瓦石等の、各々緣となりて、一の屋舎を成ずるが如し、故に成相と云ふ。華嚴五教章

卷中に此の意を説きて、

第五成相者。由此諸緣舍義成故。由成舍故。椽等名緣。若不爾者二俱不成。今現得成故。知成相耳。

問。現見椽等諸緣。各住自法本不作舍。何因得有舍義成耶。答。只由椽等諸緣不作故舍義得成。所以然者。若椽作舍去。即失本椽法故。舍義不得成。

今由不作故。椽等諸緣現前。由此現前故。全義得成矣。又若不作舍椽等不名緣。今既得緣名。明知定作舍。

問。若不成者有何失。答。有斷常過。何者舍本依椽等諸緣成。今既並不作。不得有舍。故是斷也。本以成舍名爲椽。今既不作舍故。即無椽亦是斷。若不成者。舍無因有故是常也。又椽不作舍。得椽名者。亦是常也。

と示し。華嚴金師子章には、眼等の諸根、合會して、一の金師子を成ずることを示して。諸根合會して、師子あることを得るは、是れ成相なりと云ひ。金師子章光顯鈔卷下には、諸根和合せずば、師子を成ずることを得ず。已に合會して、師子成ずることを得るが故に、成相と云ふと釋せり。

第六に壞相とは、諸義各々自法に住して、移動せざるが故にと釋して、宇宙の萬有は、空、不空、有力、無力、即入無礙自在にして、互に主と爲り伴となりて、一法を成すと雖も、而かも各々自の本位に住して、飽くまで、本來の面目を保有し、敢て雜亂することなきこと、喩へば、梁、柱、瓦、石等の相依りて、一の屋舎を成するに。而かも梁、柱、瓦、石等は、各々自法に住して、本來の面目を失せざるが如し。華嚴五教章卷中には、之を屋舎の譬喩に依りて、

第六舍相者。椽等諸緣。各住自法本不作故。

問。現見椽等諸緣作舍成就。何故乃說本不作耶。答。只由不作舍法得成。

若作舍去。不住自法者。舍義即不成。何以故。作去失法。舍不成故。今既舍成。明知不作也。

問。若作去有何失。答。有斷過二失。若言椽作去。即失椽法。失椽法故。

舍即無緣不得有。故是斷也。若失椽法而有舍者。無緣有故是常也。

と示し、華嚴金師子章には、眼等の諸根、一の金師子を成して、而かも諸根各々自位に住することを示し。諸根各々自位に住するは、是れ壞相なりと云ひ。金師

子章光顯鈔卷下には、諸根各々自體を守りて、互に相作せざるが故に、即ち師子の總體を見ず、是を壞相と云ふ。問ふ。壞とは何の義ぞ。師子已に存し、諸根亦完し、何ぞ壞と云ふや。答ふ。壞とは、師子を以て、所壞と爲し、諸根を以て、能壞と爲す。謂く師子は、是れ總相、諸根は、是れ別相なり。諸根各々自の別位に住して、師子の總體を見ず。六相頌に、壞は自法に住して、常に作らずと云へる、此の謂なりと釋せり。蓋し成相とは、緣起諸法の果に就きて、別諸徳の悉く一の總を成就し終る所に名づけ。又壞相とは、其の緣起の當體、各々自法に住して、移動なく、一混なき所に名づけし者にして、此の二は、自から一對を總じて。六相は總じて、一に總別一對。二に同異一對。三に成壞一對の三對を成じ、次第の如く、法界の體に約し、體上の義相に約し、體上の義用に約すと云ふべし。而して其の持に六と限りて、五と説かず、七と爲さざる所以は、華嚴經探玄記第九紙十九に、

明建立者。何故唯六不多不少者。謂汎論緣起法要有三門。一末依於本有起不起。二彼所起末既帶於本。是故相望有同有異。三彼帶本之末既爲本收。是故當體有存有壞。若不具此三。不成緣起。三中各二故但唯六。

と釋せり。増して七と爲さず、減じて五と爲さざる所以を知るべし。

第四節 賢首大師の六相義の特色と、清涼大師の六相義

前節既に高祖賢首大師に依りて、六相圓融義の妙旨を畧說せり。然るに前にも説けるが如く、抑も此の六相義は源と大方廣佛華嚴經十地品の所說に出で。世親大士之を論釋して、菩薩の階位に就きて、六相の妙旨を談じ。緣起諸法の上に於ては、除事者謂陰界入等と説きて、文の當相より云へば、六相は事相に就きては論ずべからずして、單に理體の上に於てのみ、談すべきものとなせり。鳳潭和上の論中、除事之言、乃當終教義と云へる、蓋し此の故なり。是を淨影大師の所立に見るに、其の著十地經論義記第一末三紙には、事相は隔礙して、六相を具せず。是の故に是を除く。事謂陰界入等とは、陰は五陰、界は是れ十八界、入は是れ十二入なり、云何んか具せざる。五陰の中、色は受想に非ず、大至識に非るが如し。是くの如く一切皆同じ。其れ別なるを以ての故に、總相あることなし。總相無きが故に別を將ちて總に對し、以て成と壞とを説くべからず、故に不具と云ふなり。

若し體性に就けば、一の陰の中に、悉く六相を具せり。界と入も亦爾かるなりと説きて、即ち相に對し、事に約すれば、六相を具せず。體に約し理に約すれば、六相を具すとせり。而して之を更に至相大師の上に見るに、六相に凡そ二義あり、順理と順事となり。順理は義顯にして、順事は義微なりと云ひ。事理の二面に通じて、六相の義を解釋せり。上に説く、賢首大師の六相釋は、専ら此の順事の義に依りて、法界萬有、一塵一法として、六相の深義を具せざることなし。是の故に緣起の諸法は、互に主となり、伴となりて、事事無礙、鎔融自在なりと道破せり。是れ即ち大師の一乘普賢眼の妙釋にして、乃祖の微意、本經の妙旨は、遺憾なく説破せられ、六相圓融の眞意義は、眞に闡明せられたりと云ふ。華嚴五教章卷中三十三紙に、教興の意を明かして、

此教爲顯一乘圓教法界緣起無盡圓融自在相即無礙容持乃至因陀羅無窮理事等。此義現前。一切惑障。一斷一切斷。得九世十世滅。行德即一成一切成。理性即一顯一切顯。並晉別具足。始終皆齊。初發心時。便成正覺。良由如此法界緣起六相容融。因果同時。相即自在。具足逆順。因即普賢解行。及以證

入。果即十佛境界。所顯無窮。廣如華嚴經說。
 と云ひ。又、屋舎の喩を以て、妙に六相圓融の深旨を説きて。總是即ち一舎別は
 即ち諸縁同は即ち互に相違せず。異は即ち諸縁各別。成は即ち諸縁果を辨じ。
 壞は即ち各々自法に住すと示し。又華嚴金師子章には、六相を括るとは、言く一師
 子は、是れ總相なり。五根差別は、是れ別相なり。共に一縁起を成ずるは、是れ同
 相なり。眼耳各々相是せざるは、是れ異相なり。諸根合會して、師子あることを
 得るは、是れ成相なり。諸根各々自位に住するは、是れ壞相なりと説きて。六相
 の妙義を示すに、全く屋舎、金師子等の目前の事物を以てし、一塵一法も、皆悉く此
 の六相を具せざる無し。是の故に法界縁起即入無礙なりと談せり。是れ豈に
 先聖未徹、大師獨特の大法門に非ずや。初發心時、便成正覺と云ひ。一行一切行
 と云ひ。一斷一切斷と云ひ。一證一切證と云ひ。融三世間、十身具足等と談す
 る。是れ一に此の六相圓融の妙解より來るものにあらずや。大師の高見、眞に欽
 仰すべきなり。然るに、華嚴經探玄記第九紙十九以下に依るに、六相の義を釋する
 に、一に教興の意を明かし。二に種類を辨じ。三に所出を明かし。四に建立を

明かし。五に問答決擇し。六に經の本文を釋するの六門分別を以てする中、第
 六釋文の下に、世親大士の十地經論に、除事、事者謂陰界入等と云へる、文を釋して、
 除事謂陰界入等者。此辨定其義。謂約道理說融通。非是陰等事相中辨故除
 簡之。

と云へり。此の意に依るに、忽ち見れば、頗る淨影大師の義に同じ。六相は單に
 理の上に於てのみ語るべきものにして。陰界入等の事相の上には、語るべから
 ざるが如くなれども。眞意のある所は、即ち然らず。蓋し賢首大師の眞意とせ
 るは。一切の諸法は六相の道理に約して、融通を談すべく。直ちに陰界入等の
 三科の、但事を取りて論すべきに非ず。若し夫れ六相に入らしめざれば、即ち止
 まむ。苟も六相方便教門に入らしめんか、一切の事法は、圓融無礙ならざるなし。
 前に説く華嚴五教章、及び華嚴金師子章等の所釋と對比して、深く玩味すべきな
 り。第四祖清涼大師に依るに、華嚴經疏演義鈔第三十四上記第一輯第十卷 第二册九九右以下六
 相の深義を釋するに、一に總じて大意を彰はし。二に標舉顯通。三に其の立意
 を彰はし。四に名を列ねて畧釋し。五に總じて喩を以て明かし。六に例を舉

げて徧なく釋し。七に廣く餘に在ることを指すの、七門分別を設け。賢首大師の所釋を相承して、所論最も丁寧なり。然るに世親の十地經論の除事等の文を釋するや、事無礙の高談に加ふるに、趣入を主とする事理無礙の方面よりして、除事者。此顯立意。謂此六相爲顯緣起圓融之法。勿以陰界入等事相執取。と説き。更に釋して、其の立意を彰はすに、先づ論を擧ぐ。此顯の下は疏釋なり。即ち賢首の意は、一乘圓教法界緣起無盡圓融自在相即無礙容持。因陀羅網無窮の理事等を顯はさんがためなり。此の義現前すれば、一斷一切斷。一證一切證。即ち普賢の圓因十佛の境界を具すと云ふ。此の言説は、教道に約して、解釋するなり。勿以陰界入等とは、除事の言を釋す、論の中には、但だ事謂陰界入等と云ふ。今執取の言を加へて、論意を釋するは、是れ人をして、事に隨ひて執取せざらしめんがためなり。陰界入の體に、六相を具せざるにはあらず。故に遠公は、陰等の色は、受想に非ず、乃至識に非るが如し、是くの如く一切皆同じ、其の別なるを以ての故に、總相なきに非ず。故に別を以て總に對して、成と壞とを説くことを得ず、故に不具と曰ふ。若し體性に就けば、一一の陰等、悉く六相を具せり。界入等も、

亦爾かるなりと云へり。先に廣く諸法の中に就きて、辨するが如しと釋せり。是に依るに、清涼大師の所立は、亦事理の方面より、六相義を説くものにして、文中淨影大師の所説を援引するが如く、頗る淨影大師の所立に似たり。是れ蓋し六相義の妙旨は、先に賢首大師にありて、事無礙の圓旨を道破し畢りて、所談既に妙を盡せるが故に。清涼大師は、其の事無礙法門に趣入する、事理無礙の邊をも並べ取りて、實踐修行の便に供せり。是れ即ち至相大師の六相頌に、唯智境界非事識。以此方便會一乘。と説き、賢首大師、又是を華嚴五教章卷中、六相圓融義の章末に、引用せられし深意を發揮するものにして、單に理論にのみ走り。事相の一邊にのみ傾く者を戒めし妙釋なり。華嚴列祖の爲人大悲、豈に欽仰すべきにあらずや。

第五章 華嚴觀法の種類及び釋名

第一節 華嚴觀法の種類及び其分齊

且らく天台一家の所談に依るに、所謂空假中の三觀と稱して、其の所觀の境を施設するに、儼然たる制限の存するありて、敢て此の規に違背することを許さず。然るに華嚴教學は、既に説きし如く、釋迦文佛海印定中頓現の法門なるが故に、佛自所證の極致、稱法界の圓談にして、一即一切、一切即一、重重無盡、主伴無礙にして、一微塵の中に一切を具し、帝網無礙法界緣起の法門なれば、強て觀境に制限を立てず。歷緣對境、一一探りて以て所觀の法と爲すべきが故に。或は人。或は法。或は理。或は事。若しくは染法。若しくは淨法。一切悉く觀法ならざる無し。是れ文義一致、教觀不二の深義なり。是を列祖の所説に見るに、初祖杜順大師は、華嚴五教止觀を撰述し、小始終頓圓の五教に約して、一に法有我無門。二に生即無生門。三に事理圓融門。四に語觀雙絕門。五に華嚴三昧門の五門の觀を示し。

又真空第一、理事無礙第二、周徧含容第三の三重の法界觀を立て、一乘行人の華嚴法界に證入すべきことを示めせり。第二祖至相大師は、初祖大師の深意に依りて、華嚴一乘十玄門を著はし、初めに教義。理事。解行。因果。人法。分齊境位。法智師弟。主伴依正。逆順體用。隨生根欲性。等の十玄所事を説きて、萬有の染淨依正、悉く十玄無礙たるべきを示し。次に同時具足相應門、乃至託事顯法生解門の十玄門を説きて、一塵一法の此の十玄を具せざること無きを示し。以て圓解妙悟を生せしめ。其の他或は六相圓融の妙義を説き。或は眞如觀。唯識觀。若しくは一切入觀等の十八觀を示し。第三祖賢首大師は、更に前祖の微意を承けて、益々悟入法界の觀法を明らかにし。或は遊心法界記。或は安盡還源觀。或は華藏世界觀。或は普賢菩薩觀。乃至大乘起信論義記。卷下末二十九等に、眞如觀等を明らかにし。第四祖清涼大師は、三聖圓融觀。華嚴心要觀。五藏觀。十二因緣觀。四法界觀等を説き。第五祖宗密禪師は、多く前祖の所説を稟けて、益々深意のある所を發揮し。更に大方廣圓覺修多羅了義經の所説に依りて、寶王如來性起の法門を以て、是れ大圓覺の妙心なり、是れ總該萬有の一心なり、是れ靈知不昧の一

心なりと説きて。禪家の所謂直指單傳の法門に同じて、愈々託事顯法の深義を明らかにし。以て一塵一法も、是れ所觀の境にあらざる無く、又無盡緣起の法門にあらざる無きことを明らかにせり。

是くの如く華嚴の列祖は、何れも力を盡くして觀道實修の要を示し。華嚴の行者をして、法界の眞理に悟入せしめ玉ふ。此の故に華嚴列祖の所明を概觀するに、彼説此示、幾多の觀法を成じ。其の行相亦多様なりと雖も、試みに是を義に依りて類別するに、凡そ三種の別を出です。乃ち一に約教淺深門。二に直顯與旨門。三に寄顯染淨門。の觀法是れなり。初めに約教淺深門の觀とは、是れ杜順大師の華嚴五教止觀及び賢首大師の十門唯識觀の如きは、即ち是れにして、教の淺深に依りて、觀行の次第を立つるものを云ひ。二に直顯與旨門の觀とは、是れ杜順大師の華嚴法界觀門、賢首大師の遊心法界記、安盡還源觀、普賢菩薩觀、華藏世界觀。清涼大師の三聖圓融觀、華嚴心要法門の如き、即ち是れにして。直ちに華嚴圓教の秘密奧旨を顯はすものに名づけ。三に寄顯染淨門の觀とは、清涼大師の五蘊觀、十二因緣觀等の如き、廣く大小乘に説く、染淨差別の緣起を觀するに寄

せて、華嚴一乘の圓融の觀を顯はすものを云ふ。是くの如く、華嚴一家の觀門は、實に多種多様にして、歷緣對境、一塵一法として、皆觀門ならざること無し。是れ自餘の末教の所説と、全く其の軌を異にする所以なり。然るに是くの如く、幾多無量の觀法ありと雖も、要を以て是を云へは。華嚴の觀は、畢竟四法界觀の外を出でず。而して此の四法界觀は、即ち是れ初祖杜順大師の華嚴法界觀門に説く、三重の法界觀にして。或は十玄無礙觀と云ひ。或は六相圓融觀と云ひ。或は五蘊觀と云ひ。十二因緣觀と云ひ。何れも共に四法界觀の隨一を、開展し。應用し、更に是を演釋敷衍せるものに外ならず。例せば五蘊觀、十二因緣觀の如きは、是れ事法界觀にして、眞如觀、空觀は、理法界觀、事理圓融觀の如きは、理事無礙法界觀門、十玄無礙觀、三聖圓融觀の如きは、事事無礙法界觀なるが如し。更に是を要約するに、性起觀と緣起觀との二種を出です。性緣の二起の義は、前に既に説示する所にして、今修觀の上にて例を示さば、彼の十門唯識觀の如きは、是れ緣起修入の觀にして、華嚴心要觀の如きは、性起修入の觀なり。而して此の二起は、聽がて又列祖弘化の左右を示すものにして、即ち賢首大師等の、主として法門の

建立を以て、弘化の要となし玉へる時代は、必らず緣起門の所説にして、清涼、圭山、兩大師の如き、修行門を本として、行者の觀道修入を弘化の要となせる時代は、單刀直入、直ちに心源に到達し、悟入法界の要を示す、性起門の所説なり。

第二節 華嚴觀法の釋名

第一項 杜順禪師の觀法

其一 華嚴五教止觀

華嚴五教止觀一卷は、初祖杜順大師の撰述なり。一部の所明は、行人道を修して、邪を簡び正に入る止觀の法門に五門あり。前に屢々述べし如く、一に法有我無門。二に生即無生門。三に事理圓融門。四に語觀雙絕門。五に華嚴三昧門にして、初めに法有我無門とは、是れ小乗教の觀にして、一切の有情は、無始より已來、身を執して一と爲し、我我所を計す。然るに我を計するに二種あり。一には身に即して我を執し。二には身を離れて我を執する是れなり。身を離れて

我を執すとは、所謂外道の身内に、別に神我ありと執するものにして。彼の數論派、外道哲學の所説の如し。身に即して我を執すとは、是れ吾人凡愚の多く執する所にして。如來の大慈悲なる、此の病を破せんが爲めに、都べて四藥を開きて、以て四病を治したまへり。四病とは、一には身を執して一我と爲す。二には四大を執す。三には五陰を執す。四には十二入を執すを云ひ。四藥とは、一には色心の兩法。二には四大五陰。三には十二入。四には十八界是れなり。即ち若し衆生の、身を執して一我と爲し、而して病を成ずる者には、佛、即ち色心の二法を説きて藥と爲し、是を對治したまふ。然るに衆生又色心の二法あることを聞きて、即ち以て實と爲して、病を成ずる者の爲めには、色を開きて四色と爲し。一心を開きて四心と爲して、是を對治したまふ。四色は、即ち四大にして、四心は、五陰の中の受想行識の四心是れなり。然るに又衆生ありて、四色四心を執じて、病を成せば、佛、爲めに四大を合して一色と爲し、四心を合して、一心として、是を對治したまふ。一色とは、即ち五陰の中の色陰にして。一心とは、十二入の中の意入是れなり。然るに又衆生是を聞きて、病を成ずる者あり。此の故に佛、爲めに、一色

を分ちて、十一色と爲し。一心を開きて、七心と爲して、是を對治したまふ。十一色とは、十二入の中の内の五根と、外の六塵とにして、七心とは、十八界の中の六識と、並びに意識是れなり。是くの如く一色一心を執して、我ありとなすべき無く、衆生此を聞きて遂に我空の理を悟覺することを得るなり。賢首大師の華嚴遊心法界記初紙に依るに、

第一法是我非門（即法有我無門）者。即愚法小乘三科法也。如四阿含等經及毘曇成實俱舍婆沙等論明也。（中畧）第一三科法方便者。即蘊界處法也。蘊者積集也。即五蘊法。界者差別等也。即十八界法。處者内外六處也。即十二處法也。言三者是數。科者類。法者是自性軌持。門者是通智遊入。是故總名爲三科法門也。就此門等。開爲二觀。一者總相觀。二者別相觀。初者三科雖異。唯色與心故名總相。即審諦觀察。唯法而無我人。故名爲觀也。此云何知。涅槃經云。若色此父等非。乃至和合是父者。無有是處等。又維摩經云。起唯法起滅。唯法滅等。即以總收別。唯總而非別故名爲總相觀也。此約利根入法方便也。二別根觀者。即於上總相之中。分別而觀故名別相觀。言分別者。色

中分爲十一。謂内五根外六塵。雖復内外有殊。尅體總名爲色。故云色法有十一。法有七者。初從眼耳。終至末那。始終雖差。並同心稱故。云心法即七也。色心合舉。故有十八。各別不同故云別相。即於此三處。觀察人我。能所俱離故爲觀也。十二入等可准知之。此云何知。按涅槃經云。等我衆生爲界分別觀等。又云。六入不爾。一向無人等。

と云へり。別相觀とは、蓋し總を分別するに、唯別にして總にあらざるが故なりと云へり。其の深意の在る所を知るべし。

二に生即無生門とは、是れ大乘始教の觀なり。是れに二觀あり。一に無生觀。二に無相觀なり。無生觀とは、法は自性無けれども、衆緣相由るが故に生ず。生ずれども、實有に非らざるが故に、是れ空なり。空や毫末無きが故に、無生と云ふ。性自不生なるが故なり。華嚴遊心法界記に、賢首大師曰く、

按大品等經云。一切法皆空。無有毫末相。空無有分別。同若如虛空一等。又三論云。因緣所生法義說即是空等是也。二無相觀者。相即無相也。何以故。此法離相故。此云何知。按維摩經云。法離於相無所緣故等。又般若經云。無

法相亦無非法相等。言觀者。觀智是法。離諸情計故名爲觀也。
 と云へり。賢首大師は之を緣生無性門と名づけ、即ち大乘初教なり。即ち前の諸法は緣生無性なり。諸部の般若等の經及び中百等の論に明かすが如しと云ひ、痛切に廣釋せり。
 三に事理圓融門とは、是れ大乘終教の觀なり。杜順禪師は、又華嚴五教止觀に説て曰く、事理兩門圓融一際者。復有二門。一者心真如門。二者心生滅門。心真如門者是理。心生滅者是事。即謂空有無二。自在圓融。隱顯不同。竟無障礙。言無二者。緣起之法似有即空。空即不空。復還成有。有空無二。一際圓融。二見斯亡。空有無礙。何以故。眞妄交映。全該徹故。何者空是不礙有之空。即空而常有。有是不礙空之有。即有而常空。故有即不有。雖有邊有。空即不空。離無邊空。空有圓融。一無二故空有不相礙。互形奪故。雙離兩邊故。經云註維摩經深入緣起斷諸邪見。有無二邊。無復餘習。又經云舊華嚴經二十八因緣故法生。因緣故法滅。若能如是解。斯人疾成佛。又經云。甚深如來藏。恒與七識俱。二種攝受生。智者則遠離。

と説けり。又賢首大師は華嚴遊心法界記左初紙に、此の門を事理混融門と名づけ。即ち大乘終教なり、空有雙べ陳べて障礙無きなり。勝鬘。諸法無行。涅槃。密嚴等の經。起信。法界無差別。等の論に明かすが如しと云ひ。其の他の所論は、幾んど至相大師と同一なり。以て此の門に對する兩大師の所見を知るべきなり。四に語觀雙絕門とは、大乘頓教の觀にして、賢首大師は之を盡理顯門と稱し、其の離相離性は楞伽。維摩。思益等の經に明かすが如しと云へり。而して杜順大師は華嚴五教止觀に、
 夫語觀雙絕者。經云維摩經九言語道斷心行處滅者是也。即於上來空有兩門。離諸言論心行之境。唯有眞如及眞如智。何以故。圓融相奪離諸相故。隨所動念即皆如故。竟無能所爲彼此故。獨奪顯示染不拘故。經云法華經唯如如及如如智獨存等。又經云。諸法寂滅相。不可以言宣。又經云。法離一切觀行。と説けり。而して華嚴遊心法界記には、

按維摩經中。三十二菩薩。各説二而不二。各入不二法門。次至維摩。維摩默答。寂無言說名入不二法門。文殊歎曰。善哉善哉。當知無有言說名字。名

入不二法門等。解云。何故顯默不二者。心法本自不二。更不待言而方不二也。又但默然無言。即是說入不二法門。何者。以下諸菩薩解得無言是真不二以語說觀行即是法故。亦即思益經中。聖默然。是此意也。と云へり。

五に華嚴三昧門とは、是れ一乘圓教の觀なり。但だ法界緣起は、惑ふ者は階り難し、若し先に垢心を濯はずんば、以て其の正覺位に登ること能はず、至相大師曰く、維摩經云。無以生滅心行說實相法。故須先打計執、然後方入圓明。若有直見色等諸法從緣。即是法界緣起也。不必更須前方便也。如其不得直入此者、宜可從始至終、一一微問致令斷惑盡迷除、法絕言見、性生解方爲得意耳。と云ひ。而して賢首大師は、其の著遊心法界記に、

按華嚴經云。信爲道元。功德母。增長一切諸善法。乃至信爲寶藏第一法。爲清淨手。受衆行等也。是故欲入法界無礙。要須發此徹到信心。若不發得如是之信心。無以入於法界無礙也。何以故。器不堪受無礙法。若得此心現前。能堪受無礙法也。(中畧)

按華嚴經云。譬如水所漂懼溺而渴死。不能如說行。多聞亦如是。又云。譬如貧窮人日夜數他寶自無半錢分。多聞亦如是等。即其事也。若能具上堅信。現前方可入於法界三昧。何者。以機感所宜性相應也。此云何知。按法華經云。深信堅固。如是之人。乃可爲說。又云。常修慈心。不惜身命。乃可爲說等。是故行者將欲求入法界無礙者。先自檢知信虛實。不可妄說即以爲真。(中畧)

言華嚴三昧者。解云。華者菩薩萬行也。何者以華有生實之用行有成果之。能雖復內外兩殊。生威力有相似。今即以法託事故名華也。嚴者行成果滿。契合相應。垢障永消。證理圓潔。隨用讚德。故稱曰嚴也。三昧者理智無二。交徹鎔融。彼此俱亡。能所斯絕。故云三昧也。亦可華即嚴。以理智無礙故。華嚴即三昧。以行融離見故。亦可華即嚴。以一行頓修一切行故。華嚴即三昧。一行即多。而不礙一多故。亦可華嚴即三昧。以定亂雙融故。亦可三昧即華嚴。以理智如如故。如是自在無有障礙。或定或亂。或即或入。或智或理。或因或果。或一或異。性海實德法爾圓明。應如理思絕於見也。

と。杜順大師の唱道したる華嚴聖典に於ける、高遠深邃なる宗教的哲理を詳説

せり。而して法藏師は、猶ほ華嚴經の聖文を引用して、華嚴三昧を、又は海印三昧と名づく。此れ即ち同時前後を名と爲し、頓現互融を目と爲す。猶ほ大海に四兵の像を現するに、像類各々差にして、頓に前後を現するが如し。然かも即ち像形一に非らざれども、水竟に殊ならず。像、水に即して、而かも湛然たり。水、像に即して、而かも繁雜たり、歴然として前後す。終始源め難し、宛然として繁興すれども、寂然として無相なり、頭を齊ふして頓に現す。隱顯知り難し。互入羈ること無し、鎔融絶慮なり。是くの如きの不思議は、思議を以て得べからず、深く不思議に入る、思、思にあらずして、寂滅すと云ひ。更に又海とは即ち諸像重重無盡にして、際限源め難く、一を窮むるに、竟に窮あること無し。一に隨ひて宛然として齊しく現す、是の故に海と云ふ。印とは、衆像前後にあらず、同時にして、品類萬差なり。即入無礙にして、一多兩ながら現じ、彼此違ふこと無く、相狀不同なり。異にして爾かも異にあらざるが故に、印と云ふなり。定とは類多差別なれども、唯一にして殊ならず。萬像競ひ興りて、廓然として無作なり、故に定と名づく。亦是海印印なるべし。四像宛然たるが故なり、海印即三昧なり、作即

不作なるが故と云ひ。又法藏師は、別に華嚴三昧章一卷を著はして、大に華嚴圓教の觀を明らかにせり。

以上之を要するに、華嚴五教止觀一卷は、始め小乗教の法有我無觀より、終り一乘圓教の華嚴三昧觀に至る、五門の觀を明かすものにして、若し總じて五觀を取れば、是れ同教位の觀と云ふべく。又若し別して華嚴三昧觀の一門を取れば、華嚴別教一乘の觀なり。賢首大師の華嚴三昧章一卷は、即ち此の位に在りて論ずるものなり。

一 華嚴法界觀

華嚴法界觀門は、華嚴五教止觀と共に、同じく初祖杜順大師の撰述なり。此の書一部の所明は、吾人行者をして、華嚴大經所説の法界の眞理を實踐修行せしめ、觀解の智を生じ、妄謂の情見を除きて、圓融無礙の眞理界に悟入せしめんが爲めに既に述べし如く、第一眞空觀。第二理事無礙觀。第三周遍含容觀の三重の法界觀を説けるものにして、乃ち次第の如く、四法界觀の中の、理法界。理事無礙法界。事事無礙法界の三法界に當れり。蓋し此の觀門の所明の三重の觀は、華

嚴家の觀法の根本源泉を爲すものにして。十玄無礙觀四法界觀の如きは元より華藏世界觀と云ひ、三聖圓融觀と稱し、其の事事無礙を論ずる觀法は、一として此の觀門の所明に基かざるは無し。故を以て本書は、能釋の章疏頗る多く、即ち賢首大師の著、華嚴發菩提心章一卷の如き。清涼大師の華嚴法界玄鏡三卷の如き。宗密禪師の注華嚴法界觀門一卷の如き。華嚴列祖の疏釋を始めとし、宋朝諸家の末釋數ふるに違あらず。而して本書は、嘗に華嚴一家の觀法の本源を爲すのみならず、又實に佛教各宗の學者が之を仰鑽し、特に彼の禪家の修觀に多大の影響を與へたるものにして。即ち禪家に公案と稱するものは、多く本書所明の、三重の法界觀に基かざるもの無きなり。故を以て彼の宗徒、又好みて本書を疏釋し、殊に宗密禪師の注華嚴法界觀門は、最も彼の徒に珍重せられたり。本書末釋の主要なるものを列擧すれば、即ち左の如し。

- 華嚴法界玄鏡義記二卷 (缺) 德素述
- 華嚴法界玄鏡科一卷 (缺) 德素述
- 注華嚴法界觀門鈔四卷 (缺) 守真述

- 注華嚴法界觀門科一卷 (缺) 守真述
- 注華嚴法界觀門集要鈔三卷 (缺) 從朗述
- 注華嚴法界觀門集解五卷 (缺) 有朋述
- 注華嚴法界觀門鈔四卷 (缺) 洪鑑述
- 注華嚴法界觀門科一卷 (缺) 洪鑑述
- 注華嚴法界觀門助修記二卷 (缺) 淨源述
- 注華嚴法界觀門科一卷 (缺) 淨源述
- 注華嚴法界觀門符真鈔四卷 (缺) 元智述
- 注華嚴法界觀門撫要鈔四卷 (缺) 遵式述
- 略法界觀手記一卷 (缺) 有誠述
- 新注法界觀一卷 (缺) 呂氏述
- 法界十大觀論一卷 (缺) 曇雅述
- 釋起入法界觀四法明門一卷 (缺) 曇雅述
- 注華嚴法界觀科文一卷 (存) 宗豫述

注華嚴法界觀門頌二卷

(存) 本嵩述

法界觀披雲集一卷

(存) 道通述

又大覺國師義天の圓宗文類第二十二記第一輯第二編第八套第五册四二一右に依るに、詩人白居易に、
真空絶相に依りて、禪を詠するの詩偈あり、

依真空絶相詠禪

須知諸相皆非相。

若住無餘却有餘。

言下忌言一時了。

夢中說夢兩重虛。

空華豈礙兼求菓。

陽焰如何更覓魚。

攝動是禪禪是動。

不禪不動即如如。

又、沙門思存に左の次韻の作あり、

約理事無礙和

無相幾時離有相。

有餘何處礙無餘。

忘言謂了非爲了。

說夢云虛是滯虛。

雖設空華空結菓。

寧妨幻水幻生魚。

不禪不動常禪動。

禪動鎔融方契如。

又示圓宗周遍含容

萬德圓融一念心。

念該九世已當今。

色空互異二無別。

性相交通兩不侵。

山岳匪高塵却大。

江湖非濬路還深。

我宗事事元如此。

君欲尋時試略尋。

依報

金剛輪據大蓮華。

帝網方元是我家。

何事却來三界內。

背違刹海守塵沙。

正報

萬德圓融具足身。

此身我體本同倫。

何因異此生迷滯。

別認虛空一聚塵。

又沙門有誠に三重の法界觀の頌あり、

真空絶相觀頌

欲識真空理。真空空不空。溪山雖異路。雲月本來同。

理事無礙觀頌

理圓諸相盡。心廓境還如。昨夜家家月。清光混太虛。

周徧含容觀頌

今現在前。誰後誰先。若凡若聖。無心無偏。靈光遽瀉。日用洞然。警爾放過。東震西乾。

此の他、朱長文の法界觀鈔序。呂參政の新注法界觀序。沙門曇雅の法界觀門鈔序。淨源の法界觀助修記序。道通の法界觀披雲集。其の他、或は偈頌、或は文章等、杜順大師の法界觀を研鑽、又は讚美せるもの、多くあれども、今は畧しぬ。是くの如く、華嚴法界觀門は、嚴家の末學は云ふに及はず、佛教各派の學者、特に禪家の徒の最も珍重せし所なり。蓋し支那佛教史上、若し觀道門の書を以て論すれば、其の流行せるもの、恐らくは本書の右に出づるものなかるべし。右に記す所に依りて、其の一斑を知るべきなり。而して本書に明かす三重の法界觀の中、初めに真空觀とは、是れ四法界の中の、理法界觀にして、即ち純正なる真理は、普遍平

等にして、一切に遍滿し、至らざるところなし。然るに吾人は、常に我他彼此の妄情の爲めに礙へられ、容易に此の性空平等の真理に體達すること能はず。故に若し人此の理性の真理を知らんと欲すれば、須らく執情の妄念を拂ひて、諸法は空無にして、實性なしと觀じ。萬象差別は、皆是れ妄情の所現なりと拂拭し、以て空無の境に至らざるべからず。清涼大師は、真空は則ち理法界なり。真空と言ふは、斷滅の空に非ず、離色の空に非ず、有に即して、空を明かす、亦空相無し。故に真空と名づくを釋し。圭山大師は、其の實體をたづねれば、但だ是れ本心なり。今虛妄の念慮に非ざるを以ての故に、眞と云ひ。形礙の色相に非ずと、簡ぶが故に、空と云ふなりと云へり。此の觀に畧して四門あり。一に會色歸空觀。二に明空即色觀。三に空色無礙觀。四に泯絕無寄觀なり。此の四句の中に、初の二に各々四門、後の二に各々一門ありて、總じて十門あり。初めに會色歸空觀とは、即ち般若心經に、色即是空と説くもの、是れにして、諸色の舉體、是れ真空なるを云ふ。是に又四句あり、一に色は即ち斷空ならず、舉體真空なるが故に。真空は斷空に非るが故なり。二に青黃等の相は、是れ真空に非ず、青黃無體なる、是れ真空なるが

故なり。三に空の中には色無し、色は無體なりと會するが故なり。己上此の三句は、並びに法を以て、行者の妄情を簡べるなり。四に色は即ち是れ觀なり、色の無性なるに依るものにして、色の空なるが如く、萬法亦然かるなり。此の一句は、理性の空體を示せるなり。第二に明空即色觀とは、即ち般若心經に、空即是色と示せるもの、即ち是れにして、真空の舉體、是れ諸色なるを云ふ。是れに又四句あり、一に斷空は、即色に非ず、真空は即ち色にして、彼の真空は、色に異ならざるが故なり。二に真空の理體は、青黃に非ず。三に空は是れ所依にして、能依の色に非ず。能がために所と作る、是の故に即色なり。己上此の三句は、法を以て行者の情計を簡去せるなり、四に空は即ち是れ色なり。真空は舉體、是れ妙有にして、真空は色法に異ならず。无我の理は斷滅に非るが故に、自性を守らすして、縁に隨ひて成ずるが故なり。色の既に爾かるが如く、真空の諸法に異らざるも、亦爾かるなり。此の一句は、義の妙有の相を顯はせるなり。第三に空色無礙觀とは、色法の舉體、是れ真空なるが故に、色相を盡さずして、而かも空顯現し、空理の舉體、色に異ならざるが故に、空即是色にして、而かも空隱くれず。是の故に一味平等無礙なり。

故に空色無礙と云ふ。此の中に空色の二事ありと雖も、意致は唯だ是れ空理に歸し、色は是れ虛名虛相にして、纖毫の體あることなし、空色無礙なる所以なり。第四に泯絶無寄觀とは、所觀の真空は、即色不即色と言ふべからず、亦即空不即空と言ふべからず、一切の法は不可得なり。不可得も亦不可得なり、言語を以て叙ぶべからず、思慮を以て計かるべからず。言も及ばず、解も到らず。迥かに超絶して寄る所なし、是を泯絶無寄と云ひ、亦行境と云ふ。唯だ修慧のみ、能く體顯するが故なり。苟くも心を生じ、念を動すれば、即ち法體に乖きて、其の正念を失ひ、正觀得と望むべからず。上來四句十門は、總べて是れ法界の行相にして、四句十門の中、初めの二句に、各々四句ある中の前の三句は、皆情計を簡び、各々の第四句は、其の正解を顯はすものにして、所謂簡情顯解の二に當り。第三句は、解終りて、行に趣き。第四句は、正しく行體を成ずるを要とす。是を要するに第一の真空觀は、諸法の事色は、悉く空にして、而かも亦空の當體色と異ること無し。されば此の色と空との二は、別體あること無く、共に一真理中に含有して、色即是空、空即是色にして、不一不二なり。已に不一不二なるが故に、其の真理は、有無の情計を

離れて、泯絶無寄、寄せんとするに物なく顯はさんとするに法なし。是を真空妙有、有色無礙、泯絶無寄の觀と爲し、真空觀と名づくるなり。次に理事無礙觀とは、即ち四法界の中の、事理無礙法界にして、如理緣起して、一切の事事の法を成ずれば、體虚にして、即ち是れ理性なり。無性の緣生は、理事を礙へず、緣生の無性は、事理を礙へず、總べて是れ事理無礙の相狀なり。是に亦十門あり。一に理徧於事門とは、能徧の理性は、分限無く、所徧の事は、分位差別せり。一一の事の中に、皆全徧して是れ分徧に非ず。眞理は分つべからざるが故なり。是の故に一一の纖塵皆無邊の眞理を攝して、圓足せざること無きなり。二に事徧於理門とは、能徧の事は、是れ分限あり。所徧の理は、要らず分限無し。此の有分の事、無分の理に全同して分同に非ず。事無體なること、還りて理の如きが故なり。是の故に一塵を壞せずして法界に徧じ、一塵の如く一切の法も、亦然かるなり。一大海を全くして、一波の中に在くも、而かも海小に非ず。一小波を大海に市らすに而かも波大に非るが如し。三に依理成事門とは、事は別體なく、要らず眞理に因りて成立することを得るなり。諸の緣起は、皆自性無く、無性の理に由りて事方に成

するが故なり。波の要らず水に因りて能く成立するが如く、如來藏に依るが故に一切法あることを得るなり。四に事能顯理門とは、事理を攪るに由るが故に、則ち事は虚にして理は實なり。事虚なるを以ての故に、全事の中の理、旣然として露現すること、猶ほ波相虚にして、水體を露現せしむるが如し。大乘起信論に、無明に因りて能く名義を知り、爲めに眞覺と説くと云へる、即ち是の意なり。五に以理奪事門とは、事既に理を攪りて、遂に事相をして、皆唯一眞理を盡して、平等に顯現せしむ。是れ眞理を離れて、外に片事の得べきものなきが故なり、猶ほ水を以て波を奪ふに、波として盡きざる無きが如し。此れ則ち水存して以て波を壞して盡さしむるが故なり。華嚴經出現品に、設ひ一切の衆生念念の中に於て、悉く正覺を成ずるも、正覺を成せざると、亦異なること無し。化人心を化して、正覺を化成するが如きなりと云へる、是の意なり。六に事能隱理門とは、眞理縁に隨ひて、諸の事法を成ず。然るに此の事法は、既に理に違して、遂に事顯はれ理は顯はれざらしむるを云ふ。猶ほ水波を成ずれば、動は顯はれ靜は隠くるが如し。經に法身五道に流轉するを名づけて衆生と云ふ。故に衆生現する時、法身顯は

れざるなりと云へる、此の意なり。七に眞理即事門とは、凡そ是れ眞理は必ず事の外に非ず。是れ法無我の理なるを以ての故に、事は必ず理に依りて虚にして、體なきが故なり。此の故に此の理の舉體皆事事、即ち是れ眞理たること、猶ほ水は波に即して、動にして濕に非る無きが故に、水に即して是れ波なるが如し。八に事法即理門とは、緣起の事法は、必ず自性無し、自性無きが故に、舉體即ち眞なるを云ふ。猶ほ波動の相は、舉體即ち水にして、異相無きが如し。淨名經に、一切衆生皆如と説き、一切衆生即寂滅相と説ける是れなり。九に眞理非事門とは、即事の理は、是れ事にあらざること、猶ほ波に即する水の、動濕異なるが故に、波に非るが如きを云ふ。是れ彼此眞妄を異にし、實は虚に非ず、所依は能依に非るが故なり。十に事法非理門とは、全理の事事恒に理に非ず、舉體全理にして、而かも事相宛然たること、猶ほ全水の波は、水に非るが如きを云ふ。

上來是くの如く、理事と相望するに、即ち十義を具足して、理を事に望むに約すれば、則ち成あり壞あり、即ち離あり。事を理に望めば、顯あり隱あり、一あり異あり。逆順自在無障無礙にして、圓融不可思議なり。行者能く此の義を深思して、觀をして明現せしむ

る、是を理事圓融無礙觀と云ふ。次に第三に周徧合容觀とは、即ち四法界の中の、第四事無礙法界、即ち圓教の觀にして、上の觀に於て、己に事理融通して無礙なるが故に、更に一步を進めて、彼此の事事物物、互に相望するも、亦無礙を成じて、一多相即して、交渉自在なりと顯はす一門なり。凡そ吾人迷界の凡夫は、隔礙の妄情に礙へられて、事事差別して、一も融すること能はざれども。高き悟界の佛陀の所見の如きは、悉く差別の妄見を打破して、平等無差の智見に住するが故に、毛孔に刹海を現じ、國土を塵中に攝して、一多相即相入して、自在無礙ならざるなし。是の觀を明かすに、亦十門の分別あり。先に既に説明せしも、猶ほ其の概要を述べれば、一に理如事門とは、事法は既に虚にして、相として盡きざる無く。理性は眞實にて、體として現せざること無し。此れ事に別の事なく、即ち理を全くして、事と爲すに依るものにして、所謂菩薩を事と見て、即ち理を觀じ。事を説きて、而かも理に即せずと爲すなり。二に事如理門とは、諸の事法は、理と非異なるが故に、事は理に隨ひて圓徧して、遂に一塵をして、普ねく法界に徧せしめ。而かも法界の全體諸法に徧するが故に、此の一微塵も、亦理性の如く、全く一切法の中に在り。一

微塵の如く、一切法も亦爾かるなり。三に事。合。理。事。門。とは、諸の事法は、理と非一なるが故に、本の一事を存して、而かも能く廣容す。一微塵の如き、其の相大ならずして、而かも能く無邊の法界を容攝するとき、刹等の諸法、既に法界を離れざるに由りて、是の故に俱に一塵の中に在りて現す、一切の法も亦爾かるなり。詳かに分別するに、一が中の一、一切が中の一。一が中の一、一切が中の一、一切の四句の分別あり、準じて之を知るべし。四に通。局。無。礙。門。とは、諸の事法は、理と非一非異なるが故に、此の事法をして、一處を離れずして、即ち十方一切の塵内に全徧せしめ、非異即非一なるが故に。十方に全徧して、而かも一位を動せず。即遠即近即徧即位無障無礙なり。五に廣。狹。無。礙。門。とは、事は理と非一非異なるが故に、一塵を壞せずして、而かも能く廣く十方の刹海を容れ、非異即非一なるが故に、廣く十方法界を容るれども、而かも微塵大ならず。則ち一塵の事、即廣即狹即大即小無障無礙なり。六に徧。容。無。礙。門。とは、此の一塵を一切に望むに、普徧即ち是れ廣容なるに由るが故に、一切の中に徧在する時、即ち復た還りて、一切の諸法を攝して、全く自の中に住せしめ。又廣容即ち是れ普徧なるに由るが故に、此の一塵を

して還りて、即ち自内の一切差別法中に徧在せしむ。是の故に此の塵自他に徧する時、即ち他自に徧じて、能容能入同時にして、徧攝無礙なり。七に攝。入。無。礙。門。とは、彼の一切を一法に望むに、入他即攝他なるを以て、一切全く一の中に入るゝ時、即ち彼の一をして、還りて復た自の一切の中に入れて、同時無礙なり。又攝他即入他なるが故に、一法全く一切の中に在る時、還りて一切をして、恒に一の内に在らしめ、同時無礙なり。八に交。涉。無。礙。門。とは、一法を一切に望むに、攝あり入り、一に一切を攝し、一を一切に入れ、一切一を攝し、一切一に入り。一を攝し、一に入り。一切、一切を攝し、一切、一切に入り。同時に交參して、無障無礙なり。九に相。在。無。礙。門。とは、一切を一に望むに、一を攝して、一に入れ。一切を攝して、一に入れ、一を攝して、一切に入れ。一切を攝して、一切に入れ、同時に交參無礙なり。十に普。融。無。礙。門。とは、一切及び一、普ねく皆同時に交互に相望して、一一に前の兩重の四句を具して、普融無礙なり。以上の十門、是を一一の事に、圓明に顯現せしめ、行の境界に適合して、無障無礙に現前せしむる、是を周徧含容觀と稱す。大師別に畧法界觀の作あり。杭鳥が讚する所の注詩と共に左に掲ぐ、

若人欲識眞理空。

空中無識亦無人。理上無假亦無眞。但看空中飛鳥跡。一生之內見全身。

身內眞如還徧外。

眞指衆生及萬像。內外皆從眞起妄。悟之內外並皆眞。眞妄何曾有體狀。

情與無情共一體。

有情相上起無情。無情不離有情妄。情與無情體性同。同異之中惣無相。

處處皆同眞法界。

三界悉是唯心造。情與無情皆合道。森羅萬像並皆如。處處看如無不好。

祇用一念觀一境。

覺心自性本來空。無生無滅境心同。如是觀時見本行。大智圓明法界中。

一切諸境同時會。

三界塵勞迷裏有。十方塵刹悟時空。悟空祇從迷裏悟。三界一空前後同。

於一境中一切智。

一境之中多智生。一多法界自圓明。一境本來無體性。一多之智亦空聲。

一切智中諸法界。

一切智由悟一境。凡夫悟即悉達多。從茲處處見如來。何用眞智待王歌。

一念照於入多劫。

曠劫已來生死際。智惠鑒之無一物。煩惱如空無所依。一切諸佛從中出。

一一念却收一切。

處處寂滅即是收。處處皆同眞法性。卷舒自在心無倦。不須更論邪與正。

時處帝網現重重。

大用無方該時處。處中有細網中龜。欲識圓明法界體。但看網上一眞珠。

一切智通無罣闕。

一念處通徧法界。生死涅槃同一塊。山河石壁不相妨。即是智通無罣礙。

と讚美せり。杜順大師の法界觀は、實に華嚴教學の根本なると同時に、又同じく華嚴聖典に於ける、深遠なる教相學の淵源たり。華嚴の學徒たる者、最も研尋せざるべからざるは勿論、苟も佛教の深理を研究せんとする君子も、亦決して之を忘却すべからざるものと信す。

其二 至相大師の觀法

一 十立無礙觀

十立無礙觀とは、即ち華嚴一宗の深義たる十立緣起無礙法門義に依りて、法界萬有の一即一切、一切即一、事事無礙なるを觀するものにして。至相大師が、初祖杜順大師の説を稟けて編輯したる華嚴一乘十立門には、具さに喩說法説雙べ示して、圓教事事無礙の法門を指南せり。蓋し華嚴家にありては、文義一致と談じて教相は、即ち同時に觀法たるものにして、敢て教觀殊別なるにわらず。故を以て十立緣起無礙法門義は、是れ華嚴一宗深立の教旨たると共に、又實に一宗最上の觀道にして、其の十立無礙門と名づくるは、門は是れ通入の義。即ちこれに依りて法界眞理に悟入するを示すものに外ならず。殊に十門の中、第十の託事顯法生解門は、即ち所謂託事觀なるものにして、禪家に説く諸種の公案の如き。又眞言密宗に説く、阿字月輪觀。五字嚴身觀の如き、何れも此の觀の應用に外ならず。而して十立無礙法門義の詳細は、前に既に説くが如し。賢首大師は、金師子

の喩に寄せて、此の金と師子と、同時に成立して、圓滿具足するを、同時具足相應門と名づけ。金と師子と、相容成立して、一多無礙なり。中に於て理事の諸相各々不同にして、或は一、或は多、各々自位に住するを一多相容不同門と名づく。若し師子を看れば、即ち唯だ師子にして金無し。即ち金は隠れ、師子は顯はる。若し金を看れば、即ち唯だ金にして師子無く。即ち金顯はれ、師子隱る。兩處を看れば、即ち俱顯俱隱なり。隱を即ち秘密と名づけ、顯を即ち顯著と名づく。故に秘密隱顯俱成門と名づく。又此の師子の眼耳支節、一一の毛處に、各々全く師子を收め。一一毛處の師子同時に、頓に一莖毛の中に入り。一一の莖毛の中に、各々皆無邊の師子あり。復た一一の毛に、此の無邊の師子を載せ。還た一莖毛の中に、是くの如く重重無盡無盡にして、帝網天珠の如きを、因陀羅網境界門と名づく。又此の師子の眼に師子を收め盡せば、即ち一切純に是れ眼なり。若し耳に師子を收め盡くせば、即ち一切純に是れ耳なり。若し諸根同時に相收すれば、盡く皆具足して、即ち一一皆純に皆雜なり。亦一一皆是れ圓滿藏なるが故に、諸藏純雜具德門と言ふ。又師子の諸根、一一毛頭に、皆各々全く師子を收め盡して、

一一皆徹遍して師子なり。耳即眼、眼即鼻、自在に成立して、無障礙なるが故に、諸法相即自在門と名づく。又師子の或隱。或顯。若一。若多。定純。定雜。有力無力。即此即彼。主伴輝を交へ、理事齊しく現す。皆盡く相容して安立することを礙へず。微細に成辨するが故に、微細相容安立門と名づく。又此の師子は、是れ有爲の法なり。念念に生滅して、刹那も無間なるを分ちて三際と爲す。過去と現在と未來となり。此の三際に、各々過去と現在と未來とあり。三の三位を總じて、以て九世を立て、即ち更に束ねて一數の法門と爲す。復た九世十世に、各々融隔の不同ありと雖も。相由成立し、通融無礙にして、同じく一念たるが故に、十世隔法異成門と名づく。又此の師子と金とは、或隱。或顯。或一。或多にして、自性あること無く、心の廻轉に由りて事と説き、理と説く、成あり立あるが故に、唯心廻轉善成門と云ふ。又此の師子は、用ゐて無明を表し、此の全體に託して、眞さに眞性を彰はし、二事合説して、阿頼耶識に況して、正解を生せしむるを、名づけて託事顯法生解門と爲すと云ひ。清涼大師は、十は無盡を表し、一一玄に至る。一法を擧ぐるに、隨ひて即ち斯の十を具せり。一に謂く同時具足相應門。

大海の一滴に百川の味を含むが如し。二に廣狹自在無礙門。徑天の鏡に千里の影を見るが如し。三に一多相容不同門。一室の千燈光光涉入するが如し。四に諸法相即自在門。金と金色との二相離れざるが如し。五に秘密隱顯俱成門。片月空に澄みて晦明相並ぶが如し。六に微細相容安立門。瑠璃瓶に多くの芥子を盛るが如し。七に因陀羅網境界門。兩鏡互に照すに、傳暉相寫して、遶出無窮なるが如し。八に託事顯法生解門。立像の豎臂、觸目皆道なるが如し。九に十世隔法異成門。一夕の夢に、百年を翱翔するが如し。十に主伴圓明具德門。北辰の居するところ、衆星同じく拱ふが如し。是を華嚴不共の玄旨と爲すと云へり。斯くの如く、一塵一法の上にも、分に豊たかに十玄無礙の深義を具し、一即一切、一切即一、主伴無礙、無盡無盡なり。行者須らく此の觀に住し、悟入法界の勝益を成すべし、是を十玄無礙觀と爲すなり。

一一 六相圓融觀

前に既に述べしが、更に茲に智儼大師の六相觀を畧述すべし。六相圓融觀とは、

即ち總。別。同。異。成。壞。の六相の法門に依りて、法界萬有の事事無礙無盡無窮なることを體驗すべき玄理を示すものにして、智儼大師の華嚴大經中の十地品に據りて、建立せしものなり。而して既に述べし如く、賢首大師は、華嚴五教章卷中紙三十に、伽舍の喩に依りて、何者か是れ總相なる、舍是れなり。何者か是れ別相なる、椽等の諸縁の總に別なる是れなり。若し別ならずんば、總の義成せず、別無き時は、即ち縁無きが故なり。同相とは椽等の諸縁和合して舍を作るに、相違せずして能く舍の縁と爲りて、一舍を成するに名づけ。異相とは此の椽等の諸縁、自の形類に隨ひて、相差別するを云ふ。而して成相とは、此の諸縁に依りて、舍の義成するを云ひ。壞相とは、椽等の諸縁、各々自法に住して、壞散せざるに名づくと云ひ。同又大師は、華嚴金師子章紙四には、金師子の喩に依りて、一師子は是れ總相なり。五根差別するは是れ別相なり。共に一縁起を成するは是れ同相なり。眼耳各々相足せざるは是れ異相なり。諸根合會して師子あることを得るは、是れ成相なり。諸根各々自位に住するは、是れ壞相なりと示し。更に又凝然大德は、華嚴法界義鏡卷上紙二十四に、六相具足して、圓融の相を成じ、萬法總

じて一念の心法を成す。一念を開きて萬法差別す。此は是れ總別一對の相なり。萬象は同じく、是れ一心の相なり。萬法互に異なれども、同じく成するに依るが故に、即ち是れ同異二相の義なり。萬法俱に此の一心の法を成す、諸法各々其の自位に住するが故に、此は是れ成壞一對の相なり。即ち是れ一心に六相を具足す、一切の十句、一切の諸法、皆六相を具す。善巧成の故に、總同して三を成するは、是れ圓融門なり。別異して三を壞するは、是れ行布門なり。行布圓融、即ち無礙にして、此の義成立す。頓に法界を見るときは、惑障は則ち一斷一切斷なり。修行は即ち一修一切修なり。得證は則ち一成一切成なり。業用は則ち一業一切業なり。故に天親論主は、地動光流の瑞を呈し、智儼大師は、靈告思證の驗を得たり。頓悟の道不可思議なり、總じて之を言はば、一心の法は、貫通自在にして、舊來寂靜、舊來明朗、舊來證窮、舊來業用なり。新修と合し、眞證と冥せりと云へり。華嚴の行者は、須らく六相の深義に依り、無盡法界の法門を體驗すべきなり。

其三 賢首大師の觀法

前に既に説明せるが如く華嚴經の觀法は、初祖杜順大師に始まり。二祖至相大師是を相承して、益々其の深旨を顯はし。三祖賢首大師に至りて、法門の施設竟に完備せり。然るに或は説を爲すものあり、曰く、賢首大師は、法門建立の師にして、即ち教相の施設は、大師の最も力を盡くす所なるも、實修觀道の如きは、是を大師に求むるに多く得べからず。寧ろ之を初祖杜順大師又は第四祖清涼大師等に求めざるべからずと。此の説大に然らず、蓋し賢首大師は、法門建立の師なると共に、又觀道實修の一大偉者たり。賢首大師は、豈に觀道實踐の行本無しと云ふべけんや。想ふに、論者の所謂大師に觀道なしとは、是れ通途の三乘隔礙の見解に依りて、徒らに教相と觀道との二門を彼此差別し、教相即觀道なることを察知せざるが故なり。先にも説くが如く、華嚴經宗に於ける觀道の特色は、即ち文義一致にして、教相即觀道、觀道即教相なる點に在り。行解一致は、是れ華嚴家の一大特色にして、實に別教一乘の別教一乘たる所、彼の所謂三乘諸教と、永く差別する所以なり。故に華嚴五教章卷上初紙には、

開釋迦佛海印三昧一乘教義。略作十門。初明建立乘者。然此一乘教義分齊。

開爲二門。一別教。二同教。初中亦二。一是性海果分。當是不可說義。何以故。不與教相應故。即十佛自境界也。故地論云。因分可說。果分不可說。者是也。二是緣起因分。即普賢境界也。此二無三。全體遍收。其猶波水。と示せり。夫れ是くの如く、嚴家所説の教相は、即ち果分不可說の十佛の自境界を、其の儘緣起因分可說に降下して、無説に説を起し、無言に言を設けて、普賢眼の。大士に示す所にして、其の法門たる、自餘の諸教の如く、衆生の根機に隨逐して、施設安立せるものにあらず。故を以て所説の教相は、其の儘にして、十佛の自境界たる、果分不可說の深法門にして、此の二、敢て別なるにあらず。是を以て華嚴列祖の觀道を説くや、何れも教觀不異、文義一致の綱格に依り、殊に三祖賢首大師は、専ら此の點に努力して、教觀不二、文義一致の崇高なる教理を建立せられたり。故を以て賢首大師の撰述を精讀するに、若し據勝爲論に約すれば、或は教相に重きを置き、或は觀道にも亦重きを置くの態度ありと雖も、若し審細に通論すれば、此の二、敢て別なるにあらず。即ち華嚴經探玄記の如き、華嚴五教章の如き、何れも是れ教相門にして、又觀道門。觀道門にして、又教相門たるの所明なり。梅尾